

石見銀山歴史文献調査報告書18

銀山師高橋家蔵年中日記

令和5年(2023)3月

島根県教育委員会

石見銀山歴史文献調査報告書18

銀山師高橋家蔵年中日記

序 文

島根県のほぼ中央部、大田市に位置する石見銀山は、十六世紀から十七世紀にかけて日本史上まれな銀生産の隆盛をもたらした、日本を代表する鉱山遺跡です。こうして石見銀山などで生産された大量の銀は、ヨーロッパの人々を東アジア貿易へと誘引し、世界的に重要な経済・文化交流を生み出したことが、島根県と大田市による総合調査で明らかとなりました。

このような成果をもとに、平成十九年七月の世界遺産委員会ではその顕著な普遍的価値が認められ、「石見銀山遺跡とその文化的景観」の名称で世界遺産一覧表への記載が決議されました。また、平成二十二年八月には、より充実した保護を可能とする資産範囲の拡大が実現しています。

本書には、石見銀山の歴史に関する古文書群のうち、石見銀山の山師をつとめた高橋家文書の中から、幕末の日記の解読文と解説を掲載しています。この日記は当時の銀山町の年中行事や住民たちによる俳諧や茶の湯といった文化活動のほか、日々の生活の様子が記されており、幕末の石見銀山の様子を現在に伝える大変貴重なものです。

数多くの皆様に本書をご利用いただき、石見銀山遺跡のより一層の理解と保護に役立てていただくことを願っております。

おわりに、本書の作成にあたり、調査にご協力いただきました文献調査員、ならびにご協力いただきました関係各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和五年三月

島根県教育委員会

教育長 野 津 建 二

本書の利用にあたって

本報告書に掲載した古文書の中には、江戸時代の被差別身分の呼称が記載されています。

これらの被差別身分は、ケガレなどの伝統的な差別意識をふまえて作り上げられた幕藩体制の巧みな民衆支配の政策や、民衆意識にも大きな限界があつたために形成されたものです。被差別身分とされた人々は、国家や社会を維持する上で欠くことができない重要な役割を果たしているが、実態上でも、あるいは意識の上でも、差別を受ける身分として、支配者そして民衆の中に広く定着させられてきました。また、明治時代以降、近代、現代とすでに一五〇年以上が経過し、国家や社会は大きく変容しているにもかかわらず、こうした身分制度に起因する不当な差別は、いまなお払拭されたとは言いがたい状況にあります。

私たちは世界遺産石見銀山遺跡の全容を解明し、その歴史的な価値を明らかにするために調査研究を行っていますが、石見銀山が繁栄した時代はまさにこうした身分差別が制度的に定められ、民衆の中に深く広く浸透した時代であり、差別にかかる歴史を避けて通ることはできません。

私たちは、本報告書の刊行に向けて議論をする中で、差別や人権侵害に対する理解を深め、こうして歴史的に形成され、深まり広がった差別意識を一日も早く解消するためには、歴史的な事実を隠蔽することは誤りだとの結論に至りました。江戸時代における差別の現実を正確に伝え、差別を生み出した仕組みを明らかにしていくことが、同和問題、人権問題を解決するために、一步一步ではありますが、大切なことではないかと考えたのです。

この報告書をお読みになる皆様方におかれましては、こうした趣旨を汲み取っていただき、江戸時代の身分制度とその社会、さらには近代・現代における人権問題の重要性についてご理解いただけるよう願っております。また、同和問題や人権問題を解決するという姿勢で該当史料に向き合い、本書を適切に利用していただくことを切望しております。

例 言

一、島根県教育委員会では、平成八年度より石見銀山遺跡の総合調査の一環として文献調査を実施している。本書は、世界遺産総合調査研究事業の一環として実施した文献調査の報告書である。

一、調査は次の組織で実施した。

(一) 石見銀山遺跡調査整備活用委員会 (令和五年三月三十一日現在)

委員	太田 洋子 (地元有識者)
委員	大矢 敬子 (行政経験者)
委員	片桐 敦 (DOWAホールディングス株式会社執行役員)
委員	荻谷 勇雅 (大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員)
委員	黒田 乃生 (筑波大学大学院教授)
委員	佐々木 愛 (島根大学教授)
委員	田邊 征夫 (公益財団法人元興寺文化財研究所所長)
委員	津村眞輝子 (公益財団法人古代オリエント博物館研究部長)
委員	内藤ユミイザベル (日本イコモス国内委員会理事)
委員	仲野 義文 (石見銀山資料館館長)
委員	中村 哲郎 (中村ブレイス株式会社専務)
委員	松村 恵司 (元奈良文化財研究所所長)

(二) 事務局

島根県教育委員会

中島 正顕 (文化財課長)

津森 仁 (世界遺産室長)

担当 倉恒 康一 (同室専門研究員)

清水佳那子 (同室会計年度任用職員)

斎藤 一 (同室会計年度任用職員)

(三) 文献調査指導者

小林 准士 (島根大学教授)

原田洋一郎 (東京都立産業技術高等専門学校教授)

仲野 義文 (石見銀山資料館館長)

鳥谷 智文 (松江工業高等専門学校教授)

一、本書の編集に際して史料の所有者である高橋伊武氏及び寄託先の石見銀山資料館には多大なご高配を賜った。記して謝意を表する。

一、本書の編集に際して撮影した写真類は、島根県教育委員会において保管している。

一、本書掲載史料の翻刻は、事務局の清水佳那子・斎藤一・倉恒康一が担当し、解題は倉恒康一が担当した。

凡 例

一、本書には、石見銀山資料館寄託の高橋家文書のうち、『石見銀山関係資料調査報告書』所収高橋家文書目録第二〇七号「御用留」を収録した。なお、他家文書などにみえる日記類と表記上区別するため、本報告書の表題は「銀山師高橋家蔵年中日記」とした。目録上の史料名と本報告書で採用した史料名が相違するが、この点に関しては解題を参照されたい。

一、本文には適宜、読点（、）や並列点（・）を加えた。

一、底本の体裁を原則としたが、割注部分については、〈 〉で括ったほか、史料の意味を変えない範囲で形式の統一をはかった。

一、字体は原則として常用漢字を用いたが、人名・地名については原文のまま表記した。

一、異体字・俗字・略字・合字のうち、扣（ひかえ）・占（より）・メ（して）・并（ならびに）については、原文のまま表記した。

一、変体仮名は、現行の字体に改めたが、助詞等に用いられる江（え）・而（て）・与（と）・ニ（に）・者（は）・茂（も）については、原文のまま表記して小活字で示した。

一、虫喰・破損で判読できなかった文字は、□□・「」（文字数不明）などでその状態を示し、推定可能な場合には（カ）を付した。

一、くりかえし記号については、漢字は「々」、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ゝ」を用いた。

一、誤字・脱字・衍字については、原文のまま表記し、（○○カ）（○脱カ）（衍）などと注記した。また、文意が通じないものには、その字句の横に（ママ）と入れ、誤記が明らかな場合は正しい文字を（ ）内に注記した。

一、丁の間に挟まれた文書（丁間文書）については、で括り、右肩に（丁間文書）と注記した。

一、抹消部分については、本文に二重棒線で見せ消ちを施して表した。

一、判読できなかった崩し字については、「*」で示した。

一、抹消線等で文字が潰れて判読できない箇所については、■で表した。

目次

序文	1
本書の利用にあたって	2
例言	3
凡例	4
目次	5
銀山師高橋家蔵年中日記	
安政三年	9
正月	9
二月	10
三月	12
四月	14
五月	15
六月	17
七月	19
八月	21
九月	22
十月	24
十一月	25
十二月	27

安政四年	29
正月	29
二月	32
三月	34
四月	36
五月	37
閏五月	40
六月	43
七月	45
八月	47
九月	49
十月	50
十一月	54
十二月	56
安政五年	59
正月	59
二月	62
三月	63
四月	65
五月	68
六月	70
七月	73
八月	75
九月	78

安政四年	29
正月	29
二月	32
三月	34
四月	36
五月	37
閏五月	40
六月	43
七月	45
八月	47
九月	49
十月	50
十一月	54
十二月	56
安政五年	59
正月	59
二月	62
三月	63
四月	65
五月	68
六月	70
七月	73
八月	75
九月	78

解題 銀山師高橋家藏「年中日記」について

倉恒 康一

(116)

十二月

(113)

十一月

(111)

十月

(108)

九月

(105)

八月

(103)

七月

(100)

六月

(98)

五月

(96)

四月

(95)

三月

(93)

二月

(90)

正月

(89)

安政六年

(89)

十二月

(87)

十一月

(85)

十月

(82)

銀山師高橋家蔵年中日記

(安政三、六年)

調廻文出ス、跡馳走有之

嶋台老 山組頭 同一 龍源寺山惣仕手 同一 惠珍山惣仕手
 同二 永久惣仕手 同一 新横相 同一 新切山 同一 大久保山
 八折

銀山方御役人辰年御掛場写

御銀蔵

沢井和兵衛様 町兼 藤井七郎右衛門様
 中西松三郎様 河野綱太郎様
 見習 永久
 川井為三郎様 吉岡忠五郎様
 見習

高木豊次郎様 中山順之助様

田邊三四郎様 中山庸蔵様 嶋田郡次郎様 勝岡口蔵様

龍源寺山

見習

新横相

見習

八木清之助様 大住臺蔵様 高野大助様 鹿野兵吉様

吉岡東右馬様 中山茂一郎様 福本由次郎様 河部清右衛門様

新切山

大久保山

山中文三郎様 塩谷汀一郎様

坂本勝三郎様 厚東繁蔵様 田中助太郎様 嶋田庄五郎様

運上方

山方月番

田邊泰次郎様 田邊民之助様 見習 大賀英三郎様

町方

丸茂廣次郎様 野沢弥十郎様 見 坂本万之助様 沢井槌太郎様
 見習 極印所 見 藤井文次郎様 河部郡太郎様
 河嶋準之助様 槇野篤太郎様

吹方

見 中山平一郎様

右

夜、龍源寺山八木様へ参ル

一、九日 快晴、午時多作へ家内中招ル、灰吹幸領衆御帰

一、十日 曇小雨、次平方へ家内中招ル、上野宗十郎君

より鷹石小立物・玉梅之画到来

一、十一日 〔雨夜雪〕、神仏拜山神社参詣、帳面表紙書認、

御代官様御社参、夫方御役所へ罷出、夕六ツ過一同

引取、上宗方子供へ之送り物品々藤井様より受取、

藤井様へ詔物薄茶壺斤・ゆの子すくい三匁五分・きぬ

糸七十かせ・黒ふさ梅の香壺匁・茶巾布壺尺式寸

壺匁式分五り・錫神酒器九匁

一、十二日 雪後止、帳面とち、夕高野・中野両君入来

茶点長話、桃千来ル、上宗方書状到来

一、十三日 寒風甚し、帳面ひれ調

去卯年十月二日夜四ツ時江戸大地震之よし

噂まちく有之候所、地震にて潰れ又ハ出火にて

丁々御屋敷町方損所摺物にて江戸より到来、

漬家惣高老万二千百四十八軒・外千七百廿四
むね、漬土蔵千二百九拾ヶ所

但、へ出火類焼之分又ハ壁落候分ハ数多ニ付かそへかたきよし

一、十四日 晴曇定らす又雪はれ夜快晴、年徳神

祭、谷々往来賑ふ

一、十五日 晴夜曇風、修法通夜

一、十六日 朝雨へ五ツ過方快晴、天河内森へ菓礼金老分式朱為持
帳合

一、十七日 曇寒し

一昨十五日荻原村寅市八十八祝餅・神酒等呉る、悦ひに

祝義式刃・肴八匁・扇子遣、夜青蕪兄人來

一、十八日 朝雪はれ後折々日影有

大賀様・大住若旦那御兩人御立寄茶点

御歸後神酒開へ出席

一、十九日 快晴、四方長閑也

正月

一、廿日 曇へ五ツ時方雨、橋本得路君初老賀筵ニ招ル、祝吟

年老て余斗に咲ぬ梅の花、樽肴・扇子送ル、天野

石溪君為再官去冬上京、今日歸国悦樽肴、石溪子

拜官從五位下因幅守^桶被任候由

一、廿一日 雨寒し、天野へ行雜話

内裏御造營出来、去卯十一月廿三日御遷幸之由

石溪子方承る

一、廿二日 雪寒シ、天河内村増田氏來ル

一、廿三日 雪、藤井様入來茶話

諸帳面写今夕迄^三済、夜雪積

一、廿四日 朝雪五ツ時方晴九ツ時方雪折々雪吹
本城勘定仕上

一、廿五日 朝晴折々雪、野沢氏徳寿院君

一周忌、昨夜方今日御短冊前へ香・茶菓子
等献、野沢氏仏前へ菓子八種・香送る
かな網老枚大賀様へ為持る

得路子入來雜話、ゑひや勘定仕上

一、廿六日 曇後晴、次平方頼母子ニ立会、藤十

頼母子宮不参

一、廿七日 快晴、午時方大森へ行柳屋ニて年礼、

山中・藤井様へ挨拶ニ出御茶御馳走、野沢様へ行

御茶御菓子等、泉屋ニて御茶種々御馳走、

夜九ツ時帰宅

一、廿八日 快晴風立、気分あしく午時迄臥

一、廿九日 朝小雨後快晴、正寿寺和尚入來、長福寺勘定済

龍昌寺へ挨拶菓子老箱為持、上野内年礼

上市場神木竹買取、石溪子入來

一、晦日 快晴^{快晴} 諸帳面合、午後後方酒造添仕舞悦ひ

致、藏人足米搗等、夜ニ入迄酒宴

一、二月朔日己 快晴夜五ツ時方雨

当日礼済、下組定使門脇内蔵次^正可申立

相談いたし、今日内窺ニ御組頭様方へ罷出、

大住様にて御茶御馳走す

- 一、二月二日 朝風雨曇、天野因幡守殿銀山方へ被罷出候様御沙汰有之申達被罷出候所、今般昇進ニ付御褒美御手当として金七百疋被仰付候

昼後上下小前一同呼出、御取締御触書読聞受印取之

夜泉屋へ行、大住若・嶋田若差纏内話

- 一、二月三日 晴夜雨、稼人御勘弁味噌搗昼後相渡、

昨夜泉屋にて内談、差纏之義上野氏にて内田様へ内談致す

- 一、二月四日 雨晚大風、御勘弁味噌搗昼後相渡、明五日門脇内蔵次御呼出御書付到来、同人へ此方にて申渡

- 一、二月五日 雪

下組定使門脇内蔵次へ被仰付差添上野兄上□□(虫撫)

- 一、二月六日 晴(後曇夕雨)、初午稻荷祭三神主中御勤被参、当番此方にて勤ル、昼前方先日中内話ニ付内田様へ参、大住様へも行、内田にて御馳走、池亀・長野両所御出茶点夕方帰ル、夜長福寺にて賑ひある

- 一、二月七日 曇、午時後方泉屋へ行差纏扱ひ済、大住・嶋田・野沢氏へ出、夜帰ル

- 一、二月八日 快晴、夜泉屋へ招ル、御用人原善次郎様

をも招、鶏鳴頃迄茶酒飯等御馳走有

- 一、二月九日 快晴、龍昌寺橋繕ひ石垣損等見積大工・石工召連見分、昼後大住へ行、昨夜本城内抜参被致、右にて参り鶏鳴前帰ル

- 一、二月十日 快晴、昼後出雲屋へ招ル、数々馳走、夜ニ入帰ル
一、二月十一日 快晴夕雨雷鳴甚し、赤土降しよし
一、二月十二日 雨

龍昌寺前石垣橋直し大谷利市前石垣積り書河嶋様へ差出、沢井様へ悔ニ行、菓子壹匁

- 一、二月十三日 快晴、泉屋主人立寄茶点、昼後天野氏へ招ル、官位披露 宜旨伊記巻等(イイ)

拝見御酒イタ、キタ帰ル馳走

- 一、二月十四日 快晴、ひかんに西善寺様招誦經、普賢院方書状御供物到来、本城内参宮
入用金三両、中山御内御入来相渡

- 一、二月十五日 快晴夜曇

山崎主法相談立会
例月之通観音会通夜

- 一、二月十六日 雨
宿大吉屋へ転宿之積届出調印
夜藤十志義立会

- 一、二月十七日 雨
新切山富十・幾太手当願取調、昼後方足痛
一、二月十八日 曇

足痛^ニて休、大吉や宿披露^ニ来ル

一、二月十九日 快晴、足痛休、大住氏へ菓子見舞受納

一、二月廿日 快晴、酒室役上納藤五差出

大吉屋へ宿挨拶として肴代金式朱・上酒壺升

人足宗市^ニ為持遣ス、年寄一同より

栄泉寺方丈帰国悦式^ニ呈

一、二月廿一日 快晴、栄泉寺方丈産物受納

出店方見舞鮓、次平方そは切受納、柳屋主来

見舞ようかん、小割へ招ル、足痛^ニて断

一、二月廿二日 快晴、夜五ツ時方雨、青蕪兄、石溪子等来

一、二月廿三日 雨

山崎拜借内願頼談、橋本氏へ相頼

一、二月廿四日 雨後曇

御廻米買替金子房兵衛へ相渡

一、二月廿五日 雨へ夜雪へ、珍酒造込

一、二月廿六日 雨止晴陰定らす昼夜風あり

一、二月廿八日 快晴

一、二月廿九日 快晴夜半頃方雨

一、三月朔日 雨

注文通ひ等調

一、三月二日 曇後快晴

一、三月三日 快晴、御礼断休足

~~金遣~~

一、三月四日 曇

廣嶋中川清甫君入来点茶

午時出店へ招ル、文之助・其次・常次郎参宮

餞別遣す

一、三月五日 曇風あり

昨四日方波根沖へ異国船相見候由、昨夜御出役

有之由^ニ付、向々御飛脚^并御役所・御銀蔵詰

・山内取締自身番等人別取調として同役

上野氏へ集会、昼後会所へ町組頭以上集会

人別談いたす、大森へ御見舞として高橋猶之丞

・樋高峰松両人銀山方^并中ノ口へ罷出ル

一、三月六日 曇夜雨

一、三月七日 朝小雨曇

五人組調立会、へ置屋庄平父子来、座敷二夕間表かへ

一、三月八日 晴

昼後大森へ不音廻勤、坂本^并柳や^ニて馳走有

一、三月九日 午刻前方雨

御非時相伴^ニ上野へ招ル

一、三月十日 雨後止

内判寺宿西福寺早朝方出勤、酒飯馳走ある

御出役鹿野弾藏様・藤井七郎右衛門様・丸毛廣二郎様

一、三月十一日 晴陰定らす風

法事前掃除等^ニて多忙

一、十二月 快晴

昼後方寺方相伴衆入来、法事勤夕過済

一、十三日 曇夜四ツ頃方雨

早朝方寺方相伴衆入来、八ツ過済

一、十四日 風雨

跡仕舞済、昼後家内中寺参、歸後明日

榮泉寺方丈請、諸事相調深更

一、十五日 雨止後快晴

榮泉方丈早朝方入来、準提法并最勝王

經真読・理趣分真読七ツ過済、夜月並

準提尊拝通夜

一、十六日 曇折々小雨

廟参并法事之節、挨拶ニ廻ル

一、十七日 快晴夜風雨

七ツ頃方上野へ行、夕過歸ル

一、十八日 快晴

山神社遷宮評義同役一同社頭へ集会、酒飯出ル

一、三月十九日 快晴

往還御普請所出来見分ニ出ル、昼後大谷松山

境見ニ行、夕遷宮寄合

一、三月廿日 快晴

朝幸太郎手習草紙等調、昼後藤井葬式

ニ行、夕本經へ招レ御茶酒御馳走ある

一、三月廿一日 曇夜大風夜半頃方雨

足痛再発引籠、夜ニ入遷宮一条ニ付無

扨上野迄参ル、深更御仲間兩人見廻り御越

一、三月廿二日 雨風夜あられなと降

昨夜藤五抜参いたし、見舞人ある

午時山崎へ招ル

一、三月廿三日 大風朝あられ降後晴

大風ニ付谷々町組中見廻申触、夕方

御仲元兩人御見廻り有、夜年寄・町組頭

見廻る

一、三月廿四日 快晴

夕立遷宮相談山方不盛ニ付延引之積

一、三月廿五日 快晴

*生こなき大国こんたか*へ竹一ニ為持遣

大住様御立寄御茶出

石銀竹田山上ニて野火入一同罷越、早速鎮

火ニ相成、足痛ニ付不参、未刻御運上方買請

米代御廻状大國村方受取

一、三月廿六日 快晴後折々曇暖氣、午時方風出

夕過稻妻雷鳴巖敷大雨後晴

昨日之廻状之向徳次御用便ニ返上

一、三月廿七日 晴

一、三月廿八日 曇、汐風ニて終日鬱徒敷へ夜五ツ時より雨

番所方へ暇乞廻ル、吉岡様方陰徳太平記

拾冊借用

一、三月廿九日 雨午時後方晴

上野氏法事有之、終日招ル

一、四月朔日辛 快晴

上野宗十郎子方三月朔日出・三月十一日出書状式通^并
画讃老枚・御紋付盃・織部香合・種もの品々

・数珠式連、外下博多やへ盃・書状、上博多やへ書状、
おさく様へ書状式通、右大住様方御越受取候

金華下ケ物^并たはこ入式貫文^ニて買求大坂商人

一、四月二日 快晴

屋後出森、原様・稲垣様・上野内へ貴面、上

宗君方之書状お作様へ相渡、帰り大住様

ニて御馳走イタ、ク

一、四月三日 快晴

午刻多作へ招ル、八ツ時頃大森正寿寺

上エ山へ野火入、早速出森帰り、夕玉置様へ

行

一、四月四日 快晴夜曇

玉置様入来茶点、夕方藤井様へ交代着

悦^三行

上野お作様方おまん方へ見舞品々受納

一、四月五日 曇

栄泉寺江湖会寄付玄米式斗為持ル

夕上野氏^江招ル

一、四月六日 曇、朝五ツ頃方雨

一、四月七日 雨

坂本後室入来、夜上野兄入来

一、四月八日 曇八ツ時頃方快晴夜風

囲米勘定立会、参宮文之助外四人帰ル

一、四月九日 快晴

屋後参宮人悦^ニ方々へ行、上博多屋^ニて馳走
下モ^ニて茶菓子等出ル、出店納屋脇^ニて小供

悪業いたし少々火事有之、芥燃直^ニ鎮火

一、四月十日 快晴夜折々大風有 火当

寛政九辰年

当谷昔大火当年六十年^ニ相当り候由

谷中出銭、明日日御崎社^ニおひて鎮火祭

執行之積、出銭三百文多作へ渡

陰徳太平記読 同卷ノ六^ニ比叡山の雪を見て

よみあひし歌

従四位上左京大夫多々良義興

かくはかり 遠きあつまの 富士の峯^ねを 今そ都の 雪の明ほの

和答 中務卿貞敦親王 伏見殿

雪に見る 都のふしも 旅の空 さそ思らん 遠き吾東を

此外堂上方御歌十二首有、略之

御製

雪に看し 山ハ富士の岑、言の葉の 代々の其名も 空の上迄

一、四月十一日 快晴 老番火当

当谷中火鎮祭いたす

一、四月十二日 快晴 火当

一、四月十三日 快晴

一、四月十四日 快晴

昼後下河原辺無音見舞

一、四月十五日 快晴

本城内・川井安次郎様参宮帰国有之

月並終夜拝ミ

一、四月十六日 快晴

本城・大住へ悦^ニ行

一、四月十七日 快晴

一、四月十八日 快晴

上野氏役義賑舞山町役人一同招ル

一、四月十九日 曇夕方⁽⁴⁴⁾小雨

松本豊太郎柄山一条^并岡田名跡之義御内々

申上天住様へ行、川嶋へ見舞

一、四月廿日 曇大風昼後小雨

えひす講多作方へ行

一、四月廿一日 朝小雨

昼後本城へ行、土産物見合、夫方玉置氏へ招ル

御茶馳走イタ、ク、高野君も入来、夜おさとへ

神酒出ス、今朝兄君同道本経寺へ行

古画類数々一覽置

一、四月廿二日 快晴風有

一、四月廿三日 快晴

永久^ニて通気管仕懸始ル、早朝方出勤、昼後帰ル

一、四月廿四日 大風雨 昼後方強雨

間歩改明後廿六日之積御沙汰有之、夜上野氏へ集会、案内廻文認ル

一、四月廿五日 雨

岡田保兵衛名跡伺^ニ大住様・大賀様へ出ル

岡田名苗大森町山田屋甚吉へ讓候旨

御役所御聞濟被成候御書付大賀様方被下候

^ニ付即刻集会切替申渡、受書取置候

一、四月廿六日 曇後晴

間歩改有之栃畑谷御案内^ニ出ル、八ツ時過相濟

一、四月廿七日 曇

昼後高野・玉置両君、上野・山崎両兄入来茶

話、夜^ニ入歸去

一、四月廿八日 曇

一、四月廿九日 曇

昼後のほり立、間歩帳書

一、四月晦日 快晴夜曇風有

米渡立会、夕西善寺招待誦經

一、五月朔日 曇暮過方雨

一、五月二日 雨昼後方止

尾波中健蔵志義質見、料理為持三四郎差遣

一、五月三日 曇風有

夜石溪子・上野兄入来

一、五月四日 快晴

一、五月五日 快晴昼後方曇

御役所御礼^并上組礼仕舞幟手伝へ

神酒出す

一、五月六日 曇 入梅

石代上納^ニ出森、夕方方上野へ招レ茶、其外馳走ある

一、五月七日 曇

帳合等

一、五月八日 晩方雨

今日方榮泉寺授戒はしまる、代戒^井老人

亡者戒釈妙空信女・釈浄蓮信士菩提式人

一、五月九日 雨

一、五月十日 雨

万体地藏尊板木上野^ニて借受板行初ル

一、五月十一日 曇天

一、五月十二日 曇

榮泉寺授戒会サンゲ^ニて昼後方参詣

礼拝夜サンゲ捨身済、九ツ時過帰宅

一、五月十三日 曇夜半雨

早朝方榮泉寺へ参詣、礼拝夜九ツ時過

登壇血脈受済、七ツ時過夫方寺にて臥

朝五ツ時起礼拝備座施我鬼^井上堂

濟七ツ時下山夕帰宅

一、五月十四日 快晴後曇

朝五ツ時起礼拝、施我鬼備座上堂七ツ時

濟戒弟一同下山夕帰宅

一、五月十五日 雨

大住若旦那明日廣嶋へ御越、暇乞^ニ行

昼後方看經所檀上飾月並通夜拝ム

一、五月十六日 曇折々雨

神宮寺^ニて辻芸いたす

一、五月十七日 晴陰定す雨なし

朝西善寺老僧請待、昼後寄合

一、五月十八日 曇

一、五月十九日 曇折々小雨

一、五月廿日 晴陰定らず折^々強雨

普賢院方書状^井御護符到来

明ノ呂紀梅^ニ鳥之画求価金^井両三分中屋へ

渡す、夕方方上野兄同道玉置氏へ招ル、茶話

一、五月廿一日 曇折々雨

降露坂道替御沙汰評義朝寄合

一、五月廿二日 朝雨終日晴雨定らず

昼後大住氏へ見舞

一、五月廿三日 朝雨曇昼後方快晴

火当拵、宗四郎・三四郎来ル

山屋来ル

一、五月廿四日 曇後快晴 火当人夫四人

降露坂新道相談寄合

一、五月廿五日 曇 火当

諸山稼人・山付御呼出差添上野兄・拙出森、通気管
一条被仰渡請書上ル

一、五月廿六日 曇

昼後泉屋来、夜帰

一、五月廿七日 折々曇

昼後上野氏理趣分真読有之参詣

夕川北氏会席招ル、客大賀・野沢両君・野沢

後室・宗岡後室席詰いたす

待合

掛物 千厓竹画讃

釜 マン字 風呂

炭斗木魚**

三ツ羽

灰器アカノ

水次蓋置

汁（すまし・さらし落・たて）

向（鯛・すみそ）

椀（きんこ・なすひ・水な）

飯

重引くすな焼身

吸物（海竹・めうか）

取肴（巻玉子・かきもち・青梅甘煮）

湯盆（湯桶・香せん・香もの）

菓子もち二色

掛物

呉竹庵翁茶話

花

にんどう

四方棚 水指

備前

茶入

備前 銘清瀧 上田家々拝領之由

茶碗

萩

茶杓

庸子作

こほし

めん*

蓋置 青竹

惣菓子 薄茶

跡座酒宴少々有之、夜九ツ過帰宅

一、五月廿八日 晴折々曇

朝本城へ見舞、西善寺隠居買約定見積り

昼頃大森行懸上宗君へ見舞、同人より

大黒天戒神古銭・七福神古銭貰ふ

今日榮泉精舎ニおゐて講中最勝会

修行跡弁天講式相勤、夫寺参詣之上

右福銭二枚禅師へ御覧ニ入、御加持相願

幸ニ弁天講式会上本尊・大黒天戒神

祀ニ而方丈歡喜則檀上飾其跡ニて大黒天

開運御修法有之難有得幸、夕方帰宅

一、五月廿九日 快晴

万休地藏尊加持榮泉寺へ頼為持置

夜上宗入来

一、六月朔日 快晴

朝大向政太郎来ル、元信株梗横物交易

此方方永徳落雁はせを翁横物金三分添

昼後山神社参本城氏へ大住御内御逗留ニ付

御茶馳走有、墓参

一、六月二日 快晴 午時少雨

大住御内帰懸留、御茶酒飯等出す

一、六月三日 快晴 午時小雨

降露坂新道一件ニ付、昼後河嶋・大住・藤井
へ行夜ニ入帰、高松公祐卿御懷紙大住様ニて
讓受代銀六匁

一、六月四日快晴風有

万休尊流水灌頂ニ仁万浦へ上野兄同道ニて
行、夕方帰ル

一、六月五日 快晴風有夕方方雨

靈松院殿御正當龍昌寺参詣、御非時御酒等
出ル、夜ニ入帰ル

一、六月六日 雨

夜藤十郎志義立会

一、六月七日 快晴、昼後夕立

大久保山山付光田丹兵衛・新切山山付松本豊太郎
右兩人入替之積、銀山方御役所へ御呼出
被仰渡差添ニ罷出ル

一、六月八日 晴昼後夕立

上宗君帰らる

一、六月九日 晴昼後夕立

坂根藪見廻り

一、六月十日 快晴

坂根新道道刈見分

陰德太平記ニ見合写

陸羽廬同 趙州喫茶保七百甲子瀧山

指茶知体用然レハ美頭碧眼密旨唯在茶ニ

一、六月十一日 快晴暑甚し

上野宗十郎君方書状書物五冊到来、大住様方
御持せ也、夕方西善寺老僧非時ニ呼

一、六月十二日 快晴

降露坂新道替見分上野清十郎・横田弥太郎
と三人同道ニて罷越

一、十三日 快晴 夕七ツ時地震ある

次平方質見立会

一、十四日 快晴風

今日も新道見分罷越

一、六月十五日 快晴

昼迄遠近へ当日之礼廻り

夜月並通夜

一、六月十六日 快晴

明日降露坂御見分御越之趣、銀山・大国・西田村へ
御廻状七ツ半時到来、即刻大国へ繼

一、六月十七日 快晴

晚七ツ半時御出役関根勘十郎様御登山被成

案内町組頭横田弥太郎罷出ル、付添高橋富三郎

・上野作太郎、大国村・西田村役人中被出午時頃

相済、本経寺ニて御休足、夫方上野清十郎方ニて

御酒御弁当等差出候積之所御急ぎニて御帰

被成、跡方重詰ニいたし送ル、大国・西田役人中

へ■■■■酒飯等出し別ル

一、六月十八日 快晴、今昼九ツ時五分土用ニ入暑甚し
午時西善寺老僧招誦經

一、六月十九日 晴陰定らず、風有

一、六月廿日 快晴

本城・天野・橋本等へ不音見舞

一、六月廿一日 快晴

なら漬粉配、火当拵〈宗四郎・嘉吉・安次・喜助〉

一、六月廿二日 快晴、別而暑し 火当右四人

早朝降露坂道見積石工人足召連

罷越、夕方西善老僧招誦經

上野兄入来、野沢・宗岡後室

入来、夜ニ入御帰

一、六月廿三日 快晴暑し

火当三人、昼後御陣内御奥へ

上晒葛老箱・なら漬粉式はん御用人御伝へ

焼酎釜入、お作様へ嶋老丈其後差遣

一、六月廿四日 快晴

夕方道普請目論見帳仕立ニ上野氏へ行

一、六月廿五日 快晴

早朝関根様へ道目論見御内見ニ罷出ル

帰り懸、暑見舞方々済、夜泉屋方

使来、三ツ組梅ニ月之盃・肴料贈らる

襖拾老枚・障子四枚渡、是ハ西善寺方泉や

買受之品也

一、六月廿六日 快晴

早朝泉屋暑見舞ニ入来茶話、夜上

野兄入来

一、六月廿七日 快晴

大向政太郎子来ル、古画持参相阿弥

横物交易、此方方探信横物詩仏竹絵

・天祐立物・信光立物金百疋渡

夕方新道見分上野氏同道

一、六月廿八日 快晴、未刻夕方雷鳴

朝本経寺宝物日顯上人黒之題目虫干

拝見参詣、陰徳太平記拾冊吉岡氏方借ル

一、六月廿九日 快晴、未刻雷鳴

一、六月晦日 快晴 〈山方・運上方〉石代上納致す

名越祓大森明神社子供連参詣

柳やにて馳走ある

一、七月朔日〈甲辰〉 快晴

朝社参礼廻り、幸太郎暑邪ニて臥

一、七月二日 快晴

夕方おさと呼、柳屋入来

一、七月三日 晩強雨已刻方止

盆掃除、竹一・弥三郎・つる次・ふき雇入

一、七月四日 快晴

菜蒔弥三郎・つる次・安次・庄七・三原や雇入

今日方注文書出初ル

一、七月五日 快晴、八ツ頃大夕立

二、七月六日 快晴、八ツ頃夕立

今朝他方御役所より御召出、降露坂道

付替之義ハ多分之金高ニ付暫時御

見合、古往還飯直積書差出へく

関根様より被仰聞、帰り懸清水寺

一条ニ付泉屋へ立寄長談御薄

・昼飯等給帰宅、七夕飾いたす

一、七月七日 快晴

御役所御礼出勤同役中へ相頼出森

不致、近所丈礼廻ル

一、七月八日、度々夕立

醬油造込

一、七月九日 快晴風

降露坂飯直シ目論見帳仕立相談

一、七月十日 曇

一、七月十一日 曇、昼後快晴

一、七月十二日 曇、昼後大雨大雷後晴

一、七月十三日 曇、昼後大雨大雷、夜雨

山屋へ注文之茶壺斤・茶湯奥義拾五冊

・茶器名形録二冊到来

竹台子好平調料七百七十文

夜七ツ頃受引済休足

一、七月十四日 雨、昼後止曇、夜雨

墓参いたす

一、七月十五日 曇、夕方雨後止

早朝中元礼廻り、夜通夜修法

墓参

一、七月十六日 快晴

朝大森へ礼廻り

一、七月十七日 曇

金歩割返し立会、上野父子立寄茶点

一、七月十八日、曇、夜雨風

道普請入札立会

一、七月十九日 快晴風

田窪村にて鉋鏈有之候由、高橋梅之助・南佐木村

義兵衛兩人問堀致度段願出候ニ付御伺ニ湯吞所

迄罷出ル

一、七月廿日 雨後晴

一、七月廿一日 快晴

道普請取懸り懸分、夜矢田戎講へ行

一、七月廿二日 快晴

一、七月廿三日 快晴

地尊祭賑々敷郡集

おうら安産夜八ツ時、アトケンノウ市原・加藤呼

一、七月廿四日 快晴

引続ケンノウアリ、加藤・市原詰合午時過方

追々快方、夕方加藤被帰、市原逗留アル

一、七月廿五日 曇

オウも腹痛 〈小兒初名付地藏尊御圖貫ひおりきと定る〉

一、七月廿六日 快晴

オウラ腹痛夕方加藤へ申遣、早速相見へ

逗留翌午時過歸らる

夜市原

一、七月廿七日 快晴

夜市原逗留

一、七月廿八日 快晴

天河内森氏相見逗留

一、七月廿九日 晴、午時頃小雨

腹痛快方、午時過森氏歸らる

一、八月朔日 快晴

一、八月二日 快晴、二百十日天氣極清明

礼廻りイタス

一、八月三日 快晴

藤井君入来茶話

一、八月四日 曇、夜折々雨

一、八月五日 曇

一、八月六日 快晴、夕方夕立

朝大久保山へ御勘弁切地御礼御悦ニ参ル、敷入

沓番・式番切地見分午時歸ル

八ツ時松原常左衛門葬送へ勤ル

一、八月七日 快晴

常左衛門病死届ニ出森、柳屋・泉屋ニて

馳走ある

一、八月八日 快晴、夜五ツ頃方風出ル

洪遣ひ初ル、夜次平志義立会

一、八月九日 昨夜中の方追々風募、巳刻方和く曇

石溪君・玉置君入来

一、八月十日 雨後止曇

本城内出産

一、八月十一日 大雨大雷

一、八月十二日 晴

大住氏へ悦ニ行、山神社普請勘定帳再調へ

河嶋氏へ持参イタス

一、八月十三日 晴、大根畑仕事へ宗四郎・弥三郎・鶴次・安次・森平雇へ

一、八月十四日 快晴

(丁間に大小暦が挟まっている)

大久保山式番勘弁切地諸勘定同役中橋本へ

集会

一、八月十五日 曇、午刻方雨申刻止

月並拜ミ通夜

雲間の月を詠て

雨の月 咄に更て 仕舞けり

垣一重 往来へたてゝ 月見哉

濱の月 見るや気俛に 場取して

一、八月十六日 曇

一、八月十七日 快晴

一、八月十八日 曇

本城氏小兒不快之由大住様方

御しらせ有之、昼後見舞

一、八月十九日 大雨後止曇

本城小兒死去之由、未刻大住迄行

歸り本城へ行、葬送支度夫々見計

暮過葬式

一、八月廿日 曇夕前方快晴

降露坂仮普請出来御見分御手代

関根勘十郎様御出役御案内として

拙・上野作太郎・上野清十郎・横田弥太郎罷出

御見分相済、周兵衛新宅にて御酒等差出

一、八月廿一日 快晴

降露坂道再直見分ニ行

地藏尊御千度家内中参詣

一、八月廿二日 快晴

市原・上野・山崎・出店各主人夕前方

招キ酒飯等出ス

一、八月廿三日 曇、七ツ時方小雨、夕多作へ招ル

坂根藪掃除人足五人差向昼後見分

一、八月廿四日 曇

昼後方玉置氏へ行、夜ニ入帰宅

一、八月廿五日 曇、午刻方雨

彼岸中日、昼後上野氏へ同役中集会

式番勘定并龍源寺山山付常右衛門跡役人撰

書面調

一、八月廿六日 快晴

上野宗十郎君方書状并送り物、大森勘吉俣

利吉持参致ス、尾州御庭焼茶わん・榴座

茶入・織部香合・同盃・台とこ・和銅珍開錢壺・

香合、増太郎へ川井氏へ書状外壺包・藤井氏へ同断

・川北へ壺包計り右大森三軒之分ハ利吉へ

直様相頼相届ケル、右利吉へ状賃として

式匆遣ス

一、八月廿七日 快晴

夕方上野氏非時相伴ニ招ル

一、八月廿八日 快晴

一、八月廿九日 快晴

大久保山四番御勘弁切地御渡方ニ相成会所

にて世話人・銀堀等之相談

八ツ時頃方川北へ招ル、龍昌寺方丈・栄泉寺方丈

・長福寺和尚等酒飯出ル

一、八月晦日 快晴

御勘弁切地御礼銀山方御役所并組頭・山方

十五軒・山方月番御懸り御宅へ小割同道

罷出ル

一、九月朔日 曇天

日蝕有

大久保山式番御勘弁切地荷払立会罷越

夜ニ入歸ル、売ニよし〈老番式番打込灰吹九百めヨ出ル〉

一、九月二日 快晴曇

降露坂再道直見分イタス

一、九月三日 快晴

龍源寺山山付松原常右衛門跡役光田

千三郎へ被仰付差添ニ罷出、銀山方

ニて大住様を被仰渡引返御礼

銀山方へ計出ル

一、九月四日 快晴

御勘弁切地勘定高橋氏へ集会

一、九月五日 曇

一、九月六日 晩雨後曇

小松地村へ毛見ニ行

一、九月七日 快晴

一、九月八日 曇

一、九月九日 終日強雨

御役所御礼出勤、午時歸ル

一、九月十日 曇 甲子

最勝会講榮泉寺ニおゐて執行

有之参詣、夕過帰宅

一、九月十一日 快晴

御勘弁切地荷払、山崎氏立会灰吹四百六十め余出ル
老番・式番へて

夜ニ入、三石頭ニて野火入候由ニて途中迄罷越為差事なし

一、九月十二日 快晴

夕方西善寺老僧誦經

一、九月十三日 曇

一、九月十四日 曇、申刻を雨

一、九月十五日 曇

月並会修法

一、九月十六日 曇

朝幟花仕立出店・平市・啓市手伝

夜降露坂普請入用勘定

一、九月十七日 快晴

夜式番勘定同役中集会此方ニて

いたす

一、九月十八日 快晴

一、九月十九日 快晴暖気

城上御祭礼無滞相済

一、廿日 快晴、夜五ツ時頃を雨

上泉屋年寄格悦銀三匁

月並えひす講水田藤一当番

秋三郎方ニて出振舞ニ行

大住様へ若旦那帰国悦ニ行長話、夜

五ツ時頃歸ル

一、九月廿一日 雨後曇、夜風

御代官様大家本郷へ御検見屏風曾根通

ニて御越被成、早朝方新切山へ出勤
夕方方上野氏へ玉置君与招レ茶話

一、九月廿二日 雨、夜風

玉置君・上野兄入来茶話、炬開イタス

一、九月廿三日 曇風後晴夜風

石溪君・上野兄と俱に玉置君へ招ル

小六屏風橋懸兄筆頼出来ス

一、九月廿四日 快晴風有

一、九月廿五日 快晴後曇

大住様・藤井様御入茶点長話、夜同役

中入来銀吹呼出鉦鏈買前一条談

一、九月廿六日 雨あられ後止

一、九月廿七日 曇

一、九月廿八日 辰刻方風雨午時頃方止

山神宮御祭礼御幸雨天ニ付延刻八ツ時過方

はしまる、夕暮還御、夜ニ入角力

一、九月廿九日 曇

柳出屋幾三郎殿方へ栄泉方丈振舞ニ付

招ル、夜四ツ時帰宅

一、九月晦日 曇、夜ニ入折々小雨

博多屋分一郎病氣ニて相話ル、■時死去^葬

夜伽イタス

一、十月朔日 西 曇

髪結替等致ス、博多屋へ詰ル、七ツ時過葬送

夜五ツ時過帰宅

一、十月二日 曇

大久保山三番御勘弁切地模様不勝ニ付方角違

御勘弁願外山付一同申出ニ付同役中・当山付評義

御懸り様へ高橋猶之丞殿伺ニ被出ル

博多屋法事ニ招レ、夜ニ入帰ル

一、十月三日 雨

右三番方角違御聞濟不相成趣房右衛門・秋三へ申渡ス

一、十月四日 晴

一、十月五日 快晴、夜半頃方雨

報恩講取越勤、安養寺院主招待参詣

賑々敷

一、十月六日 雨

鉦鏈売買之義ニ付御内伺ニ罷出ル、昼後

諸山山付・銀吹寄集申談

一、十月七日 雨

おてふ見舞ニ行

一、十月八日 曇

大久保山六番勘弁切地惣下財へ被仰付惣代

兩人召連差添ニ罷出ル

貫高調龍源寺山ニおゐて有之、大住様・大賀様

諸山御懸り様御登山御為登灰吹銀三拾五貫め

之積被仰渡、諸山出方六割まし

一、十月九日 快晴、申刻方時雨

上組御番所方へ着悦ニ廻ル

一、十月十日 曇

一、十月十一日 曇 夕方方雨

大久保山勘弁切地立会ニ行、夜半頃帰ル

一、十月十二日 快晴

野沢様御褒美悦ニ行、夜ニ入帰ル

一、十月十三日 快晴

帳面表紙張ル、昼後安養寺参詣

一、十月十四日 快晴

式番勘定立会、山崎へ集会

一、十月十五日 快晴

月並修行通夜

一、十月十六日 快晴

野沢氏祝宴ニ招ル

一、十月十七日 快晴

一、十月十八日 快晴

柑子谷月番印形持参

一、十月十九日 快晴

夜光田千三郎方へ招ル

一、十月廿日 曇、午刻方時雨大風

月並えひす講当番講中集り、賑々敷

一、十月廿一日 朝雨後曇

一、十月廿二日 快晴

長野・中場両君夕方方入来茶話

一、十月廿三日 快晴

長野氏へ招ル、夜式番勘定上野氏へ集会

一、十月廿四日 快晴

銀吹仕事師今日方御手当被下候積被

仰渡承ニ御役所へ出ル

一、十月廿五日 快晴

一、十月廿六日 曇大風

一、十月廿七日 大風時雨、亥猪祝

五郎坂勘定立会

一、十月廿八日 快晴、夜半頃方風雨

一、十月廿九日 朝曇風、夕方方雨

万田地蔵尊流水灌頂ニ仁万浦へ行

一、十月晦日 曇

一、十一月朔日 曇、午刻頃方雨

昼後方長野氏へ行茶話

一、十一月二日 晴

夕方より長野氏・高野氏・上野兄入来茶話

高野君御咄

枝炭・花炭・松葉炭等之伝

黒ざとう水にてときぬり付ほうろくへ入

又上方ほうろくをふせ下より火にて焚

一、十一月三日 曇

大森西性寺納屋火災出張

一、十一月四日 雨

橋本氏にて例年酒造祈禱頼、夕方参詣

一、十一月五日 曇夜雪

藤十郎頼母子ニ行

一、十一月六日 雪

式番勘定橋本氏へ集会

一、十一月七日 雪後快晴

泉屋廣嶋土産もらふ

一、十一月八日 快晴

降露坂出来形帳御役所へ差出ス、関根様_并

園部様へ御礼ニ出ル、泉屋へ帰国悦老朱、右帰り

懸立寄四ツ時過る夜五ツ時頃迄雑話

十一月九日 曇時々小雨、七ツ時方雨ニ成、終夜大風

浅利や次平方へ招ル、夕前方上野氏へ行、夜ニ入歸ル

十一月十日 終日大風あられ降

昼後御仲間衆御見廻り有、町役人一同町内見廻り

大住氏へ見舞ニ行、大森泉屋・上田儀屋不和ニ付

和融取扱ニ行、深更歸ル

十一月十一日 雪風、夜御仲間衆御見廻り御立寄休足

泉屋内祝参ル、夜ニ入上野氏へ行、新切山へ風見舞

町内見廻リニ罷出ル

今日買請米願書認、御直段七拾老匁三分五り四毛

十一月十二日 雪風

山神社屋根瓦風損有之由、神主中昨日届被出候

今朝同役中立会見分致ス

十一月十三日 曇、未刻方雨

十一月十四日 晴折々小雨

十一月十五日 快晴

大根引、月並通夜

十一月十六日 快晴

大久保山七番惣山師切地被仰付

十一月十七日 快晴

御代官様龍昌寺御参詣ニ付御出迎出勤

十一月十八日 快晴

上野氏仏事朝方行夕歸ル、宗十郎君方書状来ル

十一月十九日 快晴

十一月廿日 快晴

おりき七夜之祝ひ客来

十一月廿一日 快晴、夜四ツ時方雨

大住臺藏様入来、夕前方長野君入来茶話

十一月廿二日 晴、夜五ツ頃方ミそれ

式番勘定同役中屋前方入来、昼後大住様へ

見舞、夫方泉屋_并上田儀屋へ行、同方主人留主

十一月廿三日 曇寒し

十一月廿四日 曇、冬至

十一月廿五日 快晴

上田儀屋へ行談事イタシ、夜ニ入泉屋迄歸り

同方にて長話、夜四ツ過歸宅

十一月廿六日 快晴、夜六ツ半頃方雨

朝御組頭へ出、山方御祈禱之義申上ル、宰領衆

暇乞河野へ大錢二・厚東へ札二持参

十一月廿七日 快晴、夜四ツ頃方雨

湯里村山本や忠兵衛と申老人、幸吉郎痛齒マシナヒ

に来ル逗留、夜天野・石溪子夜話ニ来ル

十一月廿八日 風雨

上野宗十郎君へ書状并葛式斤・すのり五包・無名異五匁

大森勘吉へ頼ム、餞別百六十文、矢田沢吉へ餞別

夜天野氏へ行

十一月廿九日 快晴、夜半過雨

昼後上博多屋質見

十二月朔日 曇天折々あられ

礼廻り上野にて茶話、墓参イタス

夜天野氏へ招ル、深更迄茶話

十二月二日 快晴

例年之通銀吹へ御手当御褒美被下差添ニ

罷出ル

十二月三日 快晴

十二月四日 曇折々小雨、申刻雷鳴強雨

備中普賢院方山祈禱御礼并拙方へ之御守

・書状、川北行御守・書状夕方大吉屋方到来、川北へハ

同夜送ル、御役所へ御礼并拙宛之状相添、翌

五日御湯吞所迄小廻リニ持せる

同方へ便り有之由川北方申参、返書旁深更

相認御初尾金百疋ツ、式包・すのり等添川北迄出ス

十二月五日 雪少々ふる

式番勘定、上野氏へ集会

十二月六日 快晴

十二月七日 曇^{本雨}、夕方方雪

夜会茶の湯催、客天野・長野・上野・桃千・弥太郎四人

十二月八日 雪

歩銀勘定橋本へ昼後方集会

十二月九日 曇

泉屋主人午刻頃方入来

十二月十日 曇

夜長野氏へ招ル、小寒ニ入

十二月十一日 曇折々小雨

十二月十二日 快晴、未刻過方雨

十二月十三日 快晴

新切山惣塩搔ニ出勤夕帰、夜上野嫁産氣

見舞、夜半頃死去、夜明し勤ル

十二月十四日 快晴

上野へ行

十二月十五日 快晴

上野氏葬送、夜ニ入灰葬

十六日 快晴

八番御勘弁切地惣下財へ被下、上野氏法事ニ行

十二月十七日 快晴後曇風

夕方上野氏へ招ル

大久保山出来所五番・六番上ヶ切地并四番跡へ

半勘弁触出しニ相成願書数々出ス、右四番跡

之分ハ当時四番相続有之、追々勘弁切地も

可立場所之所半勘弁ニ相成候義山組頭ニては

如何ニ相心得候ニ付当山付へ申談候所、強_而申

立ニ付外山付呼寄評議之上聞濟奥書

出来致ス、深更帰宅

十二月十八日 雪風、夜ニ入大風

十二月十九日 折々雪

夜田中為次郎へ悔ニ行、上野氏へ見舞

十二月廿日 雪折々

大般若転読料受取書并田中為次郎病死

届書付御役所へ持参上ル、河嶋婚礼悦ひ

札式勿持参、大住へ見舞、夜山崎えひす講

へ参詣、帰宅後市原文英子御役所

年頭御礼内願ニ入来

山屋方注文之茶到来

十二月廿一日 快晴

注文書出致ス、夜ニ入御陣内御台所へ歳末

ニ出ル銘酒献上

十二月廿二日 五ツ時方雪、夜雨

十二月廿三日 曇少々雪

夜評義事会所集会

此月十五日并準提尊拜礼差支候ニ付、今

廿三日修行相勤通夜

十二月廿四日 快晴

酒直段当時売方書上可申旨御役所より

御沙汰有之候趣、泉屋より達し有之、則

左之通書上ル

辰十二月

酒直段書上帳

銀山町

中折立帳

一 覚

一、上酒壺升

代百八十文

酒造人

一、並酒壺升

代百四十文

高橋富三郎

右ハ私造酒当時売直段書面之通ニ御座候、以上

安政三辰年十二月

銀山町

高橋富三郎 印

大森

御役所

前書之通御届申上候ニ付取次印形奉差上候、以上

辰十二月

定使

上野清十郎

右代人次平差出す、夜式番勘定

高橋へ集会

十二月廿五日 朝雪後曇

もち搗イタス、折平・弥三郎・つる次・周吉にて

永久山付為次郎跡役和田新平・亀山菊蔵

・橋本吉松右三人書出

十二月廿六日 雪

十二月廿七日 雪

夜上野兄入来、式番勘定致ス

十二月廿八日 朝雪後晴

御歳末御礼御役所江罷出ル、御手当被仰付

和田新平御呼出永久山付被仰付差添罷出ル

引返シ御礼銀山方へ出ル

夜不動尊修

十二月廿九日 晴、夜風有

朝方引切なく多用、夜半過迄夜なへ

雪之内如意宝珠晦日護念取越修行

十二月晦日 晴

朝方多用昼飯済次第、御飾イタス通夜

家内一同無事目出度越年

万々歳

(数行分空白)

安政四年〈丁巳〉年中日記

(数行分空白)

正月元日 快晴、夜村雨

天拝神拝仏拝蓬萊并茶イタ、キ吉書初メ済

御雑煮・屠蘇イタ、キ、上山年礼済家来弥三郎

帰宅御節未^{いね}大福点茶、夫^{いね}ツミ

夜仏拝如意宝珠法修行、昨夜寄高金銀

調夫より臥 答^と日^と*詞の御慶*

山近き 町や疾聞 初鴉

正月二日 晩天曇、辰刻方雪

御役所年礼山町役人一同罷出ル、旧冬医師文英

年頭御礼願書差出御免被仰付、依之今二日

罷出ル、山神神主・春日神主・医師夫方山町役人

と相成、帰り新切山山入出勤

正月三日 風雪

髪結、初御飾下シ、本城氏招家清メ節出す

昼後上野山崎両兄・上博多屋主・弥太郎等招

年盃、昨二日新横相山入之節酒興之上

高橋猶之丞雜言有之候由御木や方沙汰有之、同役

一同高橋へ集御木やへ御詫申上同夜済

正月四日 曇後折々雪

寺院年始有之

正月五日 折々雪

米搗とも仕事始、昼後大住様節振舞ニ

被招、夜ニ入帰

正月六日 曇、夕方方雪風積つよし

昼上野氏節振舞ニ被招、夕方方当方へ小割
多作・次平・竹一・平一・繁平・宗四郎・源太郎招ク
正月七日 雪風はけし寒シ強

泉屋主人年礼有之由ニ付相待居折節

相越れず、銀山方方山組頭御召ニ付橋本

被罷出候所、二日山入之節高橋不作法有之趣

心得相糺可申出旨被仰聞候由、上野氏へ集

談合イタス

正月八日 雪風

朝上野氏へ集会、嶋台調廻文出ス

玉置君入来茶点、夕前方高野君・上野兄入来

茶話長し

正月九日 少々和キ風有、節分

三ヶ山御木屋廻勤、新切山五番鉉出鉉悦ニ行

河野様方

上野宗十郎君方書状到来、幸太郎・おまんへ手遊び

御守り三ツ来ル、届状大住様・大賀様・藤井様

・中西様・川井様・上野両家・山崎宛おさく様へ沓封
到来受取置

巳年御掛り場

町方兼

藤井七郎右衛門様

福本由次郎様

嶋田郡次郎様

御銀蔵厚東繁蔵様

永久川井為三郎様

龍源寺山塩谷汀一郎様

嶋田庄五郎様

田中助太郎様

八木清之助様

鹿野兵吉様

中山平市様

中山順之助様

中西松三郎様

吉岡東馬様

田邊三四郎様

新横相高野大助様

新切山勝岡和田蔵様

大久保山阿部清右衛門様

山中文三郎様

榎野等太郎様

中山茂一郎様

大住臺蔵様

河野綱太郎様

田辺泰次郎様

坂本萬之助様

運上方中山庸蔵様

山方月番吉岡忠五郎様

町方沢井藤文

丸茂鎌之進様

丈英

田辺民之助様

沢井和兵衛様

河嶋準助様

坂本勝三郎様

極印所坂本勝三郎様

安部郡太郎様

吹方阿部郡太郎様

高木豊次様

野沢弥十郎様

正月十日 快晴

明日之支度ニて多用、夜ニ入上野氏へ行、高橋好太郎呼父子

慎方心得申談

正月十一日 快晴

帳面上書済、山神宮へ参詣イタス、御代官様御社参

御下向後出森、河野様へ帰国御悦ニ出、夫方大吉屋へ行

八ツ時頃方御役所御広間へ出御神酒頂戴、暮過帰宅

嶋台拾五折献上、賑々敷

正月十二日 雨

最勝会講榮泉寺ニおゐて修行参詣、夫方御湯吞所へ

出高橋之御託申上ル、帰り榮泉寺并泉屋ニて御馳走

有之、夜山崎へ集会高橋託書相談、深更上野氏へ行

書類認 今昼後帳とち出来

正月十三日 朝雪はれ寒風

高橋託書橋本持参、出森被致

正月十四日 雪

明晚修法供物拵等イタス、夜年徳祭居はやし

谷々へ触ル

正月十五日 雪

川北主人午刻方年頭入来雑煮茶点之内藤井様

・野沢様年礼入来、三客左之通

雑煮 吸物(へえひ・水善寺)鉢(きんこ・いも・かまほこ・連根・なし)

井すこほう鉢(こひる・あんかけ)

御飯 汁(干大根・若な)向(へふり・さし)平(あわひ・いもくたち)

菓子ようかん

茶通 水指朝せん 茶碗(尾州御庭焼) 茶入瀬戸 茶杓松千とせ

夜五ツ過帰去、夫方引水献供通夜

正月十六日 雪

新切山五番鉉縄切之出鉉ニて壱番御勘弁切地当山付へ被仰付

差添ニ出ル、御広間大般若拝礼帰、柳やニて年杯、夜石溪子

山崎兄入来茶点

正月十七日 曇

帳面調、新帳へ写

正月十八日 曇

例年之通神宮寺ニて神酒開出会

正月十九日 快晴

帳面写

正月廿日 雪はれ寒し

桃千・門脇等入来、高橋猶之丞殿慎御免、夜えひす講

出店当番ニて行

正月廿一日 朝雨

正月廿二日 少雨

泉屋へ年盃ニ招れ七ツ時方行、夜半頃帰

正月廿三日 曇

屋後高橋振舞ニ行、夜次平方志義満会ニ行

正月廿四日 晴

昨日宗十郎君方飛脚来ル、明日御祈祷支度

正月廿五日 快晴、天社日也

最勝王経真読御祈祷榮泉寺方丈早朝方

招待夕方満願

正月廿六日 (屋後方折々雨)

多作へ年盃ニ被招

正月廿七日 快晴

屋後新銀堀調イタス

正月廿八日 快晴、夜五ツ時方雨

朝銀堀^并留山師申渡ス、夫^方樋高峰松祖母ぬい

長寿九十一才^ニ付、先日御届申上今日御呼出差添^ニ

罷出ル、銀山方へ着届イタス、御玄関へ出御広間障子際

方^ニ二疊目へぬい^并峰松召連罷出ル、御目通り相済

御玄関^ニ御手当^并錢式貫文御組頭元へ御立会^ニて

被仰付候、銀山方^并中ノ口へ峰松同道御礼申上ル

正月廿九日 曇、冴かへる

石溪子入来

二月朔日 曇 未

社参^并新切山敷内昨日水廻り之由^ニ付見舞^ニ出ル

昼後地方小遣竹蔵殿入来

二月二日 雪はれ

昨日山崎氏初老祝青梅嶋・肴代老朱・樽・祝吟

老初て なを此梅の 盛りかな

樋高氏老母悅樽^并肴式^勿・祝吟

老松や たくふものなき はるの色

夕方^方長野君石溪子入来

二月三日 雪ふる二寸計積

上野氏法事^ニ行

二月四日 晴

夕方天野へ本城用^ニて行

二月五日 晴

銀山方^方御呼出^ニて罷出ル、新切山水道口川さらへ被仰渡即刻

石工へ申付

二月六日 晴、午刻過^方雪積

川さらへ積書差出河嶋様迄出ル

樋高氏年賀振舞八ツ時頃^方行

二月七日 雪

稼人渡味噌たく

二月八日 雪

同断、味噌搗屋後渡方同役中入来

二月九日 晴

同断、味噌搗屋後渡

二月十日 快晴

新切川さらへ出来見分致ス

二月十一日 晴

鎮守稻荷社掃除、昼後会所^ニ天野氏へ談に

昨日山組頭被召出、山神神主^方来ル十五日七座神樂執行

致度趣願出候へ共、役人奥書無之^ニ付願書差返候

間奥書か又ハ前書か可差出被仰渡候^ニ付願書

披見候所、是迄七ケ年め毎神樂執行^并為銀山御祈

禱と有之、左候へハ自然後^ニハ山神社之神樂を申

様^ニて有之、是ハ全天野氏異祭神樂と存候、且

七ケ年目と有之候^而ハ差支之段談候所、全山神社

神樂^ニ有之、此内七ケ年目^ニ相勤候奥書ハ先例

之如神事向^ニハ無之、身分^ニ付候義ハ奥書願

候間、今般も前書^ニ致貫度段被申候へとも右山神

神樂と有之七ケ年目之文言不承知^ニ付行形

鹿野様へ罷出申上候所七ヶ年目之所相除可申

段被仰聞候ニ付天野へ談合、届書先例之通手輕

ニ相認被出候、役人方へも天野方口上書取極一通

取置前書届書差上御聞濟ニ相成候

二月十二日 風雨、初午

右記候天野一条ニて鹿野様へ出ル

二月十三日 ■曇

二月十四日 曇雪

次平志義

二月十五日 曇

神樂有之、今晚準提法延引

二月十六日 晴

二月十七日 快晴

小供俄狂言長福寺ニてイタシ町内賑ハシ

二月十八日 快晴

夜ニ入大向政太郎入来、梅月明朝人画^并■^詩仏先生拾貳枚

と雪村二ふくと交易イタス

二月十九日 曇、午刻方終夜大雨

備中普賢院和尚川北へ入来之趣、昨日申参候ニ付今昼頃

方罷越夜五ツ半頃迄寛話

二月廿日 快晴

普賢院より御守・御備・土産品々受納、同役中へも参候ニ付当方方為持配ル

二月廿一日 曇

二月廿二日 曇、午刻方雨

普賢院様へ御出産御礼ニ行、寛話川北ニて馳走

種々有之、夜五ツ時過帰宅

二月廿三日 快晴

当十五日準提法延引ニ付、今晚相勤通夜作

法イタス

二月廿四日 快晴、後曇夜雨

三嶋内^并卯之助入来、土産・樽代・獅子頭・とうやまんちう也進物祝義二匁・巾着外手遊

二月廿五日 曇

御役所方山組頭御呼出ニ付山崎氏御出ニ候所、昨年梅種

下ケ渡候へ共当分之間ニ合申間敷間、梅接木致候^而可然

久利村半一郎上手ニ付申付候条桃ノ台取調接木

可為致段被仰渡候

二月廿六日 曇

上野兄入来

二月廿七日 曇、午刻方雨

五ヶ山向々にて華水供一座ツ、修行致度段

普賢院御願ニ付御伺ニ罷出ル、田村屋七右衛門転宅

悦式勿持参

二月廿八日 曇寒し

利休翁忌日御像献茶菓門脇内藏次入来

点茶

半一郎接木ニ相見へ谷々ニて頼ム、当方ニても出来

同人主従二人宿上野氏ニ被致

二月廿九日 快晴

銀山方々山組頭御呼出ニ付作太郎罷出候所、此間申出候普賢院

御祈禱之義御聞濟ニ相成候、御初尾ハ御役所方被下候積、稼人一同

拝礼ニ為罷出候様、日取ハ向々御木屋ヘ相伺普賢院ヘ申談

候様被仰渡ニ付、即刻木屋ノヘ申上出森、普賢院和尚

ヘも申上候、三月四日大久保山・新横相、五日龍源寺山・恵珍山・新切山

・桜間歩、六日永久、右之通義定

二月晦日 快晴、夜小雨

三月朔日 快晴

三月二日 曇、^申刻方雨

受引懸取次作

三月三日 雨

おりき初雛節句悦、客三十五人内不参十五人

酢硯ふたもの送ル、跡座廿人余

三月四日 曇

御山祈禱普賢院和尚大久保山ヘ御越、西福寺迄

上野兄上と同道ニて出迎、同所ニて上野方赤飯等出ル

夫方新横相ヘ案内イタシ同山ニて華水供一座

御修行、夕暮当方ヘ入来、夜家内安全商売繁

栄之ため華水供修行相願四ツ時結願、御

茶御酒等進め止宿、御初穂金貳朱、七日ニ為持候

三月五日 快晴、夜五ツ時方雨

龍源寺山・恵珍山之御祈念華水供二座御帰リ

齋差出、夫方新切山ニて二座帰り懸、上野ニて夕飯

夫方御帰り被成、三木山華水供一座当方ニて

修行、山崎方蕎麦切持参

三月六日 雨

朝上野氏十六善神供一座当方ニて御修行

已刻方永久ヘ御案内イタス、華水供修行

相済酒飯出ル、申刻過同道帰り魚店より

直ニ羅漢寺ヘ御引取被成候、帰宅後源太郎

方ヘ招ル、永久ニて 白かね山の御いのりの日に

つる草も 芽立時*し 春の雨かな

三月七日 曇

普賢院和尚近々御帰国ニ付餞別金五拾疋

井染付水指・寒製葛老斤上ル、象谷作之

香合料金貳両為持ル、夕方方暇乞ニ泉屋迄

下り深更迄清話

三月八日晴陰定らす、夜折々小雨

^{ニ付}三月晦日

御崎谷先年大火の六十一年忌鎮火祭今日ヘ取越相

勤三神主神事式角力、夜ニ入町中にハか致し

歩行賑ふ 錢八百文御鏡餅三升寄進イタス

三月九日 雨折々あられふる

夕方上野氏御非時相伴ニ招ル、まんちう廿五御備

三月十日 雨

内判寺宿長泉寺ニて勤ム、住持心得取計方

不束有之

三月十一日 曇

朝長泉寺旦那惣代水田藤市・山根市太郎呼出住持
不心得之趣申談

三月十二日 雨

本城勘定仕立、夕方方上野へ高野君入来、相伴ニ行

三月十三日 快晴

大田好二郎和田へ参趣ニて昨夕来ル、同方へ年玉壺匆と
とらやまのうち二十送ル、一中庵へ年始状認、年玉式匆

三月十四日 曇夕方方雨

節句悦び受候先々へ挨拶ニ廻ル、新横相柄山負

明り方当役取調会所へ集会

三月十五日 雨

朝時ニ順勝寺様招待、昼後方月^並修行

御備物等イタシ通夜

三月十六日 雨後晴

出森、方々へ見舞、帰り懸大住様へ寄本城

離縁荷物送り等相談

三月十七日 曇

三月十八日 曇大風、夕方方雨

新横相之内ニて手当願書式ケ所差出取調
評義

三月十九日 雨

龍昌寺崑宗和尚十七回忌法事有之呼ル、重
葛二・寺参四分・塔婆壺・同ふせ四分上ル、夜二入

秋三郎方ニてえひす講勤ム行

三月廿日 曇

夕方方石溪君・青蕪兄入来

三月廿一日 曇、昼後方雨

夕方方上野氏へ行、夜ニ入帰ル

三月廿二日 曇

昼後方長野君招キ茶点、夜ニ入茶話長シ

今日石代上納致ス

三月廿三日 雨、昼後方晴

白坏村神宮寺領水損荒地見分として出雲や・小割

多作等相具し行

三月廿四日 晴

三月廿五日 雨

夕前方長野氏へ招ル、茶話

三月廿六日 雨

不快ニて臥

三月廿七日 快晴

同断、市原葉貫ふ

三月廿八日 快晴

吉浦政太郎子上京ニ付薄茶半斤・茶せん・ヨシ簾

二枚注文引当金壺分添、長野様御交代便ニ彼

方へ送ル

三月廿九日 雨後止 朝養育米渡方立会

番所方へ暇乞ニ廻り昼後囲米勘定立会

申刻頃方泉屋主人入来、夜五ツ時頃帰ラル

四月朔日 快晴

昼後方川井氏初老悦ニ招ル、夜四ツ時頃帰ル

四月二日 快晴

昼後川井氏へ御礼ニ行

四月三日 快晴

樋高初吉・川本屋次作・浅利屋其次右三人

改名之義頼来ニ付今晚相招キ改名イタス

樋高親子・小割・川本屋親子・浅利屋親子招ク

四月四日 快晴

改宗送り状之義御触書出候ニ付、諸寺院一同

会所へ呼集御触書読渡

四月五日 快晴

炉ふさきイタシ風炉ニて終日楽ム

四月六日 快晴

大國村田地地普請見分ニ行

おりき初歩行イタス

四月七日 快晴

宅野鳳龍寺ニて授戒有之、戒師慈仙和尚也

元祖両靈院号相頼、則御血脈到来

覚明院尺恵成信士

覚月院尺妙晴信女

四月八日 快晴

昨日到来之血脈墓所へ納ル、龍昌寺へ仏生

会参詣勤行拝礼御斎馳走イタ、ク

四月九日 快晴曇夕方方村雨

地藏尊万體流水灌頂ニ仁万浦へ家内

一統行老人留主居、昼後薦舎主人来

四月十日 朝村雨後止、夕方方風

昼後上野氏へ行、夕帰ル

四月十一日 小雨

上博多屋法事ニ被招、夕方帰ル

四月十二日 朝雨後止

大住様御組頭役昨日被為蒙仰候趣ニ付

御肴金貳朱・上酒壺樽為持御悦ひニ罷出御

馳走長話、帰後御役之達し山町役人・銀吹師

一同へ触為知

宗十郎君方箱貳包到来之由ニて熊谷方為持被越

候、拙方へ書状・棗・達磨香合・せ戸盃・香合・箱・天神・六すし

土細工・手遊、上博多やへ手拭貳・土細工・手遊、出店安太郎へ手遊

右即刻届ル、住郷行書状上博多やへ頼ム、川北行箱包

上座坊方書状、是ハ翌日川北へ渡ス、当分預り品数々

受取置、普賢院方書状到来

四月十三日 雨

昼後方出森、泉屋ニて茶話、野沢様御跡職被蒙

仰候由御悦ひニ行、樽肴・小玉貳匁余りツ、貳包持参

酒茶等出ル、深更帰宅

四月十四日 村雨

昼後上野・山崎両兄入来

四月十五日 雨

月並修法通夜

四月十六日 雨

新切山五番鉉御直切延之内にて東へ式番御勘弁
切地被仰付候、橋本出森切地受取、高橋

四月十七日 快晴

勝源寺御宮参詣并御勘弁切地御礼ニ出ル、御役所

休日御組頭・山方御懸り月番御宅へ廻ル

四月十八日 快晴、夜大風雨

出雲屋囲炭取調書拔、上野氏へ為持置

四月十九日 大風雨、夜晴

昨夜大賀覚兵衛様御病死ニ付朝方昼迄勤ル
帰り懸泉屋にて茶飯等御馳走、探幽齋画

十二枚物見ル

間歩改明後廿一日之積、龍源寺山にて御沙汰有

御案内廻文出ス

四月廿日 快晴

昼後方大賀様へ勤ル

泉屋方茶箱借受当方分組籠同方へ遣し用立

四月廿一日 快晴

間歩改御延引御触有之

大賀様葬式朝五ツ時出森午刻帰ル

昼後長野君立寄

四月廿二日 曇、已刻方小雨

長安寺入院式有之案内を請参詣イタス、御馳走
戴ク

四月廿三日 雨

昨今火当イタス 新切山にて山付清十郎失礼之
義有之候趣御差当有之ニ付御懸り勝岡様御宅へ
上野兄君と同道にて罷出ル

四月廿四日 曇、午刻前方快晴

右清十郎一条にて早朝出森、帰り懸大久保石見守様御
廟へ参詣イタス

四月廿五日 曇

間歩改有之、栃畑谷へ出役

四月廿六日 風雨

四月廿七日 曇、午刻方快晴
節儉御触書読聞小前一同呼出

四月廿八日 快晴

永久月番印形持参罷越

藤井様組頭勤向被仰付候ニ付即刻

御悦ニ参ル、肴代四匁・上酒壺升為持

四月廿九日 曇

昼後一中庵宗匠来杖

五月朔日 曇、午刻頃方村雨

昼後宗匠下森

五月二日 快晴

宗匠夕方帰られ逗留

五月三日 曇

炉台子伝書宗匠方借受ル、茶杓伝相承

五月四日 曇、冷ル

五月五日 曇、大ニ冷ル

御礼ニ罷出ル、昼後幟仕舞手伝多勢来ル

五月六日 快晴、夜半頃方雨

藤井様御役祝ひ振舞ニ山町役人一同招ル

五月七日 雨後止

朝藤井様へ御礼ニ出ル、昼後泉屋主人来ル、夜五ツ時過帰ル

五月八日 朝快晴後曇

招ル

大住様御役祝ひニ上野兄公と兩人外ニ御客有之

五月九日 曇

石銀薬師会参詣人郡集町方賑ふ、夕方両三輩入来

茶話

五月十日 曇

五月十一日 曇夜雨

五月十二日 雨已刻方晴

五月十三日 曇快晴

昼後一中庵宗匠・桃千子兩人へ菓子茶湯出ス

五月十四日 快晴

最勝会栄泉寺ニおゐて勤マル、昼後参詣

五月十五日 曇

月並修行通夜

五月十六日 曇

極楽寺大衆方出鉢御齋出ス人数

五月十七日 曇

五月十八日 雨

五月十九日 曇

五月廿日 快晴

台子風炉并炉手前皆伝開、一中庵

宗匠正客ニて正午ノ会

客一中庵宗匠 主貯月庵

待合 料紙 硯 たはこ盆

懸物 藤波季忠卿御筆 汁〈やきふ・しそ〉皿〈鯖沖鰯・海そうめん〉

台子 真ノ飾 飯

炭斗 籠 椀〈包玉子・竹の子・しいたけ〉 引而いか山升あへ

灰器 楽 取肴〈いか・空豆・いも〉 吸物〈くしらのし・めうか〉

水次 薬罐 湯盆 菓子タンコ

華 紫菊 筒 釣舟 台子〈草ノ行飾・四盆茶入シカラキ〉

茶碗 ト、ヤ 茶杓 自作

茶 銘祝白 岩井詰

惣菓子

跡見

客 西善寺老僧・青蕪君・美牛君

床 先座ノ華 台子 真飾 炭 真手前

菓子 タンコ 中立

後座台子ニテ長板三段目立前

御茶跡ニテ 椀前座ノ通 皿同断

飯

引^而同断 カン酒出ス

惣菓子薄茶

五月廿一日 快晴、午刻頃^ヲ風夕前止

一中庵宗匠帰杖、炉台子立前相伝謝義として

金貳分・花入ツ料百足差出ス

五月廿二日 快晴 入梅^ニなる

五月廿三日 快晴

福本・野沢見習悦式^ヲ、持参罷出ル、野沢^ニて茶

飯出ル

五月廿四日 快晴

一中宗匠仁万へ御越^ニ付見送る、人足弥三郎差遣ス

五月廿五日 快晴

五月廿六日 快晴

五月廿七日 快晴

上野^并亀屋へ招ル、大住様^ヲ便参り、夜^ニ入下る

宮御新造一条取持

五月廿八日 快晴

大住・野沢へ早朝出ル、巳刻時^ヲ羅漢寺大忍阿闍梨

招待、準提尊作法^并金光明五卷迄^并七卷目真

読御初尾金百足ハ取替^ニ之方^ニて引、当日百文錢三枚

外仏前回向布施八分差出ス

五月廿九日 快晴

当方釈妙円信女三十三回正當^ニ付、柳や佛前参り^ニ

招ルとらやまんちう一包・葛一袋送ル
本經寺御所地帰国悦・上酒壺・樽送ル

五月晦日 曇、夜半頃^ヲ雨

未刻^ヲ出雲屋へ幸太郎同道^ニて招ル、土産として肴式^ヲ

老樽・下駄・襟・かんさし式包送ル^へ銀吹炭一条^ニ而川井様迄

早朝罷出^ル

(丁間文書)

廿四	蔵太	三十四
上	倉太郎	○ 熊蔵
十九		
三		廿九五
上	保之助	上 甚蔵
廿七三		廿一五
上	惣次郎	上 嘉助
廿四		廿四
○ 文蔵		○ 房次郎
十七		三十三
上	太三郎	上 豊蔵
〈十三・五〉助吉		
上 祐吉		茂太郎
十九		
三 猶次	〈廿九・五〉品蔵	十三
〈廿八・四〉房蔵	助吉	

(丁間文書)

全性

豐蔵

保之助

助吉

閏五月朔日 雨

礼廻る、午刻後家内出雲屋へ招ル

閏月二日 曇

菊根分等いたす、火当拵、弥三郎・周吉来ル

閏月三日 雨、夜風雨

火当宗四郎・弥三郎・周吉・鶴次

本経寺悦三行、新切山式番荷分立会

閏月四日 大雨

火当宗四郎・弥三郎・周吉、昼後式番荷払立会

閏月五日 雨

醉古集川井様へ用立

閏月六日 快晴

夜上野氏へ行

閏月七日 曇

閏月八日 曇、昼後折々雨

普賢院行書状泉屋迄出ス

閏月九日 曇、昼後方雨

朝式番勘定上野氏へ行

閏月十日 曇

長福寺入院披露振舞昼後方招ル、式刃為持

閏月十一日 曇

閏月十二日 快晴

新横相通気管皆出来御悦ひニ行

閏月十三日 快晴

閏月十四日 快晴

五月石代上納イタス、竹市出す、河嶋様病氣見舞

菓子三匁か出ス、丸毛梅竹一出ス

閏五月十五日 晴、夜半頃方雨

月並修法通夜

長福寺住職届書付出ル

乍恐以書付御届申上候

銀山町禅宗長福寺是迄無住ニ付大森町正寿寺兼帶罷

在候所、今般谷住郷村日笠寺隱居海翁義住職ニ取極積

法類・旦家熟談仕候、依之乍恐以書付御届申上候、以上

巳閏五月

銀山

大森町

長福寺 印

海翁 書判

大森町

正寿寺 印

旦那銀山町

本城幸之進 印

両

御役所

奥書当役計

閏五月十六日 雨後晴

今日御代官様御登山之積有之候所、雨天ニ付御延引

本城縁談之義ニ付昼後上野氏へ行

昨十五日夕方蔵泉寺口御番所三宅様之裏ニ干物有之候品紛失

いたし鉢や共尋方致候所、上市場サト方へ旅人留り居候を

召捕歸り候趣門脇方達し有之

夜ニ入大吉屋方急飛ニ差越し三宅様へ這入候盜賊一条地方

御役所へ御聞ニ達し御内々御沙汰有之、右盜賊早速為差出候

様取計可申旨申越候

閏五月十七日 曇、午刻方雨

御代官様御登山被遊候ニ付、新切山へ出勤致候、三ヶ山御見分

山神社御参詣、龍源寺山ニて御昼、夫方永久へ御越、大國通り

ニて御歸陣被遊候

後 乍恐以書付御届奉申上候

浜田領

中野村之由

千代松

右之者義風体如何敷由ニ而當町字下河原上組

死失常蔵後家さとし申もの方ニて一昨十五日

夜鉢屋共差押役人共へ届出候ニ付、今十七日

地方御役所江差出雜物三十四品取調、一同御

受取ニ相成候、依之此段乍恐以書付御届奉申上候、以上

巳閏五月十七日 銀山町役人惣代

定使町組頭

門脇内蔵次

銀山方

御役所

前 乍恐以書付奉訴上候

浜田領

中野村之由

千代松

右之者義風体如何敷由ニて當町字下河原上組死失常蔵

後家さとし申もの方ニ而一昨十五日夜鉢屋共差押役人

共江届出申候、依而右千代松差出御訴奉申上候、以上

巳閏五月十七日

右同断

門脇内蔵次

両

御役所

閏五月十八日 大雨

昨日之御機嫌伺として四ヶ山付召連銀山方并

中ノ口へ罷出ル、通氣管皆出来御礼右両所ニて

申上ル、間歩帳差出ス、歸り懸泉屋ニて茶話

昼後野立箱袋こしらへ懸る

地方方門脇御呼出さとし平日行狀御尋有之昨日之

書面御直し有之

閏五月十九日 雨

野立箱袋出来、長崎人枕流と申行脚

訪来酒飯出す、西田直養先生のたんさく呉ル

謝義札老々・無名異少呈

閏五月廿日 雨、昼後大雨、夜ニ入大風

乍恐以書付御願申上候

今般窮民御救之ため採葉之義被仰出難有御趣意ニ付、私共
両人備中国採葉師耕雲江入門仕採葉製法仕度奉存候間

格別之御勘弁を以御鑑札御下渡被成下候様奉願上候、以上

巳閏五月

銀山町組頭定使

門脇内蔵次

同定使

上野清十郎

大森

御役所

前書之通、御願申上候ニ付、取次印形奉差上候、以上

銀山町役人惣代

年寄 高橋富三郎

閏五月廿一日 晩方大雨

早朝方起看経仕廻、備中普賢院方御山祈祷御守り

御役所上り之御礼、山崎氏と拙名宛書状外ニ拙方への内状并

吉備大宮司大藤下総守高雅先生たんさく三葉到来

小督房 小くるまの うしやこの身を いかになむ

よはあけなし 勅ハかしこし 高雅

《康頼入道性照》秋の月 あれしのはハに すみてこそ

おもひしよりも あはれ成けれ 同

歳暮に 世の中の うきにもなれて 水鳥の

をしますもあらぬ としの暮かな

同

閏五月廿二日 雨

普賢院方到来之御守札銀山方へ山崎氏御持参也

同断御守等油紙包泉屋方届ニ付、今日受取状差遣

閏五月廿三日 快晴

栄泉寺雲納衆長老タク鉢ニ御上り御齋出す

御布施三分ツ、包

川井様方作太郎御呼被成、拝借人滞取調方御談有之

昼後一同会所へ呼出す、引懸上野兄君茶話

閏五月廿四日 快晴

新切山敷内此間中之大雨ニ付道中損し諸切地敷上り

留り之趣ニ付御見舞ニ罷出ル、夜山神社ニおゐて

備後福山神主瀬良某講釈有之参詣イタス

初尾十二銅・講礼五分持参

閏五月廿五日 快晴

囲米上り不足福原白坏へ伊三郎差向ル

閏五月廿六日 快晴折々曇

泉屋方借受置候野立箱相返ス、周吉ニ為持ル、同方へ

用立候蒔絵棗帰る

閏五月廿七日 快晴

御囲炭調書面御役所へ差上ル

閏五月廿八日 折々曇、土用今夕

朝礼廻り、今日菜蒔少タイタス、夜西善寺にて

浄瑠璃有之、忍ひて聞_ニ行

閏五月廿九日 曇、少々冷つく

家内掃除御神酒上ル、夕方西善寺老僧請

読経、銀山方々山組頭被召出、高橋被参候所洗様之分灰吹盛方

之義厳重被仰聞、夕方銀吹呼出談

暮合増田氏入来逗留_ヘ三嶋屋小兒病死之由_ニ付明日嘉助差遣、菓子貳匁・塔

婆・ふせ・とうは料_レ

六月朔日 曇

礼廻り、社参、昼後買前一条_ニ付集会

六月二日 晴折々曇

泉屋主人暑見舞入来茶話、今日有功卿御歌

周信二フク、尚信筆虫干、此間河嶋様献金之

御賞白銀五枚被下候趣_ニ付御悦_ニ出ル、肴三匁

六月三日 快晴

きよ鉄*娘頼来、今晚盃イタス

六月四日 朝曇後快晴

鉋鏈買前之義定御役所_ニ被仰渡、銀吹・諸山山付

召連罷出ル、請書差上ル

六月五日 曇

藤井様嶋田庄五郎様暑見舞御入来茶話

昼後靈松院殿御正当龍昌寺へ招ル

六月六日 曇、夕立有、晚前雨

なら漬・粕配り

乍恐以書付御届奉申上候

一、麻衣 沓連 一、木綿黒衣 貳連

一、五条袈裟 沓ツ 一、木綿白単物 沓ツ_貳

一、木綿緒かすり単物 沓 一、寝巻 沓ツ

但_ヘ表めくさ嶋・うら浅黄_レ

一、弓張提灯 沓ツ

ノ

右ハ銀山町浄土宗大安寺無住_ニ付拙寺_ヲ兼帶仕罷

在、先住弟子智本尼当分差遣置候所、同人義当月二日

在出仕一昨四日罷歸り見受候得ハ戸仕廻不宜候哉、前晚

盜賊這入書面之品々盜取何方へ立退候哉相知不申

候、此外相変義一向無御座候、依之乍恐以書付御届奉申上候、以上

已六月 銀山町

極楽寺

大森

御役所

取次印形

上野宗十郎君_ヲ書状、沢西_ヲ到来

普賢院様御札箱返ス、書状認明日大吉屋迄為持

高雅先生へたんさく礼無名異式包送ル

夜藤十志義立会

六月七日 快晴

大もり粕配、鶴次・房藏、普賢院へ御札箱大吉屋迄

為持る、薄茶沓斤・茶巾布沓尺三寸引当沓分沓朱添

藤井様へ頼ム

(六月八日の記事なし)

六月九日 快晴

昼後上組暑見舞

六月十日 快晴

暑見舞廻る

寝るものハ 寝せて誠の すゝミかな

六月十一日 快晴

八人

山組頭之内老人通気管世話方山付之内老人

右御呼出ニ付、高橋猶之丞・手嶋房右衛門罷出候

御褒美御手当として金百足ツ、被下置候、尤

山付之内ハ高下も有之、難有頂戴仕候

当方懸樋水口長見屋敷方取来候所、水勢少く

候ニ付、大谷西善寺前井戸方取候積、水口近所千三郎

勇助・西善寺熟談ニ付今日方修復取懸、多作

次平・宗四郎・弥三郎・好太郎

六月十二日 快晴

右御手当御礼銀山方へ罷出ル

戸樋之方多作・次平・宗四郎・嘉助・弥三郎

山崎拝借御沙汰此内有之ニ付、今般利銀之内上野氏

相談之上銀四十二匁ツ、兩人方弁銀、山崎方少々働有之

百目之辻上納ニナル

六月十三日 快晴

戸樋懸多作・宗四郎・弥三郎也、水勢至^而強ク大悦至極

いたし候、本城氏請待水神祭頼ム、酒飯出ス、初尾百六十文

此間中の人別へ酒飯出シ祝ふ、神酒式升勇助方へ為持

近所中へ進物、西善寺へ壺升、西善寺和尚夕方

内用ニて入来、右水口同寺地所ニ付挨拶等イタス、酒飯

出ス、夜上野兄公入来、本城へ縁談之義相談イタス

六月十四日 快晴

新切山荷払立会、丹兵衛・好助・国次郎・幾太二丁ニて廿九匁ヨ出ル

六月十五日 快晴

朝髪結、近所礼廻り、墓参りイタス

月並修法通夜

六月十六日 快晴

常

土用干イタス、洞城筆盤之図十五匁・稻穂三匁・絹代

六匁四分八リ宗助へ渡

六月十七日 快晴

土用干

六月十八日 快晴

屋齋西善寺老僧招待

上宗君沢西ニて病氣ニ付源助差遣柏まき贈ル

六月十九日 快晴、夜ニ入夕立

六月廿日 曇、夜半過雨

本城せき伊助方へ引取、道具等分遣見分

小わりえひす講へ行

六月廿一日 雨、已刻方晴風有、夕方村雨

昼後上野氏へ行

六月廿二日 快晴、午刻夕立

古桶壺本代九貫五百文ニて大国乙倉へ売

本城方上野へ結納、明廿三日引渡之積、品物今日上博多や迄
為持置

六月廿三日 快晴

尾波百姓名前諸役目等小作房兵衛名前ニ致度段
村役人中へ頼状差出

本城へ上野氏おてふ入縁之積、今日内祝言入家イタス

六月廿四日 快晴

昼後本城へ行馳走アル、夜繁平質見立会

六月廿五日 快晴

腹合アシク休ム、夕方方幸太郎不快

六月廿六日 快晴

終日幸太郎介抱

路地へ水溜池拵、昨日方多作・新次来ル、今日兩人と

平市・嘉助・弥三郎雇、池出来

夜大谷亀助へ悔ニ行 〈栄松院様御逝去ニ付鳴物七日之間御停止被仰出候〉

六月廿七日 快晴

幸太郎快気

辰刻方

六月廿八日 大雨大雷、午刻方小降、昼後快晴

名越大祓之義御停止ニ付文化十四丑年之例を以七月七日夜勤

行致候趣、城上三神主中方書状到来致候

六月廿九日 快晴

煤掃、竹市・弥三郎・鶴次・ふき雇入

山神宮名越之義御停止ニ付七月^{三日}夜勤行之

積り、神主衆中申出有之候間、小前之者へ御

申聞可有之候、以上

巳六月廿九日 年寄

〈定使・町組頭〉中

六月晦日 快晴

醬油仕込

七月朔日 雨

社参礼廻り、昼西善寺老僧招、夕方集会

大坂方薬種代返ル、金貳分貳朱と錢百七十文文太方受取

七月二日 曇、午刻頃雨

囲米売渡之義伺ニ罷出ル、泉屋ニて寛談、御支配御たんさく同家
にて貰ふ 初冬へ物おもふ 袖いかにせむ 大空も
しくれふるといふ 冬ハ来ニけり 焦良

七月三日 快晴

山神宮名越今晚勤行家内一統参詣

薄茶・茶巾布詔之品藤井様方到来、木地菓子器五枚・新

薄茶小壺ニて壺、上博多屋方恵ル

七月四日 曇、午刻夕立

七月五日 快晴

古懸注文書イタス

七月六日 快晴大暑

七夕祭賑々敷

七月七日 曇、午刻夕立後度々雨、夜大雨

城上社名越祓子供不殘参詣

今朝御役所へ御礼ニ出ル

七月八日 快晴

諸注文認懸る、寅年卯年買請米石代金納歩合
割返し下ル、昼後神宮寺ニて割賦渡

七月九日 快晴

七月十日 快晴

七月十一日 快晴

七月十二日 快晴

七月十三日 快晴 二百十日至^而穩也

早朝^方甚多用終夜

七月十四日 曇後小雨、夜半頃^方雨

朝墓参

七月十五日 雨、昼後^方止

早朝中元礼廻り下モ龍昌寺迄参、大雨ニ付帰ル

上組礼西善寺ニて薄茶出ル

夜月並修法勤ル

七月十六日 快晴

仏前飾替

七月十七日 快晴

七月十八日 曇後晴

七月十九日 快晴

七月廿日 曇折々村雨風少々

御公儀御備御用ニ付郡中村々^方献金致候

ニ付銀山町も献金可致旨被仰渡候由、宿^方

申越ニ付少々成とも及力候丈差上度、山町

役人一同評義集会

えひす講多作方へ行

七月廿一日 快晴

右献金一条鹿野様へ山崎氏出森、役人一同
心腹之程伺

山内夫食払底ニ付、買入米致度段御内宅へ

上野氏出森、且代金御拝借願

七月廿二日 快晴、夜風ある

右買入米代之内金拾五兩御拝借証文差上^并

温泉津表御番所^舟へ御添書願として拙出森

午刻帰ル、直様上野作太郎・横田弥太郎兩人

同浦へ罷越

右献金之義猶又伺として鹿野様へ山崎氏

出森之所山内之義ハ近来不盛困窮之義ニ

候間献金不差出候^而も不苦^旨被仰聞候

一同難有奉存候

夕方高野君入来茶話

七月廿三日 雨後止

温泉津行兩人午刻後罷帰ル、米拾六石買入

直段濱懸り込八拾五匁余

地藏会賑々敷、夜八ツ頃済

七月廿四日 雨夕方大雨降

七月廿五日 曇

七月廿六日 晴

七月廿七日 晴

銀山方御書付到来ニ付、昼後河嶋様へ罷出候所、近来

山内風聞不宜義有之候趣ニ候間取締致役人見廻り致

可申候、御役所方も不時御見廻り御出し被成候趣、御内意

有之、夕方方集会同夜取分風聞不宜者上組ニて

四人、下組ニて五人組合差添呼出他出差留申置候

七月廿八日 快晴

買入米売立出役、夜五ツ半時下組見廻り

七月廿九日 雨

三十日受引

八月朔日 快晴風強し、夜四ツ時方雨

少々差支有之候ニ付御礼出森断ル、上組礼廻り

八月二日 曇後晴

八月三日 快晴

一昨朔日方今日へ懸、店さらへ致ス、見廻り

八月四日 快晴

昼後坂根山見廻り、夜宮橋本主法立会

八月五日 快晴

川井君人来茶話

八月六日 快晴 彼岸中日

おふき足痛ニ付天河内増田氏招ク

八月七日 快晴

張物イタス

八月八日 快晴

同断

八月九日 曇

同断 後晴

八月十日 快晴

已刻方山屋来申刻帰ル、一休禪師立物

交易・玉舟立物・景文十二枚外三分二朱位勘定合

都合五両余ニ当ル、逸雲孔雀交易・董

其昌十二枚渡、価三分位ニ当ル、石摺千字文^并

***花句立物交易、詩仏十二枚渡、三分式朱位也

夜見廻り

八月十一日 快晴

昼後天神坊前石垣見分夜会所集会

風聞不宜者金三郎・才市・作次郎・兵四郎・市太郎

・好助・廣太・作吉・たか、右之者共慎ミ申付ル〈弥三郎・つる次〉

八月十二日 曇夜半頃方雨

路次池の縁石居ニ次平雇、^{弥三郎}昼時桶屋三人

来、夕方高野君上野氏へ入来ニ付招ル

夜下河原圓平後家風聞不宜ニ付諸品商ひ

^并旅人并当宿差留ル、布川富十立会

組合元次・豊吉呼出ス

八月十三日 雨昼後方止

腰痛已刻迄臥、昼後右過怠人呼出差免

八月十四日 曇、夜半過雨、四ツ時地震又後少震

張物イタシ、長樂寺法印遷化ニ付悔ニ行、香代老々

待宵や 心たしかな 入日影 待宵ハ 唯さハかしき 往来哉

八月十五日 曇

藤井君・福本若君御立寄、上野兄入来、菓子^ニて

茶点包棗

雲添ふや 傾く影も 早き月 雲とれて 人の湧出し 浜の月

名月や 朝ハ静に 犬の臥

夜月並作法通夜

八月十六日 曇

神宮寺秀学近住十三回忌^ニ付夜読経^并

祝法勤マル

八月十七日 大風未刻^方雨

本城祝言案内相談等^ニ昼後大住氏へ行

八月十八日 雨

八月十九日 曇、夕^方雨

巳刻頃^方長野君・玉置君入来茶話、未刻

過歸去

八月廿日 強雨

夜松原えひす講へ行

(丁間文書)

明治十年

秀学近住三十三回也

八月廿一日 快晴

朝本城へ行、祝言包物イタス

八月廿二日 快晴

本城氏婚礼諸式^ニ付朝^方用向、午刻^方同

家へ詰祝言首尾克整、夜四ツ時帰宅

八月廿三日 快晴

昨昼時^方幸太郎不快^ニ付午刻迄在宅

昼後本城氏上野兄入来、夫^方上野へ昨日

之挨拶^ニ行、夫^方宗吉方友吉帰国悦^ニ

行、夜^ニ入帰ル

おりき誕生祝餅今朝搗、親類中

懇意中へ配ル

八月廿四日 快晴

本城おてふ出初

八月廿五日 快晴、朝五ツ半時地震

おりき誕生祝客廿人・勝手方廿五人、跡^ニて桶祝

桶屋平十・源七・弥平三人へ百文錢七枚ツ、祝義出ス

新規五尺桶出来

八月廿六日 快晴

八月廿七日 快晴

小松地村毛見宗四郎召連行

八月廿八日 辰刻^方雨後止

上野氏法事終日詰ル

八月廿九日 曇

巳刻宗吉方逗留医師 入来酒飯

出シ申刻歸去、夜石溪子来ル

八月晦日 快晴

朝上博多屋へ行、昨夜宗十郎君帰国対面土産
受納、釣瓶形水指宗助方使へ渡

九月朔日 快晴

礼廻り、夜宗十郎君入来、今日薩州接木師
来継穂数々致サス、万覚帳諸扣之部ニクハシ

九月二日 快晴

御代官様屏風曾根越大家本郷へ御検見御通行
ニ付未明新切山へ出勤、五ツ半時御通り、夫方

間歩受人差添御役所へ罷出ル、夜宗十郎君入来

元々吉田簡助様着陣悦式勿持参

九月三日 快晴

本城内招ク、夕山崎へ招ル、夜宗十郎君入来逗留

九月四日 晴陰定らす

大住御内様入来、茶及酒飯出ス

九月五日 朝曇後快晴

巳刻泉屋主人入来茶并酒飯出ス、未刻歸去、夫方
障子張かへ、夜炉開イタス

九月六日 快晴 午刻方曇

夜宗十郎君外一両輩入来

九月七日 快晴

戸藏村毛見多作同道

九月八日 快晴

九月九日 快晴

御役所御礼ニ出ル、歸り上組不残礼、西善寺にて茶服

九月十日 曇、少々風有

作太郎式地参り帰宅、悦ニ行

九月十一日 曇、村雨

西善寺へ行、笕水口取極等咄合

九月十二日 曇、夜雨

朝看経、夫方出雲屋祖母葬式ニ立、夕西善老僧

請待誦経

九月十三日 快晴

九月十四日 曇

祭礼奉納のぼり花こしらへる

九月十五日 快晴後曇

囲米売渡立会、夜月並通夜

九月十六日 曇

のほり花こしらへ竹一・平市・啓市来、杉白板大住様

・藤井様へ為持ル、昼後酒代取立書出認

九月十七日 快晴

昼山崎へ被招、書出イタス

九月十八日 快晴後曇

諸受引多用

九月十九日 快晴夜雨

城上社大祭昨夜河嶋様方門脇内藏次被為召、祭礼

御神幸正五ツ時之積御代官様方被仰聞候間、其旨

相心得可申段被仰渡ニ付谷々へ触ル、辰刻方人足参

支度致シ早天下ル

九月廿日 時雨あられ

夕山崎へ招ル、夜月並えひす講、市原へ行

九月廿一日 快晴、昼後時雨

三州豊川稻荷明神御神像宗十郎君を囉ふ

今日天野氏招待開眼祓禊、御初尾八丸式匁

池余り水多作・繁平へ分ケ候而今日寛彼方へ

仕懸祝神酒ニ家内中招るゝ

九月廿二日 快晴

帳合イタス、江戸堀氏伯父当三月十二日

死去被成候趣、上野方しらせ有之聞懸、今日方

五日之間神拝等遠慮イタス

九月廿三日 朝小雨

貫高調新切山にて有之、大住様・藤井様御登山

大坂為登灰吹銀貫高調

一、灰吹銀 三拾三貫式十七匁

内 三百廿七匁 壹分通山入目

外 貳貫目 位足用心銀

少以 三拾五貫廿七匁

内 廿貫八百四匁壹分 九月十七日判迄出来有候分

残 拾四貫貳百廿貳匁九分、此先出来可致分

此訳

八貫四百七匁八分九厘 諸山割付

四貫貳百三匁九分六厘 同五割増

老貫六百拾老匁五厘 銀吹吹増

少以

九月廿四日 快晴

新酒初添懸ル

九月廿五日 快晴

銀吹御呼出ニ付差添罷出候所、銀吹人足共老人老日ニ御

手当五十文ツ、明廿六日方被仰付候間、其旨相心得取

締之義無之様被仰渡候

今夕方明日へ金光明最勝会講於榮泉寺修行

有之ニ付御札守御初尾金老朱持参致置候

九月廿六日 快晴夜時雨

備中普賢院様へ川北方便有之ニ付、書状差遣御初穂

金百疋在中、山崎方書状金百疋右二封川北へ為持相頼

九月廿七日 雨、夜風出ル

祭礼前多用、夜宮家内一同参詣

九月廿八日 曇時雨あられ、昼頃方晴

山神社祭礼、大住様・三宅様御立寄茶点

酒飯出ス、床無名山水常信花鳥

夕前方子供角力致シ賑ふ

九月廿九日 曇時雨

昼後上野氏へ行、夜上野兄上入来

九月晦日 曇

御祈禱羅漢寺大忍阿闍利招待へ御布施当百三枚・仏前回向八分

十月朔日 快晴

礼廻り、夜五ツ時大森新町紋次裏納屋少々
火災有之、出張イタス

十月二日 快晴

朝大住様へ御見舞、昨日御振舞御礼旁行、昼後
帰宅

十月三日 快晴

帳面表紙張

十月四日 雨

今晚報恩講勤ル、御布施式百文・伴僧百文

十月五日 快晴

御番所へ廻勤 タ

十月六日 快晴

今日灰吹銀判打、不進ミ付銀吹手元調致ス、昼後
玉置君人来、夕上博多やへ招ル

十月七日 快晴

銀吹調行形今朝大住様へ罷出申上ル、桜間歩
当十月方運上老奴五分ツ、上納致度段、上野清十郎
願れ候ニ付三宅様へ申上ル

新酒船上ケいたす、内祝ひ宗四郎へ百文・祝義

当年古酒直段安く新米高直ニ付新酒直段

六ヶ敷、依て泉屋方古酒少々買受、古酒ニ合シ

当分売方イタス

十月八日 快晴

十月九日 快晴

万体地藏尊開眼極樂寺へ頼ム、当百老枚・ろうそく二丁
夕方大住氏へ召寄らる、野沢御新造親子・内坂御内酒飯
茶点

十月十日 辰刻方雨

釜懸芭蕉翁御像へ手*花手向、昼後方炉前ニ
閑座句案等イタス

御会式や 待得しやうに はつ時雨

時雨るや 日々来る友も 珍しく

夜石溪君入来

十月十一日 曇

夕方上野方案内有祖翁尊像拝す

降もまた 残る天気や 枯尾花

夜本城氏へ招るゝ

十月十二日 曇、夕方方雨

高橋婚禮悦ひに行、肴代式匆

十月十三日 曇、巳刻村時雨

一中庵にて口切会催案内あり、桃千子同道

之積之所同人不快にて序一人参ル、参懸小田や
にて馳走、夫方西川へ未刻着、待合にて清水や
勇次郎詰風話

巳十月十三日夕去口切会 主 一中庵

客 貯月庵 清水や勇次郎

待合 重硯 料紙 小風炉

腰懸 火入 拍子木

初座

熨斗

花 寒菊 笏 半寸庵

釜 *及 炭取 菜籠 三ツ羽 鶴

香合 鴛鴦形 了善作 灰器 青備前

水次 ヒタメ片口 蓋置 青竹引切

料理

皿〈作りミ・うと〉 汁〈ルシ・蕪〉 御飯 椀〈切ミ・くたち〉

中酒 茶碗 玉子むし 鴨 椎茸 かんひやう

吸物 初霜昆布 燗酒 取肴 栗 ゆり根

うり漬 香せん 湯 菓子 いも茶巾絞

中立

後座

掛物〈石州公御像致遠画・讃関公御笏 銘大徳寺高林庵真嚴書〉

棚

茶椀 乾山 包棗 黒時代 水指 釣付高取

茶杓 三谷宗慎君作

コホシ 藤名 フタ置 引切

惣菓子

薄茶器

水指 白高麗 茶碗 赤楽 茶入 道八 茶杓 象牙

十月十四日 快晴

一中庵にて逗留、若住持真成僧会主にて

今日も会有之

客 貯月 一中

懸物 不昧君御筆御会料理書御扣之横物

釜 庄兵衛作丸 炭取 籠 三ツ羽 ツル 香合 ヲリベ

灰器 備前 水次 フタ置

汁 サイノメ

皿〈くたち・白あへ〉

飯 〈鴨・椎茸・午房・こんにやく〉

花 梅つる菊 笏 釣舟 水指 伊賀

茶碗 古萩 茶入 唐津 茶杓 千種有功卿御作

銘数椿

こほし カラ金 蓋置 青竹

右一会始終満尾

午刻一中庵より出立、五岳画はせを翁像并

銀柳同方にて譲受帰ル

夫方小田やにて逗留

十月十五日 快晴

小田やにて茶箱出薄茶事中嶋屋主人入来茶話

同方午刻出立帰宅

十月十六日 雨

灰吹銀出来方不進ニ付、昼後上野氏へ集会、銀吹

調イタス、夜ニ入帰ル

十月十七日 曇後快晴

銀吹日雇人御手当受取并灰吹調方

申上ニ罷出ル、帰り懸玉置氏・泉屋両家

ニて馳走、夜有草庵主・上野兄公入来
深更迄茶話

十月十八日 快晴

大根引

十月十九日 あられ時雨

諸用つとひ

十月廿日 雨後止

えひす講祝ふ、弥太郎・宗四郎・竹一・客平

夜三原やえひす講当番へ行

十月廿一日 快晴、夜時雨

灰吹出来方不宜ニ付御役所へ出ル、柳やニて昼飯

十月廿二日 曇

右同断ニ付御役所へ出ル

御為登高三貫目減方

本銀三拾貫目 十一月十二日御差立之積

十月廿三日 曇夜大風雨

月並十五夜修法延引今晚相勤ル、夜七ツ時

大森町宮ノ下モ高野様隣家出火ニ付罷越

翌五ツ時帰ル

十月廿四日 大雨

十月廿五日 雨、夜大風

寒垢離三人来、初穂四十文ツ、式包

例年之通酒造祈禱橋本氏へ頼、初穂百疋御神酒

銘酒壹合五勺位為持ル

囲米勘定屋後立会、急稼中火元

見廻り町方へ出役致候積、評義今晚下組

へ罷越

十月廿六日 曇

御祈禱有之、夕方橋本氏へ行

十月廿七日 曇

会所米売立出役、夕西善寺へ行

十月廿八日 曇、夕方時雨あられ

今朝西林寺へ折平遣わりたんす・直養短冊送ル

小田屋へ正道津師立物・極間君扇子送ル、勇次郎へ

(丁間文書)

差上申御請書之事

当年の義ハ春已来山方不盛ニ付、去月

七日判迄出来灰吹銀漸八貫四百目余有之

此節之模様ニ而ハ去辰年為御登高ニも相届

兼可申ニ付、当月ハ灰吹銀百目ニ付銀五拾匁

御手当被下候間、格別出情相稼灰吹銀

出増候様可仕旨被 仰渡承知奉畏候、尤鉋鏈

之義上中下之差別も有之ニ付、別紙御書

下ケ之通御手当被下候間、銀吹稼人共馴合

不正之取計致間敷候、且山組頭方江諸山

稼人共呼出能々申諭正路ニ売買可致旨

嚴重申渡、鏈払之度々山組頭・山付立会

可申、万一如何之風聞等被及御聞候節ハ銀吹

稼人ハ勿論山組頭・山付一同急度被遂
御吟味候旨被仰渡一同承知奉畏候、依之
御請一札差上申所、仍而如件

忠八丸釜為持置、石州好風炉釜彼方到来

明日上宗君出立（餞別式朱）夜下組見廻り

かけ硯箱金壹分式朱百文・桐火入五百文にて買受ル

十月廿九日 快晴

養育米夫食米渡方立会、昼後桜間歩

出灰吹出情御神酒清十郎殿へ被仰付、同方へ招レ

馳走ある、夕方西善寺老僧請待

十一月朔日 曇、辰刻過方雨

社参、礼廻り、買請米願書認加印奥印調

熊皮代引当金式分多作へ為持^并たひ代とも三、竹一

十一月二日 雨

買請米願書出、昼後野沢・関根へ村願^ニ

出ル、野沢にて茶飯馳走被下、泉屋主人

病氣見舞梅花糖式持参

十一月三日 快晴

上野砂水へ此方方入縁之釈妙知日信女五十回忌

正当^ニ付、屋西善寺老僧案内誦経頼

夜石溪子入来茶話

十一月四日 快晴

龍源寺山柄山支^ニ付明り方当役御沙汰有之、上野
氏へ集会取調

十一月五日 時雨

灰吹取調不進^ミ之趣大住様迄申上ル、夜見廻り

十一月六日 曇

砂水へ紋三郎差遣ス、まんちう・齋米式升・仏ふせ三分

・寺参四分

十一月七日 曇、巳刻方雨、冬至

夜家内一同出入之もの集宴

十一月八日 雨、夜雪

夜藤十郎志義立会後下組見廻り

十一月九日 雪

大坂御出役へ御暇乞^ニ出ル、昼後市原氏へ招ル

十一月十日 曇

当已御直段銀九拾式匁九り之由文太より

知せ有之

十一月十一日 曇

吹所見廻り、夜下組見廻り

十一月十二日 曇

酒直段上式百文・並百文六十文之積、泉屋方申越、明十三日方

相改候積り

灰吹銀今朝御差立^ニ相成ル

十一月十三日 曇

新酒配、酒直段今日方上ル、新横相敷内にて柄山

引落朝番之者上り遅キ由、高橋方しらせ有之
ニ付夕過御見舞ニ上ル、帰り吹所見廻り

十一月十四日 曇雪はれ

朝川井様・大住様へ行、大住若御新造御縁談
之義也、昼後吹所見廻り、夕方貫高都合ニ相成ル

十一月十五日 曇、夜七ツ時地震

月並修法通夜、石溪君入来

十一月十六日 快晴、夕前方雨

十一月十七日 昼前方雨

昼後大住様へ行、夫方川井様へ行、深更帰ル

台子道具広島方到来之由ニて泉屋方為持

来ル、風炉金金式両式朱・水指・杓立・こほし三品

金壺両壺分式朱、輪フタ置^を朱・リウコフタ置式朱

と申参ル

十一月十八日 快晴

鉄丸炉川本鑄物師へ玉置君御手寄ニて詔到来

代銀拾式匁五分、玉置様へ今日為持ル

十一月十九日 雨

歩銀勘定当番午刻頃方同役中集会

夜四ツ前開キ

十一月廿日 晴

夕方方大住・川井へ行、深更帰ル

十一月廿一日 快晴、夜四ツ時方雨、小寒ニ入

泉屋主人快氣祝ひ夕方方招ル、深更帰ル

十一月廿二日 快晴

市原氏藤十志義質見ニ立会、夜えひす講

会主水田藤市・秋三郎方へ出振舞有之行

十一月廿三日 雨

石州公御像一中庵より借ル、今日奉懸献茶

夕方上博多やへ招ル

十一月廿四日 快晴

朝役用集会

十一月廿五日 快晴雨

新切山惣塩搔^ニ而招ル

(丁間文書)

(上部破損) 斗五升 一、式斗 赤

斗 酒

十一月廿六日 曇

店口六畳敷ニ作事イタス

十一月廿七日 雨

多用、夜本城内病氣ニ付見舞、帰宅後四ツ時過方

きよ病氣晩前臥

十一月廿八日 曇

大住様御立寄茶飯出ス、午刻過方きよ病氣

見舞人大勢来ル、夜市原氏逗留、心配也

十一月廿九日 曇

病人兎角不宜、見舞人来ル、夜半頃病人

親元へ連帰ル

十一月晦日 曇、折々雪はれ殊之外寒し

昼後本城氏へ見舞、夜如意法修

十二月朔日 雪はれ

当日礼廻り并寒中見舞兼歩行

十二月二日 快晴

御山大盛御祈禱俗油之義普賢院へ被仰付度

段先日河嶋様へ申上ニ上野兄上御出之所、当方之義

ハ可部福應寺へ申遣可然間、評義之上右之段願出

可申旨御内意ニ付昨日高橋氏出森申上候所、今日

(丁間文書)

(端裏書)

「高橋富三郎様 上野清十郎

御答」

御紙面拝見仕候、然者別紙

美濃屋方之書状後藤様方

御召之趣、然ル所御腹痛ニて

拙罷出呉候様御申越

被成、拙も今日ハ米之方当番

ニ而只今昼引ニて在宅罷在候

仕合、米之方へハ下モへ御頼

申暫拙下森可仕候間

左様御承知被下候、右

御答申上度如此御座候

以上

十一月七日

御下知有之、右之積御聞濟被遊候間山付之内耆人

差遣候様被仰聞候、其段人撰等ニ夜ニ入上野氏へ

集会

十二月三日 快晴、午刻方風雨又あられ

地藏尊流水灌頂ニ仁万浦へ弥三郎・竹市・梅二郎差向

十二月四日 曇

福王寺へ原田秋三郎差向明日出立、律師様へ書状・菓儀老朱・上葛老

差上る

十二月五日 あられ

古懸注文書

十二月六日 寒風あられ

ミそ搗イタス、夕方上野氏へ行

十二月七日 雪大風

十二月八日 曇

新横相根戸亀作・兵四郎切地道中落潰候

ニ付急修復を以取明切地へ参り見候所、下り口江

何れ方致候哉棚押木等を入有之、悪煙下タ

方吹上敷内嗅気堪かたく四ツ留口迄も吹出し

候趣御木屋へ訴出候由、高橋氏方夜中

相談有之候

十二月九日 晴

「先日同家世話ニて広島方

到来之風炉釜^并三ツ物

代金三両式分駄^{ちん}志貫四百文

今日持参相渡、フタ置二ツ返ス

柳屋祝会悦びニ行、泉屋へ訪

昨夜高橋^が談有之候山方一条、永久八番上り切地

が多分抜合、同所^が悪煙仕懸候様被察候間、早々

敷入見分可致旨新横相^が御沙汰有之候ニ付

拙上野作太郎^并外山付光田丹兵衛・光田千三郎

同道ニて罷越、永久八番上り稼人貞吉・勘藏

呼出一応相糺、外山付兩人見分ニ差向上り

候上、永久御木や^并新横相へ見分之趣相届

同役中へも申通し夜半過帰宅

十二月十日 雪

朝^が夜ニ入候迄右一条双方取調

十二月十一日 雪

中屋頼母子落札質地戸藏村御崎元火の元同山林

ミさきの元山沓^ヶ所差入質見、岡・柳出屋・中田屋

本田屋・中屋入来

十二月十二日 雪

新横相・永久論所取調、夜本城へ見舞

十二月十三日 雪

普賢院^本

十二月十四日 曇

普賢院^が献札・供物到来、夜本城へ見舞

十二月十五日 曇

原田秋三郎昨夜帰国、律師様^が御状^并全紙御作之御書

手本少々下さる、昨日普賢院^が到来之献札・供物

湯呑所迄小回り^ニ為持る、大谷きよへ見舞

夜月並修法通夜

栄泉寺寄進三方^并畳施主割合^七貫九百式文

相懸り候由川北^が申参、則差送る

十二月十六日 曇、夕方^が折々雨

永久・新横相一件集会丹兵衛・千三郎敷内見分遣ス

福王寺御祈祷御礼^ニ御組頭様へ廻ル

十二月十七日 曇、夕方^が折々雨、夜風

御書付到来夕方大住様へ出ル、右両山一件御内意有

福本様へ切地伺^ニ出ル

節分星祭御祈祷北嶋御殿へ川北^が代参有之ニ付

一緒^ニ頼ム、御初穂金百疋上ル

十二月十八日 快晴

藤井様・野沢様若御入来茶話、昼後御帰り

夕方上野・山崎両兄・本城氏出店年忘^ニ招ク

夜本城へ見舞

十二月十九日 曇

明日御祈祷前拵

十二月廿日 曇雪、節分

星祭り御祈祷天野様請待、今晚^が御飯等

焚、朝正六ツ時入来、入湯後直様行事はしまる

午刻過相済御初穂大錢拾枚

夜上野氏へ招るゝ

十二月廿一日 雪

神壇相仕舞午刻方寄合、永久・新横相

一件济口申渡受書取之

十二月廿二日 曇

大社星祭り御守川北方到来、羅漢寺にて星祭

御守被為持候ニ付御初穂百文錢五枚上ル

両山一件济口届ニ福本様へ昼後出ル、中山様

大坂方帰国、悦式方持参、夜山崎氏へ招るゝ

十二月廿三日 晴

朝方諸用多忙、田中氏へ杓刃、岡元四郎様へ杓刃

為持ル、御奥へ銘酒老升、おさく様へ別懸為持ル

夜新横相御懸り方此間中論所取締書付可差出

御沙汰ニ付、上野氏へ集会

十二月廿四日 晴

諸用多忙

十二月廿五日 晴

餅搗竹一・宗四郎^{八九}・折兵衛^七・弥三郎^五・鶴次^五・もん^{八九}・ふき

右人数也

五ヶ山稼人一同方此間中難渋願申出書面差出

候へとも不容易願ニ付春迄見合可申段

利解申聞置候所、今日駆込願一同御門内

へ押懸候由、幸ひ作太郎出森^{ニ而}直様御引

渡ニ相成候へとも一同山内引取不申段作太郎

方申越候ニ付、昼後方拙出森利解申

聞候へとも承伏不致漸惣代之もの十人計

承知いたし夜八ツ時過召連罷帰、直様

同役中町組頭集会評義取調致ス

十二月廿六日 曇、夜四ツ時過方雨

米拝借致度願申立候ニ付清十郎殿出森御

伺中へ又々一同御門前迄押懸候ニ付元々

吉田隣助様御出浮御取鎮被遊宿迄引

取候、漸夕前山内へ一同罷帰ル、直様集会

十二月廿七日 曇折々雨

集会、夜御詫書御内見ニ大住様迄罷出ル

十二月廿八日 曇折々雨

御歳末御礼高橋氏出森、例年之通御手当

山組頭一同へ被仰付候

右一件惣代五人召連詫書差出^并米拝借願

御聞済ニ相成、稼人老人へ式斗ツ、夕方集会

人別取調

十二月廿九日 晴

終日多用、夜上野氏へ歳暮の礼ニ行

十二月晦日 快晴

終日多用、今日上宗君帰国

夜如意法修行

通夜賑々敷家内一同相揃目出度

相仕舞新年を迎侍る

(一丁空白)

安政五年戊午歳

正月元日 快晴

晩天神拝吉書初、家内中雜煮・屠蘇祝ふ
大服済、上組御慶済、西善寺にて菓子ノ茶湯
帰宅節祝といねツム、夜如意法勤

正月二日 曇、辰刻方ミそれ

御役所御年頭山町役人一同罷出ル、山神神主
并文英昨年之通り出ル、新切山山入御祝ひニ
出勤イタス

雪ふかき 峰うるハしく はつ日影

門松に 雫残りぬ 去年の雨

正月三日 晴

晩天諸神拝、午刻御飾下シ、柳屋年礼入来

昼後本城氏招家清メ上野父子・山崎氏・上清・上宗

出店年盃ニ招ク

正月四日 快晴

諸寺院年礼、旧冬ヨリ初春諸用シケク、けふの

昼後より漸閑を得て炉辺ニ楽ヲナシテ窓を明

春のけしきを詠侍る

昼後家内一統出店へ年盃ニ招る

正月五日 快晴

米搗弥三郎・鶴次、午刻上野氏へ節振舞ニ行
午刻後大住様へ年盃ニ招る

正月六日 快晴

今夕方前々節振舞、小割并安之助・竹一・多作
平一・宗四郎・次平・繁平・嘉助・源太郎・房蔵客入来
前より手伝たい跡座唯八・さかのもん・つね右
人数夜四ツ前済

正月七日 快晴、夜明前々雪、夜四ツ時初雷

泉屋種四郎子年頭雜煮・節出ス、柳屋友次郎来
昼後上博多やへ年盃ニ招ル、夜石溪子入来茶話

正月八日 雪

初寄合嶋台調上野氏へ集会、山組頭方耄枚、
龍源寺山・恵珍山・永久稼所式枚・新切山・大久保山・桜間歩
都合九面、山町役人・諸山仕手惣代へ廻文出ス

昼後多作方へ家内中年盃ニ招ル、夕方新横相

御懸り高野様方使を以呼ニ被遣、即刻上り候所

当五日永久へ盜賊立入御懸り田中助太郎様刀を

盜取候ニ付早速内々取調呉度御談有之ニ付

心配いたし手筋等内々取調呉度御談有之ニ付

上野氏へ及相談、山付秋三郎へ相談、右場所稼人之内

内実を以被取調候様申談ス

正月九日 雪

正月十日 雪

明日の支度にて多用

正月十一日 雪、午刻方晴

早朝山神社参詣帰り帳面表紙認

御代官様御社参御下向後御祝盃頂戴、山町役人

諸山稼人惣代御広間へ罷出ル、酉刻一同引取

正月十二日 雪後晴

帳面とち宗四郎手伝ふ

正月十三日 晴

正月十四日 快晴

昼本城へ招る、夕山崎へ招る、夜谷々居はやし

正月十五日 快晴

御割札御墨入願書可申段、旧冬御沙汰有之候ニ付

今朝見分ニ行、札七枚・千文字相消候、右七枚大工

孫右衛門へ申付ル

夜準提法修行通夜

正月十六日 快晴暖気、夜風、夜半過方雨

山組頭之内老人・諸山山付老人ツ、可罷出旨銀山方方

昨日御書付被仰付、上野氏出森

近来山方不盛山内一同困窮之趣奉御聴候ニ付

山々存寄厚場所切延取明所等可申出、相当之御手

当御下ケ銀被仰付候段被仰渡候

新帳面へ写取、今日方相はしめる

正月十七日 雨

昨日被仰渡候趣、諸山稼人四五人ツ、呼出申渡

乍恐以書付奉願上候

御高札

一、灰吹銀潰銀之義 壹枚

一、伴天連并切支丹之義 壹枚

一、唐物并拔荷之義 壹枚

一、火を付候者之義 壹枚

一、はてれん之訴人之義 壹枚

一、ととう之訴人義 壹枚

一、於銀山町往来之旅人猥宿貸申間敷義

壹枚

べ七枚

右ハ銀山町御高札常々大切ニ付候所、書面之

御箇條有之候分年数を経、文字自

然与所々少ツ、摺消難相分御座候ニ付

右御高札七枚并新板札七枚差出申候間

何卒御墨入被為遊被下置候様奉願上候、以上

午正月 町組頭

年寄見習 福岡平藏

同

年寄 布川留十

定使

同肝煎 門脇内藏次

同

上野清十郎

銀山方

御役所

正月十八日 曇

例年之通、神酒開集會、川井様御立寄茶話

正月十九日 曇

午刻上博多屋不幸ニ付行

正月廿日 快晴

朝方上博多屋へ行

正月廿一日 晚方雪後曇

上博多屋葬式立會

正月廿二日 快晴

正月廿三日 曇、午刻方雨

上博多や・下博多や無音見舞ニ行

於榮泉寺恒例最勝會有之御初穂為持ル

正月廿四日 曇

早朝出店ニ出產、明日最勝會并準提尊

法為御祈禱榮泉方丈へ案内致シ仏壇御飾

等前拵ニて多用

正月廿五日 晴、午刻方雨あられ

榮泉方丈早朝方入來金光明真読準提法

理趣分真読有之、夜ニ入詰願御初穂金百五十疋

小僧様へ三匁

正月廿六日 曇

下博多屋へ榮泉寺方丈御入來不動法修行參詣

夜龍源寺山へ行

正月廿七日 曇

今日酒造添仕舞ニ行、一同へ酒出し祝ふ

正月廿八日 曇、夕方方雨

西本坊得道悦式匁、河嶋様昨夜御死去ニ付昼後

御悔ニ出ル、札式匁

覺

御高札

一、灰吹銀潰銀之義 壹枚

一、伴天連并切支丹之義 壹枚

一、唐物并拔荷之義 壹枚

一、火を付候者之義 壹枚

一、はてれん之訴人之義 壹枚

一、ととう之訴人之義 壹枚

一、於銀山町往來之旅人ニ猥ニ宿貸申間敷儀 壹枚

べ七枚

右ハ先達而御墨入御願申上置候御高札此度書

面之通御渡被為遊槌奉請取候、以上

午正月

町組頭惣代

福岡平蔵

定使惣代

門脇内蔵次

年寄惣代

高橋富三郎

年寄肝煎

上野藤蔵

銀山方

御役所

右廿九日町組頭老人差出

正月廿九日 晴

河嶋様葬式ニ行

夜如意宝珠法修

芸州加部福王寺様方旧冬御祈祷献札到来

御状^并額地御作小切到来

二月朔日 快晴

福王寺御祈祷御守御供物御上向^并山組頭・山付

一同へ御守御備配当

大国札場祖母八十八之年賀ニ付被招ル、差支有之ニ付

悦御祝義金貳朱・樽肴・のし使を以爲持る

夜三穂講正月分今晚当方ニて相勤ル

二月二日 快晴

福王寺へ返書認ル、年玉壹朱・海ソウメン少送ル、不動尊

御初穂壹分相添送ル、川北氏へ御組頭御呼レ被成

御取持ニ招レ行

二月三日 曇、午刻方風小雨

稼人へ被下候味噌搗イタス、昼後渡方夕方方天野氏

へ招レ行

二月四日 曇折々雪

昨日同様味噌搗、極楽寺方丈上京ニ付饞別貳匁

仏具壹面誂頼ム、代引当壹両渡

二月五日 曇折々雪

千三郎初老樽^并肴壹匁、柳や栄一郎博多屋へ
ケイヤク取持ツ、今晚盃有之招ル

二月六日 曇夜はれ

二月七日 曇、ヒカン中日

朝安養寺参詣源太郎小兒死去悔ニ行

二月八日 晴

二月九日 晴

二月十日 快晴

二月十一日 快晴

二月十二日 曇、夜雨

初午祭当番神主衆迎ル^并豊川稻荷大明神祭祓

三神主衆頼ム、初尾百廿文ツ、

二月十三日 雨、夜大雨風

二月十四日 快晴

二月十五日 曇

月並会通夜

二月十六日 快晴

大住様へ下ル、本城勘定御覧ニ入ル

二月十七日 快晴

永久御木屋方御使到来、御手当一条被

仰聞、夜本城病人有之趣沙汰有之ニ付

見舞家内一同河豚魚ニ当り候由、主人^并

下女殊之外難義通夜介抱

二月十八日 快晴、曇、夕雨

本城病人兩人共絶脈ニ相成同方へ詰ル

二月十九日 快晴雨

右同断

二月廿日 快晴

右同断、兩人共死去披露

二月廿一日 快晴

本城主人葬式

二月廿二日 快晴

本城氏へ見舞、龍源寺山々呼ニ参罷出ル、御直

縄切所出鏈有之、壹番御勘弁切地明日御渡方

被成候趣被仰聞候

二月廿三日 快晴、夜曇風、晚小雨

昼後本城へ勤ル

二月廿四日 快晴

本城氏初七日ニ付寺参、諸松方いたす

二月廿五日 快晴

襖張かへ

二月廿六日 曇

同断

二月廿七日 快晴暖気

同断、夕利休翁御像献香、翌朝献茶

二月廿八日 快晴

藤井様・大住若旦那・三宅君御立寄点茶西善寺

老僧入来菓子茶湯出ス

夜三穗講三谷屋ニて勤ル

二月廿九日 快晴

節句前書出致ス、昼後大森へ行、本城返礼致ス、泉屋

・藤井様・大住様ニて御馳走有

二月晦日 快晴

御代官様龍昌寺御参詣ニ付出ル

三月朔日 曇、夜雨

三月二日 雨、昼後晴

節句前多用

三月三日 曇

御礼ニ御役所へ出ル、帰宅上組礼

三月四日 晴

普賢院へ御祈祷御奉納之義内々川北方申参、早速橋本

出森内願申上ル

御代官様 ■■■御増地之上大坂へ御場所替之趣、昨日御披露

有之候由ニ付、恐悦ニ罷出可申哉之段御伺申上、即日御内玄

関へ山組頭一同恐悦ニ罷出ル、翌日定使老人・上下町組頭式人

諸山山付老人ツ、被罷出様申触ル

三月五日 晴、夜雨

■

三月六日 晴、夜雨

新切山稼人山根市太郎外老人・山根好助外老人・布川国次郎外老人

右御手当願銀高之内へ三百目宛二丁・四百目迄丁被仰付候

普賢院へ御祈祷被仰付御初穂御書取出候

観音間歩稼人へ御手当青銅拾五貫文被仰付候

三月七日 快晴

諸用繁し

三月八日 晴

上博多屋法事ニ招ル

三月九日 晴

三月十日 曇、夜風雨

内判宿徳善寺鹿野様御出役

三月十一日 雨

石棲尊師筆本額調、刻料十六匁、大坂ノ人

三月十二日 雨

常楽院廿五回・妙善信女五十回仏事イタス

三月十三日 雨

同断

三月十四日 曇

寺参イタス、跡片付

三月十五日 雨

上野氏祖母様五十回・父上様十三回追善勤行有

之ニ付朝方参り手伝イタス

三月十六日 雨後晴

上野氏へ仏事ニ招ル、夕方帰ル

三月十七日 快晴

上野氏親子と俱ニ龍昌寺参詣

十五日夜月並修行差支ニ付今晚通夜修行

三月十八日 快晴

夕方上野氏へ招ル

三月十九日 快晴

増田氏入来逗留

三月廿日 曇後雨

玉子韃・小脇差上惣君持参、短刀と交易ス、価貳分位

ツバハ吉浦商人持参之分入替ル、価壹貫四百五十文

三月廿一日 朝雨後止

天野・橋本へ行、来月本城当番頼イタス

三月廿二日 快晴

昼後大森へ行

三月廿三日 快晴

象牙猿ニ亀ノ根付上宗持参、交易価三朱位

三月廿四日 晴大風、夜半過方雨

万体地藏尊流水灌頂ニ仁万浦へ罷越

三月廿五日 雨

昼後寄会 三月廿六日 雨 〈囲米売立伺ニ出森帰後新横相へ行〉

三月廿七日 曇

津山道具屋源兵衛来ル、懸物光琳桔梗・唐画福録寿・雲嶋山水

・友松花鳥右四ふく交易、委細万覚長ニ記ス

宗十郎君と脇差交易

三月廿八日 雨土フル後曇

養育米渡方立会

御触書留

去巳六月晦日夜撰州西成郡高畑村久兵衛を

殺害ニおよひ逃去候同人日雇同村九郎兵衛人相書

一、生国右高畑村

一、年齢三拾才ニ而歳方増候方ニ相見候

一、関太ク丈高方

一、面体長ク、色白ク、顔こけ候方

一、眼フタ皮眼少し大キ方

一、鼻高キ方

一、眉毛濃キ方

一、髪并月代共濃キ方

一、口常体歯並よく白キ方

一、耳常体方少し太キ方

一、言舌静なる方

其節之衣類木綿紺白堅縞単物ヲ着シ

同縞三尺帯ヲ罷在候

右之通之者於有之ハ其所ニ留置御料ハ御代官、私領ハ

領主地頭へ申出、夫方大坂町奉行所へ可申出候、若於見聞

候ハ、其段も可申出候、尤家来又もの等を入念可被遂吟味

候、隠し置脇方相知候ハ、可為曲事候

午三月

右之通御書付出候間、得其意村々小前之者共江不残様可申聞

候、此触書村名下江令請印早々順達留り村方可返上者也

大森

午三月廿七日 御役所

三月廿九日 曇

極楽寺地藏尊へ家内不残参詣イタサス

留主徒然阿部様・山中様入来茶点酒出ス

後石溪子・山崎兄入来

四月朔日 曇、午刻方雨

昼後礼廻り

四月二日 快晴

愛染明王尊像榮泉寺方丈へ相頼、仏師へ注文

之処、今日来着、拝納料物金三分六日持せる

四月三日 快晴

今夕方大住様法事焼香ニ招ル、まんちう・とうは・齋米料式匆

キサミ鞘・脇差上惣持参料壺両式分ツバ馬ノ分持合

之分入替ル、国廣作鉄ツバはツし置

四月四日 曇八ツ時方風雨

大住様法事朝方行七ツ過歸ル、まんちう・とうは・寺参・齋米

料式匆持ル

四月五日 雨

普賢院へ先日被仰付候浴油御祈禱満願ニ相成

御守札御供物等昨日松原屋小兵衛方方為持越候ニ付

御湯吞所迄持参、川井様取次御願申上差出ス

四月六日 雨

老番火当致ス

松江道具屋来ル、伊川院式幅対・山水日月之画

持参周信松梅ニ鶴ノ式幅対并朝鮮筒茶碗外ニ

老両式分添交易イタス、伊川院二ふく価五兩位ニ当ル

四月七日 曇

本城氏四十九日当日仏前墓参イタス

申刻一中庵宗匠入来

四月八日 晴

宗匠逗留寸書卷一中庵若住持ニ

書写相頼置候所、此度宗匠御持参ニ而

囉受ル、謝儀金貳朱と半紙貳朱

四月九日 快晴

宗匠極楽寺へ花稽古ニ登山有ル

参宮人帰国、いつもやへ樽肴貳匁、ゑひすやへ同断、原田へ大錢老

金三へ同断

四月十日 快晴

一中宗匠極楽寺へ昨日御遊杖之所夕方少々気分悪

敷由今朝沙汰有之、直様登山見舞候所言舌もつれ

中風之下地ニも有之候半かと見候ニ付、市原方薬もらひ

すゝめ、人足三人外針医老人相添駕籠ニて送ル

四月十一日 快晴

ゑひや梅二郎帰国祝ニ家内中招ル

南坊読録之内一巻一中庵方借ル

四月十二日 快晴

和田新平病死ニ付悔ニ行

いつもや安之助帰国祝ニ家内中招ル、留主居徒然屋後

道具屋新一書画持参、庵雪ニふく質金三両ニて預ル

四月十三日 快晴

午刻斎西善寺老僧呼、昼後縄引

四月十四日 快晴

四月十五日 曇、夜雨

仕立屋新市来、菓子製

■ 煉やうかん

小豆五合・水のこしあん・かんでん壹本半水ニとかし置、水見合鍋ニ入

砂糖貳百五十め入、よくく煮解し水のニてこし、右あんを入煮

もちく致時分下シ、重箱へうつし、桶ニ水少シ入重箱をすへ冷し

二時計も置、翌朝重箱を出し切ル也

色ハ付ぬやうに

白雪糖

もち米洗、煎、挽ふるいニておろし、四五日を経候方よろし

砂糖杓子ニて計り水少シ入こね、右の粉杓子ニて計り

砂糖ととなしニ入こね、わくへ入よくく押へ、わくをぬぎ

庖丁いれ、好次第ニ切

利休松葉

右白雪糖ノ通り也、砂糖を煮、湯少シ入こねる也

色付ハ砂糖へ色粉を入とき、よくくこね、丸竹ニて板の上

ニて押のへ、好次第ニ切也

但、白雪方ハ砂糖余分入ル也、砂糖多けれハ

かハき早し

きうひ

もち米壹合一夜水ニとかし摺鉢ニてよくくすり

水のうニてこし、砂糖七十め入、飴三十め位入、但水飴よし

右三品一緒ニ鍋へ入よくくねりかたく成たる時下し

器ニうとん粉敷置、其上へうつし少ししましあん包也

初霜

水とかし置

かんてん^ニ本^ニ砂糖百五十め位入よく煮詰下シ

器^ニ入冷し、夫^ニ好次第^ニ切、一日位かハかし砂糖振かける

右

夜月並通夜

四月十六日 曇

龍昌寺^ニ於て本城^ニ方^ニ施餓鬼頼ム、昼後上野氏へ行縄引

勘定手伝

四月十七日 快晴

一中庵^ニ方^ニ詠歌到来

述懷^ニ西樂と思ふはかりに なりにけり とにもかくにも ものなかへれそ

一中

昼後榮泉寺^并大住様へ行

四月十八日 快晴

四月十九日 快晴

四月廿日 辰刻^ニ方^ニ雨

四月廿一日 快晴

昼後長野君・田中君招点茶

小田屋後室帰国悦、上酒^ニ樽肴^ニ式^ニ勿^ニ為^ニ持^ニル

(丁間文書)

葛まんちう

くす^ニ老^ニ合^ニ 砂糖^ニ老^ニ合^ニ

水^ニ武^ニ合^ニ五^ニ勺^ニ

そはまんちう

そば 山いも

コウレン松葉

麦粉百め 砂百め

キウヒ

粉^ニ老^ニ升^ニ 砂^ニ四^ニ百^ニ目^ニ

飴

四月廿二日 快晴

南方読録写本はしめる

四月廿三日 曇

間歩改有之、栃畑谷へ出役

四月廿四日 快晴

永久山付新兵衛跡役之義^ニ付田邊様へ出ル

極楽寺法会中大衆方出鉢御齋出ス、布施

老^ニ勿^ニ、和尚方十五人へ四分ツ、小僧方八人三分ツ、

四月廿五日 快晴

幸太郎上下調来ル、永久山付一件^ニ付夜大住様へ出ル

四月廿六日 曇

大住様へ内幟^并肴代^ニ式^ニ勿^ニ・樽悦^ニひ^ニ為^ニ持^ニル、上宗一件

にて夕方鹿野様^ニ方^ニ書状到来即刻罷出ル

四月廿七日 曇、辰刻^ニ方^ニ雨

当家先亡年回^并上野氏父上十三回吊之ため

^并長安寺無代当屋敷空古墓菩提のため^ニ

龍昌寺方丈・榮泉寺方丈・長安寺和尚・龍昌寺伴僧

二人・榮泉寺伴僧二人招待、施餓鬼^并十大願

法花一卷レウコンシ等勤行、相伴上野・山崎

両兄君上宗君也、愛染尊開眼榮泉方丈

早朝方御上り四ツ時頃迄ニ相済

申刻方大住様初幟祝ニ被招行

四月廿八日 快晴、風アリ

幟立ル、弥三郎・鶴次来ル

探幽富士ノ画源兵衛持参交易、周信山水・春水半切

竹洞菊彦ヲイ金*步添都合料*兩位也

竹洞菊彦フク源兵衛ヘ取替金利足ニ呉ル

芝山海雲ノ画帖源兵衛方土産ニ呉ル

四月廿九日 晴、夜雨

昼後龍昌寺ヘ挨拶ニ行、大住ヘ礼、川井・藤井ヘ

上宗君一条ニて出ル

五月朔日 快晴

今日方急稼急吹之積、先日被仰渡ル

夜本城氏ヘ相談向ニて行

五月二日 快晴

本城氏当分兼勤之頼談ニ天野・橋本ヘ行

五月三日 快晴

五月四日 快晴

御代官屋代様大坂^江御場所替ニ付大森町^并

郡中役人御暇乞御目通、熊谷三左衛門方相願候間

銀山町之義も同様相願可申哉之段、宿大吉屋方申越

尚又銀山方方も同様御内意有之候ニ付、今日御湯呑所ヘ

拙罷出口上を以御組頭藤井様ヘ申上ル、御目見日

取之義ハ来ル十四日昼前大森三神主^并役人

同日昼後銀山神主^并役人右之積被仰聞候ニ付

銀山町之義ハ昼前ニ被成下度、無之候^而ハ席順

先規ニ違候様存候段申上候処、先々御支配岩田様

御暇乞之節先例右之通ニ候間、前後振替之義

ハ出来不申段被仰聞候

五月五日 曇天

早朝方御礼ニ出ル、御代官様御目見相済帰宅上組礼

廻り、昼後幟仕廻手伝有之神酒出ス

川本屋宗吉家内死去、昼後悔ニ行

五月六日 雨

昼後西善寺老僧・山崎兄君人来茶話

藤井様方御内談有之趣^而呼ニ参候ニ付出森、上宗一条

御咄也、夜ニ入帰ル

五月七日 快晴

新七方預り之ロセツニふく、今朝宗助相見ヘ両三日之

間借用頼有之ニ付相渡

五月八日 快晴、昼後曇、夜風出ル

於榮泉寺最勝会修行有之御守札昨日持せ置

今朝参詣致ス、御初穂四匁持参、石州公御像先日

慈仙方丈ヘ頼此間出来御越ニ付、右礼として

金百疋今日持参呈上 上宗一条ニ付今朝藤井

迄罷出ル 火当はしめる

五月九日 曇、巳刻方雨

火当イタス、夕方方大住様へ上宗一条にて行

五月十日 曇

右一条にて博多屋へ行并昼後方大住様へ行

五月十一日 曇風

永久山付和田新平跡役書面可差出旨福本様方被仰聞候

拙下森承ル、即日評義

五月十二日 曇、夜半頃方雨

乍恐以書付奉申上候

龜山菊藏

水田亀作

松原嘉作

右ハ柑子谷元泉山永久稼所山付和田新平跡役書面之者共之内へ

御賢慮を以被仰付被下候様仕度奉願上候、以上

午五月

山組頭一同

銀山方

御役所

右書面御懸り田邊様迄差出ス、上野作太郎

五月十三日 大雨

金子両替ニ熊谷へ竹一・佐吉差遣

五月十四日 曇

御代官屋代増之助様御暇乞ニ左之通出ル

今日昼後

年寄・山組頭・肝煎 〈年寄・山組頭〉

同見習

定使兩人

町組頭六人

山付四人

右一同麻上下にて御礼席へ出ル御念入候

御詞被仰聞候

順席左之通

山神神主 春日社神主 大森町医師見達

山町役人

右之通 其跡へ宅野藤間太郎左衛門出ル

大森町役人ハ今日昼前出候由

五月十五日 曇、〈夕方方夜雨〉

朝極楽寺へ参詣、ゑひや家内病氣御鬺之趣承ル

夜月並準提尊修法通夜

五月十六日 曇

秋田屋橋・依橋修復出来見分ニ行、中屋にて茶点有之

夕方上博多屋にて少々内談有之、馳走アル

五月十七日 快晴

準提尊愛染尊修法金光明最勝王經誦御祈

痔羅漢寺大忍阿闍梨招待へ御初穂三匁・仏前回向御布施八分出ス

五月十八日 曇

正専寺若住持花稽古ニ若連中方招待ニ付入来点茶

即刻宿宝珠へ御移り有之

五月十九日 大雨

永久山付新役龜山菊藏へ被仰付候、差添上野氏

夕方上野氏へ招ル

五月廿日 曇折々雨

菊藏へ悦式匂

山田道庵画兎ノ小懸物龍昌寺方丈所持之品、当方所持
大徳寺剛堂和尚并と交易イタス

五月廿一日 雨

五月廿二日 曇雨なし、夜雨

いつもや吹所・小割吹所而床ジミ銅并鉛此内紛失致候所、今般大谷菊次方叶屋吹所へ売ニ参候ニ付取調候所
菊次・格蔵兩人ニテ盗取之由、銀吹方内々申出有之内評イタス

昼後花連中稽古有之宝珠寺へ行帰、長野氏ニテ

茶話、夜山崎へ招ル

五月廿三日 折々雨

終日帳面調

五月廿四日 雨

菊次・格蔵并引合長次郎・彦四郎呼出、菊次・格蔵兩人
他出之趣届出ル、来ル廿八日迄尋方申付引合兩人ハ
慎ミ申付ル

五月廿五日 曇、午時後方快晴

長野君・天野君入来、ヲサク様方留別品々参ル

五月廿六日 快晴

ヲサク様餞別金壹アキウラ方老朱朝ノ内

為持ル、昼後暇乞ニ行泉屋ニテ馳走

五月廿七日 快晴

ヲサク様夕六時頃暇乞ニ入来、離盃酒宴終夜相催

晩天御引取

五月廿八日 快晴

御代官御出立久利村迄年寄之内三人・定使老人・町組頭
式人・山付五人御見送りニ行、暮過帰宅

五月廿九日 曇

真成様入来、乾山茶盃価千疋相渡、茶盃ハ追而便次第御越
之約束也、橋本九州方帰国悦肴式匆・樽為持ル、昼後悦ニ行
五月晦日 曇

郷村御引渡相済候由ニ付、元ノ島田區蔵様・福井様・森澄様
八木様へ恐悦ニ罷出ル

上野藤蔵・高橋富三郎・門脇内蔵次・手嶋房右衛門

小割市之助・松本市之丞

六月朔日 曇

社参廻勤、昼後道具屋源兵衛来ル、竹洞翁紅梅之画と
此方方脇差并フイ金壹朱添料壹両三朱ニ当ル、煎茶
茶台五枚と印籠交易ニ渡ス

六月二日 曇

源兵衛来ル、應挙三幅と此方方明画桃花・大雅堂大立物・常信小横物・忠八
釜・権兵衛水指・枝サンコ珠緒ベ・銀サル緒ベ金貳分添渡料正金八両位ニ当
ル

六月三日 曇風

ゑひや御祈祷ニ采泉寺方丈招待相伴ニ行、御帰り立寄、ウラヘ

ミキ戒御授願フ 大工円平今日方来ル

六月四日 曇、夜雨

六月五日 雨後止

靈松院殿御正当ニ付例年之通、同役中一同龍昌寺へ參詣
馳走有之、夜石溪・桃千來訪、火当

六月六日 快晴

火当

六月七日 曇

大根蒔人足五人、夜藤十志義立会

六月八日 雨 冷ル

藤井若旦那上下方御歸リニ付^{大綱}上ル、此代壺斤

相頼、引当金壺分壺朱為持置

夜ハ音を たのしむ庵の 清水かな

若竹や 伸きつてから 葉の出来る

夕方上野・山崎両兄君入来

六月九日 大雨

熊谷三左衛門銀山師株分家三次郎へ譲渡段

先日以書付願出候ニ付、同役申合之上御湯吞所^{ニ而}

御組頭様へ伺申上候所、御役所ニおゐてハ御差支筋

無之、山組頭^{ニ而}も差支無之候ハ、聞濟遣し可申

様被仰聞候、届書ハ御役所へ差出候振合ニ候哉

御尋有之、岡田保兵衛方甚吉へ渡候節ハ段々差纏

有之、大森町役人御役所へ被召出御尋有之候趣、町役人

方も差支無之間、山組頭^{ニ而}聞濟可申段被仰聞候ニ付

別段書面不差上名前切替申付候、影山米太郎方保兵衛へ

渡候節ハ私役義已前ニ付存不申候趣申歸ル

六月十日 強雨 今晚九ツ時過土用ニ入

上野氏へ仏前參馳走有、極楽寺隱居界与上人此間

極楽寺へ逗留ニ付相見ニ行 昼後台子サラへ

六月十一日 雨

讃州高松家中之人歌道行脚之由ニて来ル、所持之歌に

《万民尊神道》おしなべて 神をそあおく 外国の

道にまよひし 闇やはれけん《出雲宿祢尊孫》

寄道祝 神代より 伝へて今も 敷島の

道のひかりハ たれも仰かむ《同御崎尊美》

同人より連月たんさく金壺朱ニて買得ル

《うち思ふ》うつりゆく はしめもはても しら雪の

あやしきものハ こゝろ也けり 蓮月

六月十日^ニ 曇、夜晴

手嶋房右衛門拝借之義ニ付申出有之、午時齋西善寺様招ク

六月十三日 快晴、巳刻方強雨

弥三郎雇里いも手入、長野氏へ招レ茶話

六月十四日 曇、夕方方折々雨

買請米石代五月分上納竹市出ス

熊谷三左衛門田儀屋三次郎方願出之銀山師譲渡之義

聞濟之積ニ付代人七右衛門呼ニ差遣同役一同立会

神宮寺ニおゐて申渡請書取之

御役所へ届書差出候積相認ル

六月十五日 曇、巳刻雨

新切山敷内此間中^ろ之雨天続^ニて損所段々有之趣、同山

山付咄有^ニ付御木屋へ御見舞^ニ罷出ル、長野氏^ニて

茶話、夜月並通夜修法

六月十六日 快晴

なら漬粕配、老升代七十文ウリ

六月十七日 曇

川井おたに様死去^ニ付屋後^ろ行

六月十八日 快晴

川井氏葬式、夜長野君・玉置君入来

六月十九日 快晴

御代官加藤餘十郎様今日御着陣^ニ付荻原村迄

御出迎、年寄・山組頭一同・見習・定使・町組頭・諸山山付

老人ツ、罷出ル

昨日銀山方御役所^ろ被仰付候御書付之写

年寄

山組頭

同見習

定使

町組頭

諸山山付

右ハ明後廿日朝五ツ時麻上下着用罷出恐悦可申上候、以上

山神神主

医師文英

龍昌寺

極楽寺

本法寺

西善寺

順勝寺

外惣寺院

右ハ廿一日朝五ツ時罷出恐悦可申上候、以上

銀山方

午六月十八日 御役所

右之通御書付被仰付候

六月廿日 曇、午刻^ろ雨 きのえ子

御目見年寄・山組頭一同扇子献上、年寄・山組頭見習

定使・町組頭・山付一同罷出ル

順

一、銀山付御役人中様・御見習衆様、余程間合有之

一、御同心衆様

一、御仲間衆様

一、銀山山町役人

右相済少間合有之

川合一宮社国造へ 御朱印御引渡^ニ付国造

参向有之、御行列等御門内^ニて拝見致

帰宅イタス、跡へ幟上神主・春日神主・大森

町役人・郷宿出候由也

今日甲子^ニ付小田屋^ろ囉候撫牛・大黒天初て祭ル

夜えひす講昆布山橋本へ行

六月廿一日 雨、巳刻方止曇

神棚直シ方圓平今日方来ル、諸帳面写

乍恐以書付御届奉申上候

熊谷三左衛門銀山師名跡之義、今般分家三次郎讓渡度段申出候所、私共方_ニおゐて差支筋無御座候_ニ付承届申候、此段御届申上候、以上

午六月 山組頭肝煎・山組頭一同・見習連印

銀山方

御役所

右之通、昨廿日御届申上候所御聞済_ニ相成申候

六月廿二日 快晴、未刻方雨

南方読録写

六月廿三日 雨

神棚直シ方出来、午時西善寺老僧請待

夕上野兄君入来

六月廿四日 雨、未刻方止、夜雨

六月廿五日 晴雨不定

雲州常楽司村へあこのミヤへ安産祈祷之ため代参、定四郎今朝

出立差向御初穂金百疋、一中庵方此内借受之分候

石州公御像_并南方読録一卷_并寒製粉衣袋・書状

惣四郎_ニ為持、大田小田屋へ届方頼遣ス

六月廿六日 曇

御代官様近日之内御登山被遊候趣御沙汰有之候

_ニ付初_而義故吹方御見分も可有之、銀吹へ申聞候所

一昨日判打いたし候間、鉸り灰吹等急_ニハ無之

段申出候、右之段今朝大住様へ申上ル

当月御切米五十俵銀山囲米_ニ被仰付候段被仰聞候

明日向々へ人足差出受取申候

大森暑見舞今日イタス、柳や_ニて馳走

六月廿七日 快晴

神棚御宮今朝相調ふ、山崎拝借一条_ニ付大住様迄出ル

雲州神門郡常楽司村あこのみやへ代参宗四郎今夜

帰ル、御守・御神符・御鏡餅・御神口・御洗米等数々到来

難有頂戴

一中庵方約束之乾山茶碗到来入手

六月廿八日 雨

六月廿九日 雨、未刻方風雨烈敷

夏越被風雨_ニ付城上社へ参詣難致代参弥三郎

差向ル、家内一同山神社へ参詣

醬油小麦煎_ニ宗四郎・周吉雇

七月朔日 大風雨、巳刻方止曇

近所礼廻り、昼後歩銀勘定立会

七月二日 快晴

囲米買入方之義_ニ付、伺_ニ御三軒へ昼後罷出夜五ツ時帰

七月三日 晴雨不定

七月四日 晴雨不定、午刻方雨少シ冷ル

惣掃除煤払、啓一・鶴次・ふき雇入

七月五日 朝雨後曇

火当イタス

七月六日 曇

古懸注文書并神棚掃除、七夕カサリ等致ス

銀山中山御老母死去、悔ニ行

七月七日 曇

御役所礼出勤断近所礼イタス、中山様葬式ニ行

七月八日 快晴

山屋主人来諸勘定仕立目錄渡、ロセツ二幅対預ケ渡ス

上宗君九州方帰国

七月九日 快晴

御代官様初御登山被遊候ニ付、山組頭一同蔵泉寺

迄御出迎致、新切山へ御着之上、稼人物代五六人召連

引受

可罷出旨御沙汰ニ付山組頭・山付差添式台へ罷出

候処、仕手・柄山負・手子迄へ老人ニ付百文銭貳枚ツ、御神酒

料被仰付候、夫方市之助吹所へ御見分、山神社御参詣

新横相・龍源寺山・永久ニ而御弁当被遊候、拙永久

迄付廻り致候、新切山同様外山ニ而も御神酒料

一同へ被下置候、大国通りにて御帰陣被遊候

七月十日 晴折々曇

御代官様御機嫌伺橋本出森、四ヶ山山付老人ツ、

諸注文通ヒ調、多用

七月十一日 曇折々小雨

諸用繁シ

七月十二日 曇屋後方快晴

多用

七月十三日 曇風、夜半頃方雨

多用諸受引、晩頃仕舞少々休足

七月十四日 雨後止、夜雨風アリ

昼後墓参

七月十五日 朝風雨

当日礼寺参朝五ツ時方出ル、夜月並通夜

七月十六日 快晴 月蝕五分 〈五ツ時四分かけはしめ晴天にてよく拝ム〉

昼後本城氏墓参

七月十七日 快晴

七月十八日 快晴

大もりへ盆礼、泉屋・栄泉寺にて茶菓子等出ル

嶋田氏へ悔老奴持参 盆礼老奴

同日夕方上野氏へ招ル

七月十九日 快晴、暑ツよし

石州公御像讃高林庵へ頼度、幸大森社中橋本氏

京地逗留ニ付、泉屋方彼方へ頼遣貫度御像老奴

御笏銘写等金貳百足讃之謝儀・表莊料引当として

相添泉屋迄頼遣シ置

屋家内中出店へ招ル

山組頭老人・諸山山付老人ツ、・銀吹老人銀山方御呼出御書付

昨日到来橋本氏出森有之候所、灰吹銀去巳年とハ只今

之御見競三貫目程出劣ニ候間、稼人とも出情致候様灰吹

銀百目ニ付五十目ツ、御手当被仰付候間、嚴敷出情可致

稼人共へ可申渡段被仰渡候

明後廿一日御代官様大久保山へ御見分御登山被為遊
候趣御沙汰有之候

今昼後九ツ時過背戸こが納屋倒れる

長野様木屋頭被蒙仰之悦、式匆

七月廿日 快晴、午刻後夕立度々有

納屋片付、弥三郎・鶴次・梅二郎雇、多作・房蔵手伝

昨夜多ひす講備前屋当番初穂貳百七十文預ル

七月廿一日 曇

一昨日損所見舞受シ先々へ挨拶廻ル

夕方長野氏へ招ル

七月廿二日 快晴

七月廿三日 曇巳刻方雨

夜地藏会川北主人来訪

七月廿四日 雨、二百十日

七月廿五日 曇

可部福王寺へ書状、御初穂金五十疋ツ、二包清市子広島使ニ頼ム

七月廿六日 快晴、夜雨

三河屋新七来、土佐家画関羽渡蘇州画清正と交易

七月廿七日 雨

万田地蔵尊開眼并安産御祈祷御守等栄泉寺方

来ル

七月廿八日 曇

七月廿九日 雨

不昧君御筆と交易物、此方方竹洞菊札六匁添渡

八月朔日 雨後晴

御役所御礼ニ出ル

八月二日 曇夕方雨

御代官様海岸御見分御発駕御通行被遊候

新切山へ出ル

八月三日 曇、暑さつよし

八月四日 快晴、暑

昼後長野君・中場君御入来茶話

八月五日 快晴、暑

菜畑仕事人足雇

遠州棚老組、右ハ川北氏金交易之下物ニ受取

八月六日 快晴、暑

天河内増田氏滞留

八月七日 快晴、暑

夕方大住氏迄行

八月八日 快晴

昼後本城へ見舞

八月九日 曇、午刻方雨

夕方同断

八月十日 曇、今日方夏洗はしめる

生花稽古見ニ昼後極楽寺へ行

八月十一日 快晴

大住様・福本様・銅山御見分ニ御越被成候、見送り

坂麓迄行、三宅竹一郎事丈一郎と改名

致、夕方酒飯輕ク出ス

八月十二日 快晴

夜十二日講勤ル、西善寺若住持招待

八月十三日 快晴、未刻夕立後曇

夏洗、今日迄三済、夕方上野父子君・山崎兄君

上宗公入来雑話、夕飯出ス

八月十四日 快晴、朝曇

桜間歩^并丹兵衛・友市荷弘立会、大田屋上ケ法事〈菓式匆・とうは・ふせ〉
サル人の歌に あら磯の 岩にくたけて ちる月を

円になして かへす波哉

八月十五日 雨

月並作法通夜

■^名月や 常より低う みゆる山

去ながら 寝るのをしき 雨の月

あら雨の 晴行空や 月のすむ

八月十六日 雨後止

昼後大住へ御留主見舞ニ行

八月十七日 晴、ヒガン中日

朝西善寺老僧招待、後多作へ招ル

昼後山屋来、空谷津師立物と此方茶杓

^并上酒式升添交易料壹分位

八月十八日 曇、夕六ツ時方雨

調心舎作茶杓松月庵君へ恵ム

八月十九日 雨

大森柳や今夕方明日へ三十三回法事、重・寺参・葛老・上酒老

八月廿日 曇後晴

柳屋法事朝方行、夫方泉屋へ寄茶話、五十年前

当所宝珠寺ニ住職有之候、慈海法印と申八十三才

之老僧ニ相見、清水寺大破等之咄相談イタス、老僧

当時豫州浮穴郡小村衛門三郎札始之所と申ニ隠

居被成候由

八月廿一日 曇

用談ニ付上野氏へ昼前方行、昼後長野氏へ少々用

談^{ニ而}行茶話、夕方方天野氏へ招ル、深更迄咄

八月廿二日 雨雷後止、午刻方雨

八月廿三日 快晴

米売当番出勤、夕方文平糺合

御書付写

公方様薨御ニ付、今日方普請鳴物停止ニ候

右之通被仰出候

右之趣谷々^江不洩様早々可触知候、此書付追^而可返

上もの也

銀山方

午八月廿三日 御役所

銀山町

年寄

定使

右即刻銀山中へ相触ル

御停止ニ付町内今日方役人兩人ツ、見廻

致候、織機^{井都}而仕業等音高義一切相慎

候様申触ル、尤吹所之義ハ不及沙汰

八月廿四日 曇、夜半過より雨

万体地藏尊流水灌頂ニ仁万浦へ代人遣ス

夕方川北主人来訪^井柳屋娘達入来逗留

夜五ツ時方おつや積気発、七ツ時過迄詰ル

八月廿五日 雨

山崎へ折々見舞

八月廿六日 曇 〈市之丞病氣御沙汰ハ一昨廿四日夕也、龜作廿五日出立〉

五ヶ所銅山先日大住様御出役之節御供致候

松本市之丞彼方ニて病氣之趣ニ付介抱人

差向候様御用状到来之由被仰渡、則龜作

差向ル、御仲間長谷重太郎様事同方ニて病

死被帰候

当月差入頃方之評ニ東之方へ当り明前七ツ頃

ほうきほし出ル、夕六ツ時頃方戌亥之方へも出ル

尾ヲ引事凡八間位之よし、いまた見す

八月廿七日 折々雨

夕方上野氏御非時相伴ニ行、夜町内見廻り当番

八月廿八日 雨後晴

昼後墓参

八月廿九日 曇後晴

町内見廻り

八月晦日 快晴

養育夫食米渡方立会、博多屋ニて馳走

御触書写

此節江戸・大坂・九州辺^ニ而一種之寄病流行、其初メ

霍乱之如ク吐瀉甚敷、暫時ニ肉脱死相を顕シ、甚敷ハ

即日又ハ二三日之内ニ死ス、至^ニ而劇症^ニ而死するもの夥敷

漢名痧病といふよし

右病を防ク方

一、白湯^{さゆ}一はいに上酢・白さとう^{ヒトサシ}一ヒツ、入、毎朝吞へし

又方

一、毎日杜松子を焦らし嗅てよし

右同断治方

一、右病之催し見へたらハ惣身^江胡麻の油を塗

密室ニ入て十分ニ汗を取へし、十三四ハ助るもの也

右ハ江戸菊家杉田成卿の説の由申来ル、試へし

右同断治方

唐

一、霍香 壹匁 一、唐木香 壹匁 一、丁子 五分

一、麦牙 貳匁

右四味水三合五勺入、三合ニせんし、上老人ニ付耄合ツ、

分け吞へし

市中

右ハ上方医家教之由^ニ而挙て服用致よし

申来ル、是又試ムへし

呪

地上ニ南天の葉を敷、其上へ糖を敷、其中へ線香を立焚キ、其烟りを嗅へし

但（南天之葉一枝ニ七葉有之、若七葉付たる枝無之、八七葉取候て可用事）

右之趣支配所江早々為知道候様可取計事

午八月

九月朔日 晴、昼後曇

社参、昼後大住様・福本様銅山方御歸

被成候ニ付、坂根迄御迎ニ出ル、松本市之承義

銅山ニ而病氣ニ付残候由

九月二日 快晴

大住様へ樽代三匁・福本様へ式匁持参悦ニ罷出ル

間歩請付添ニ出ル

九月三日 快晴風あり、夕方より雨

泉屋主人湯治見舞、ようかん式本上宗君便リニ送ル

九月四日 曇折々雨

無間一統惡病流行山内疫痢少々流行ニ付

一昨夜より今宮様祈禱之義神主中へ談致

来ル六日迄修行之積御停止中ニ付御神幸

ハ無之、尤身成金期月祭并常例山祈

禱之引続也、子供連社参

小松地村毛見、多作・宗四郎差遣ス

取米拾耆俵

六俵

内式斗引 近平

内式斗引 折平

残拾■俵半

残五俵半

九月五日 雨

銀山方方御呼出ニ付罷出候所、今日判打迄ニ出来灰吹漸拾四貫五百目有之、春高通ニハ過半不足ニ候間、山組頭

并諸山山付方ニて仕手切地取調進方之手段可申立

旨被仰聞候、即刻諸山山付集ム

九月六日 快晴

昼後山屋来ル、夕方歸ル、夕方方夜五ツ時迄

諸山稼人呼出存寄取調

九月七日 快晴

道具屋源兵衛来、入質物来ル、十五日迄断

山屋来呂紀花鳥耆幅預ケ渡、昼後

長野氏へ招レ茶話、上垣汲月子同方ニ逗留

九月八日 快晴

夕方新切山御役所へ出ル、仕手切地取調之趣申上ル

九月九日 快晴

御停止ニ付礼なし、昼後西善寺へ行

九月十日 曇、申刻方雨

九月十一日 曇

下組見廻り

九月十二日 曇、申刻方雨

昼後上野氏へ囲米代勘定ニ行、夕西善寺

老僧非時勤、夜上野兄上入来

九月十三日 曇

圓米売渡当番終日出勤、夕方炉開

九月十四日 曇後快晴

下組見廻り

御停止中見廻り之義昨夜迄昼夜

見廻り之所日数も相立、殊ニ山方吹方多用

米売立等^{ニ而}人少ニ付、今日方昼計

兩人ツ、上組下組とも廻り候積

今夕方明日へ榮泉寺^ニおゐて最勝会

修行有之ニ付御札^并初尾沓朱為持

九月十五日 快晴

早朝方榮泉寺参詣、帰り懸泉屋^ニて茶

話昼食等出ル、夜月並修法通夜

九月十六日 快晴、夜半過方雨

市原内室死去、葬式^ニ立、夜酒代注文認ル

御書付写

今般普請義不苦旨被仰出候

右之趣相心得、谷々不洩様可相触もの也

銀山方

午九月十六日 御役所

年寄

定使

九月十七日 快晴

羅漢寺大忍様請待、準提尊法修行^并

最勝王經誦頼ム、愛染尊拜式授ル

御初穂金百疋借用方^ニて済、当日更紗三枚

外授法謝札札式勿出ス

城上社 御神詣之義^ニ付、社中橋本氏当閏月上京

被致候所 勅許^ニ相成候趣、明十八日帰着之由神主中

^并熊谷三左衛門殿方通達有之^ニ付、左之通申触ル

九月十八日 快晴

城上社

御神詣之義^ニ付社中橋本氏上京有之候処、今日

帰着^并之候由為知有之候、左様御承知可被成候、以上

九月十八日 年寄

上下

〈定使・町組頭〉中

祭前取引御停止中^ニ付思ひく通ひ先注文等

相渡内々取引致ス、取立人丈一郎

九月十九日 快晴

城上社御祭礼御停止^ニ付延引、昼後上野氏

一行夕方帰ル

九月廿日 快晴

大森へ行観世音寺へ参詣、昼後松月庵君

汲月君・石溪君入来茶点、夜半過開

九月廿一日 暁大雨後晴風アリ、酉刻方雨

朝上博多屋へ入浴^ニ行、川北氏会席、左之通

九月廿一日口切夕去会 主 川北弥右衛門

客 天野因幡守 長野又一郎 藤井幾太郎
上垣謙二 高橋富三郎

待合 小風炉 硯 手あふり

*

熨斗 高井田 掛物 慈雲比丘 釜 名越弥五郎作

自在鉤釜 炭斗 銅虫鉢 三ツ羽 鶴 香合〈乾山・四方〉

方六 備前 水次 南ハン 蓋置 青竹

懷石

飯 汁〈大根・のり〉 皿〈さし・くしらのし・きくらげ〉

椀〈きんこ・松たけ・しんきく〉 中酒

二段

重〈鯛一夜漬・香茸青あへ〉 燗酒 吸物〈さ、い・こしゅう〉

取肴〈焼小鳥・連こん・くつしいも〉

湯盆〈湯桶・香せん・爪つけ〉 菓子 ちとせ

中立

花 龍旦 笏〈尺八利齋作〉 短冊掛〈近衛龍山公筆*かねの和歌〉

水指 真手桶 茶入織部瀬戸 茶碗半使 茶杓〈上田松濤君作〉

コホシ曲モノ 蓋置青竹引切

惣菓子 薄茶

右会后清談長話酒飯等出夜半過開キ

九月廿二日 快晴

昼後天野へ招ル、長野君・汲月君同道

山神社祭礼御神幸之義御停止中ニ付

延引之積神主衆中申出有之ニ付

山町役人へ廻建相廻し候

九月廿三日 曇

川井様御立寄茶点

新切山ニおゐて貫高調

一、灰吹銀三拾貫三百目

内三百目 壺分通山入目

外壺貫八百目 位足用心銀

〆三十式貫百目

内拾六貫百四十六匁五分へ九月十八日判迄出来有之分

残拾五貫九百五十三匁五分此先出来可致分

九月廿四日 雨、已刻方止

戸藏村毛見、多作召連行

拾五俵壺斗 猶八 六俵壺斗五升 安平

御書付写

銀山町

年寄・山組頭肝煎

年寄・山組頭

同見習

定使

町組頭

山付

同見習

無名異弘人

右者被 仰渡儀有之間、来ル廿七日朝五ツ時
麻上下着用一役一人ツ、罷出可相届候、其節
此書付可相返者也

銀山方

午九月廿四日 御役所 右町役人

備中普賢院方献札并書状到来

翌廿六日御役所湯吞所迄為持出ス

九月廿五日 快晴

昼後柳屋来ル、夜上野氏へ行帰宅

愛染尊拝式勤ル

九月廿六日 曇後快晴

竹田画讃大幅交易、此方方宗旦画二賢一聖

雲鵬山水・星巖絹地山水・*龍和尚半切

合料式両式分位ニ当ル

九月廿七日 快晴

去ル廿四日御差紙被仰付候ニ付上野藤蔵・年寄山組頭

惣代高橋猶之丞・同見習上野作太郎・定使惣代上野清十

・町組頭惣代樋高峰松・山付惣代光田丹兵衛・見習布川国次郎

無名異弘人吉田健助、右罷出ル

申渡

以来

年寄・山組頭肝煎

右年始其外礼席之儀、三之間^式■^式疊目^江罷出候様可相心得候

午九月

同断

年寄

山組頭

同見習

右年始其外礼席之儀以来三之間三疊目^江罷出候様可相心得候

午九月

申渡

定使

町組頭

諸山山付

無名異弘人

右御文言同様、三之間四疊目へ被仰付候

午九月

九月廿八日 快晴

山神宮祭礼御停止ニ付延引、昼後社参

致ス

九月廿九日 快晴

銅直増御請印形ニ御役所へ罷出ル

差上申御請書之事

当銀山銀絞銅之義、去巳年迄銅百斤ニ付代銀百

六十九匁八分^ニ而御買上相成候所、当午^方来未迄
式ヶ年之間右代銀之外五匁五分御直増被^仰付
合銀百七拾五匁三分^ニ御買上相成候間、稼方出情
いたし出方相増候様可致旨被^仰渡承知奉
畏候、依之御請印形差上申所如件

安政五年九月廿七日

銀山方

山組頭見習

御役所

山組頭

連印

同肝煎

今日歸り懸泉屋^ニ而香川景樹先生短冊竹間霰
之歌貰ふ、宗助方^ニ而歌大たんさく貰ふ

九月晦日 快晴

朝看経後如意宝珠法修

大吉屋藤十郎殿去ル廿七日死去、今七ツ時葬式

ニ行菓子老箱・とうは贈ル

十月朔日 快晴

昼後当日礼歩行

十月二日 曇、初時雨

於神宮寺銀山大盛のため花水供修行有之

法主福王寺大智比丘様今日御上り被成今夕

方初ル、昼頃方相詰ル、御土産^ニ全唐紙御筆

頂ク、恵比屋後口岩崖へ地藏尊安置開眼師

極楽寺方丈

新酒元取

十月三日 快晴

米売立当番出勤、神宮寺之方御祈祷中^ニ而
差支^ニ付米蔵^ニ而売渡、夜神宮寺参詣

十月四日 快晴

朝神宮寺へ参詣、例年報恩講当年ハ

御停止中^ニ付法談等遠慮いたし午時勤^ニ

致シ御勤後法話布施式百文・伴僧八十文

十月五日 快晴

福王寺様御祈祷昨朝迄^ニ而詰願^ニ相成

今四ツ時当方迄御歸り被成御茶^并もち

御齋出ス、書画掛物御覧^ニ入ル、夫方博多屋へ

御越、未刻過大森へ御歸り

永久八番上り定吉・勘藏稼所、新横相

文太郎・高藏切地五番^ニ抜合候由、新横相方

御沙汰有之候趣、高橋方達し有之、永久方御書付

到来^ニ付未刻拙罷越右論所之義被仰聞承歸

直様寄会外山付松本豊太郎・長谷廣三郎兩人

見分^ニ差遣候積決評

酒造御祈祷例年之通、社中橋本氏へ頼ム、御

初穂金百疋外大錢壹枚参詣之節持参

夕方参詣之積案内有之候所、右山方一件^ニ付

参詣断ル、送り膳有之

十月六日 朝時雨後快晴

上野兄君入来、永久新横相一件^ニ付新横相

敷内外山付廣三郎見分ニ差遣、昼後寄会
新横相へ行形申上ニ行

十月七日 快晴

両山一件寄会

十月八日 快晴

両山一条ニ義此度之義ハ御宝山之事ニ候

双方

得ハ境目山組頭ニ而相定候も如何敷候間、何分

両山御評義之上御差図被下候へハ山組頭方ニて

外山付差向境立候様取計可申、右是迄之仕来ニ付

既ニ山法かと存候趣両山へ申上候得共、兎も角も

山組頭ニ而取計候へと被仰候ニ付無余義御組頭

様へ右之段御伺申上ニ罷出候所、中西松三郎様

・川井為三郎様御兩人へ取計方被仰付候由ニて

即刻御両所御登山上野へ御上り被成同役一同相

揃申候、永久敷内見分可差遣被仰候ニ付、上野

清十郎・長谷廣三郎兩人差向夜四ツ時過歸

十月九日 快晴

右御両所今朝方龍源寺山へ御登山ニ付同役一同相詰、昨夜

見分之次第申上ル、尚又山組頭内存之義申上ル

十月十日 快晴、夕方大風雷雨鳴

右両山一条御両所御登山之上被仰聞候ハ両山

御懸り中へ御談事被成候所、新横相切地行形

凡五寸勾倍を以永久地地も一尺之龍図を以

双方東へ下り候積決候由被仰渡、其段両山

へ山組頭方申上御承知之旨被仰聞候

昼後福王寺様相見ニ河嶋様迄下る

大雅堂書画数々御見せ被成候、竹茶入

伊豫国杞南亭細工律師様方頂ク

夜寄会両山切地立見分ニ松本豊太郎・布川国次郎

兩人へ申付ル

新横相三番鉦御直繩切出鉦西へ壹番勘弁

切地当山付へ被仰付ル、差添高橋猶之丞

十月十一日 あられ又雨

大谷菊次出奔届是迄之通差出候所、親類組合

と町組頭連印ニ而届差出可申段被仰渡、夫ニ而者

仕来ニ違候ニ付一同集会申合

十月十二日 曇

右届書振合之義書面を以橋本忠三郎・上野作太郎

兩人御役所へ罷出候所、是迄ハ右致来候共此度ハ

御勘定所御届ニ相成候書面ニ付連印可致旨

被仰聞、尚又先年極楽寺界与和尚出奔

届之節町組頭連印之振合も有之候趣

被仰渡候ニ付、無抛連印ニ而差上ル、尤町組頭

計ニ候

(四行枠線で囲まれている)

千種有功卿御作御歌入短刀宗助方見セル

交易品白鞘短刀価拾匁位メナウ根付

価十五匁位、金式朱と式匁相添交易、凡

料式分式朱位ニも相当ル

十月十三日 快晴

帳面表紙拵ル、御齋西善寺老僧招ク

十月十四日 快晴

朝寄会、昼後買請米村願ニ行、森澄様へハ川北氏へ頼
沢井様へハ直ニ出ル、御留主ニ付庄蔵様へ頼置、両家とも
百疋ツ、持参、川北ニ而薄茶十六匁借受歸ル、大住様ニて
馳走被下ル

御書付写

鳴物之義ハ所作ニ仕候もの共計来ル廿八日方可相免候

午九月

右之通御書付出候間得其意谷々不洩様早々
可相触候、此書付追而可返上者也

銀山方

午九月十四日 御役所

年寄

定使

(丁間文書)

五ヶ山仕手

百十四人

山附 十六人

ベ百廿九人

三十

十月十五日 快晴

先達而山屋へ借シ置候呂紀老幅今日返ル
月並修法通夜

十月十六日 快晴、夜五ツ時方しくれ

買請米願書認午睡、昼後川北主人来

十月十七日 快晴

十月十八日 快晴、午刻方小雨

石溪子入来、アラレ炉釜用立

夜ニ入おうら腹痛少々有之加藤氏呼、夜半

頃出産、加藤・市原相詰ラル

十月十九日 曇

加藤・市原逗留

十月廿日 時雨

加藤氏早朝引取

小児初名御鬪天野へ頼遣、源女と定ル

天野へ大錢二枚御礼として御初穂二匁、栄泉寺へ為持ル

十月廿一日 時雨

悦ひ人多用、川井君入来、三木山一条談

十月廿二日 晴陰不定、天社日

新酒配、宗四郎へ祝儀百文

十月廿三日 曇、夜雨大風

十月廿四日 雨あられ大風、夜雨

七夜目内祝ひ致ス、夜上野兄公入来

十月廿五日 雪、夜雨

十月廿六日 晴陰定す

礼廻り致ス、桶屋二人来ル

十月廿七日 曇

十月廿八日 快晴

佐利鋼太郎子外兩人来訪茶話、昼飯等
出ス、律師様方書状持参

桶屋今日切、戸樋直シ宗四郎・弥三郎・作平来ル

十月廿九日 雨雪

十一月朔日 雪折々 朝西善寺老僧呼

備後小泉村鉛沢吉吹所_{ニ而}絞有之御出役

川井様御昼飯当方_{ニて}出ス、絞夜_{ニ入}済、終日詰ル

十一月二日 雨

十一月三日 曇

銅清絞御試ミ市之助吹所_{ニて}有之

十一月四日 晴

灰吹出来方調集会

十一月五日 快晴

灰吹一条_并小泉鉛御買入福岡平蔵出立

右代金御添触受取_ニ出役

鹿野様御登山灰吹御調上野氏_{ニて}夜_{ニ入}

御引取 今昼後折平来ル

十一月六日 雨

銅清絞り林吹所_{ニて}有之積世話方見分引受
橋本と拙兩人_ニ極り、今日_方床築立等見分
致ス

石州公御像讀大徳寺大綱和尚へ橋本伊与守殿

上京_ニ付相頼ミ出来ス、表莊ハ大森善蔵へ

泉屋_方詔廿_方_{ニて}都合金三分余_{ニて}

出来ス、今日泉屋_方為持ラル、

十一月七日 晴

清絞り前拵見分、終日詰ル

御直段銀百拾_方七_方り

十一月八日 曇

右同断

新酒直段昨七日_方定ル

脚なへり_方弁式百四十文

並酒_方弁式百文

十一月九日 快晴

右同断

先日えひす講出產_ニ付延引、今日家内中祝ふ

_并新酒祝も右同断_ニ付今日宗四郎呼

(丁間文書)

(端裏書)

「銀山町 上野

高橋様 砂水太治郎衛門

無事用事」

口上

以手紙申上候、久々御物遠
罷過候得共、其御地御家内

皆々様緩々御堅勝之由

大悦ニ奉賀候、然者貴家様

方々被参母当年五十回忌

御座候間、来ル十一月五日晩方

六日仏事仕候間、乍苦勞

御焼香ニ御入来可被下候

右御案内如此ニ御座候

已上

十月廿二日

覚

一、銅十三丸 樋高峰松分

一、同七丸 小割市之助分

一、同七丸 矢田沢吉分

ベ廿七丸

右ハ銀吹共方是迄差出置候銅今般清絞リ被仰付

書面之通御渡被遊慥奉受取候、以上

午十一月 山組頭惣代

高橋富三郎

同

橋本忠三郎

同肝煎

上野藤藏

銀山方

御役所

右書面銀吹代長次郎ニ為持請取ニ差出ス

十一月十日 曇大風夜雨

清絞リ見分早朝方吹所へ相詰、夜ニ入歸ル

十一月十一日 雪大風

右同断

十一月十二日 雪

右同断

十一月十三日 曇、夜雨

右同断

龍源寺山へ御神酒式斗銀山方被下当方へ

御注文御書付被仰付、早速御木屋へ為持出ス

十一月十四日 曇

清絞リ鉛今日市之助吹所ニ而灰吹致、早朝方

相詰夜ニ入歸ル、川井様御立会始終御見分

昨日御神酒等注文被仰付候ニ付御組頭御三軒へ

上酒式升ツ、御礼ニ為持、源太郎差出ス

酒船男柱今日仕替ル、ケヤ木古木徳善寺

ニて所望、上酒老升遣ス

十一月十五日 晴

小泉鉛買入并内密之義ニ付御役所へ出ル、歸り吹所へ

詰ル、暮合帰宅

夜行水等致シ月並修法勤通夜

十一月十六日 晴

早朝方吹所へ詰ル

十一月十七日 晴、夕方風出ル、夜雨

叶屋吹所へ詰ル、灰吹寄^并*流し見分

十一月十八日 雨、冬至

吹所詰ル、夜^ニ入歸ル、夫^方出店へ招ル

冬至規式例之通、家内一同^并蔵ノ者豆麩アフリ

十一月十九日

清絞リ

十一月廿日 曇

えひす講当番勤ル

十一月廿一日 曇

清絞リ休日

夕方大住様へ行、御条外御馳走、夜半過歸

十一月廿二日

清絞リ今日限り^ニて御見合之積被仰聞

十一月廿三日

吹所片付

十一月廿四日 寒風

十一月廿五日

野沢様へ餞別老朱、中山様へ式勿

十一月廿六日

十一月廿七日 雨後止

十一月廿八日 曇

十一月廿九日 雪

十一月晦日 雪

十二月朔日 曇、夜雪

雲州あこの宮^江御礼代参宗四郎差向ル、御初尾

金百疋

十二月二日 曇

巻紙拵ル、暮^タ六ツ時地震三度、夜五ツ半時

大地震両度有之、家内中酒蔵迄除せ置

火の元用心之用意、諸帳面証文類・有金

等夫々用意致、家内中不寝致居、夜

の内少々之地震度々アル

十二月三日 雪、今曉寒入

米受取当番立会

夜度々地震アル

十二月四日 雪

十二月五日 雪

十二月六日 晴

買受米送り来、多用

十二月七日 晴

十二月八日 快晴

おけん祝ひ客来致ス、客廿人

十二月九日 快晴

上野・山崎両兄君昼飯^ニ招ク

十二月十日 快晴

清絞諸勘定帳御役所へ差出ス、歸り懸春樹屋^ニて
すゞ六角爛ひん金式朱^ニて求、榮泉寺方丈御不快

ニ付、菓子壺箱御見舞ニ持参致ス、泉屋ニて点茶
夕飯等馳走アル

十二月十一日 快晴

山屋来ル、蘇明遠画墨梅・等顔ノ芦雁式幅相渡、交易

品探幽秋草并家厚公御画・有功卿讀横物受取、料

探幽式両三分位、画讀横物式分位ニ当ル

十二月十二日 快晴、夜時々雨

清絞リ払方致ス

十二月十三日 快晴

在方懸寄せ并古懸注文認ル

十二月十四日 ミそれ

山神社御祈祷参詣

十二月十五日

月並通夜修法

十二月十六日 曇、寒風

米土蔵当番、早朝方手嶋と出勤、米積替等

イタシ午時過帰宅、風邪之気味ニ而申刻方平臥

頭痛発ス

十二月十七日

帳合致ス

十二月十八日

古懸注文認ル

十二月十九日

大頭痛発ツ、市原呼吸玉懸貰ふ、服薬始ル

十二月廿日

同断、熱発甚し

十二月廿一日

同断

十二月廿二日

同断、加藤氏呼

十二月廿三日

同断

十二月廿四日

同断

十二月廿五日

同断

十二月廿六日

同断、加

十二月廿七日

同断、加藤氏逗留

十二月廿八日 今日御歳暮御礼同役出ル、定例御手当被仰付、猶又

同断、祖式布野氏招請

上野藤蔵・橋本忠三郎・高橋
富三郎義急吹中別而骨折候ニ付、
別段御手当百疋ツ、被仰付ル

十二月廿九日

同断、布野氏逗留

十二月晦日

同断、布野氏被帰ル、諸注文認方并諸受引

之義山崎兄君・作太郎・弥太郎先日方今日も
手伝相頼安心
病中といへとも家内一同相揃ひ春を待

(数行分空白)

安政六年己未新春

正月元日

年徳寅卯間万よし

家内一同相揃目出度越年致ス、病氣同様、朝漸
座敷神拝丈致ス、寝間にて御雑煮・屠蘇祝ふ
夕方布野氏入来

正月二日

病氣重し、布野氏逗留、今夜敷地天満宮へ代参備後〈次平出立〉

正月三日

同断、布野氏被帰ル

正月四日

右同断、布野氏呼ニ遣入来

正月五日

右同断

正月六日

右同断

正月七日

右同断

正月八日

右同断

正月九日

右同断

正月十日

右同断

正月十一日

右同断

正月十二日

右同断

正月十三日

右同断

正月十四日

右同断

正月十五日

右同断

正月十六日

右同断

正月十六日

右同断、黒松上垣謙二様招待調薬

正月十七日

右同断、病氣少々快、食氣出来大悦致ス

正月十八日

右同断、上垣氏へ馳走、菓子茶相伴天野君立前、上野兄君

正月十九日

右同断、上垣氏帰ラル

正月廿日

右同断、布野氏入来、大安寺へ盗賊這入候_而留主居

之衣類盗取候由、兼帶極楽寺方

届書出ル、奥書下モ当役三人

肝煎連印

正月廿一日

右同断

正月廿二日

右同断

正月廿三日

右同断

正月廿四日

右同断

正月廿五日

右同断

下河原薬師堂へ盗人這入候由、大安寺兼帶極楽寺方

届書出候_ニ付奥書肝煎_并当役三人連印

正月廿六日

病氣右同断、下河原政之進義西田村_{ニ而}大國村林兵衛

怪敷見受候由_{ニ而}荷物相改候所薬師堂尼僧所持之

品々有之候趣_ニ付蔵泉寺へ連歸り訴出候所、当人

_并親類・組合・町役人御呼出之上 御直御吟味被

為遊、政之進義格別之御慈悲を以手鎖町預

_ニ被仰付候

正月廿七日

病氣少々快、食事追々相進_ニ快方

正月廿八日

同断

正月廿九日

同断

正月晦日

同断

二月朔日

同断、追々快方、鎮守_稲荷社鳥井再建

二月二日 晴

同断

二月三日 朝雨後晴

同断

社造営

今日鎮守稻荷社遷宮_并初午神事相勤

天野・橋本招請、遷宮御初穂大錢三枚ツ、

初午御初尾百廿文ツ、布野氏子息入来

二月四日 曇

病氣快よし

二月五日 曇

同断、藤井様・長野様御見舞有之点茶立
出し御咄アル

二月六日 晴

夕方布野氏入来、夜^ニ入上野へ被参ル

正月七日 晴

快方 病中の吟

鶯の 音にさそはれて 床はなれ

しつの石屋上巻一冊天野老人持参借用

薪を割 音も余寒の 在所哉

二月八日 曇、寒し

布野氏上野へ帰懸立寄有之酒飯出ス

朝風ニ 吹るゝ梅や 咲満る

二月九日 快晴

戸蔵村持分山林毛上見積として弥太郎

・多作・房兵衛差向ル

御勘弁味増搦イタス

敷地天満宮^江願ほどき代参近平今日出立致サス

二月十日 晴

朝々腹痛にて難儀、夕方布野氏入来、夜上野へ
被参ル

(付紙)

敷地天満宮へ奉納物三・長キ幟^幟本

・ろうそく五丁・鉦^鉦・御初穂百廿銅

・度参さいせん四十文外家運長久
御初穂百廿銅奉納

二月十一日 朝雨後快晴

腹痛快方、貸方帳上書致ス

大住御内様御入来

胡麻*製ス、黒胡麻三合・餅米三合・玉子^子壺

二月十二日 快晴

少々快方、餅米代金泉屋へ為持

三宗四郎

二月十三日 快晴

気分快方、西善寺老僧屋^斎ニ呼

敷地天満宮^江代参之近平帰ル、御洗米来ル、近平へ

賃錢六百文外四分酒手遣ス

二月十四日 曇

備中普賢院^方山祈祷御守^并拙病氣

見廻として延命尊御守御符到来

二月十五日 快晴

終日平臥

二月十六日 快晴

酒室役納^ニ丈一郎差出ス、布野氏入来逗留

上野作太郎養生不相叶今已刻死去

二月十七日 快晴

上野氏葬式有之候得とも病氣^ニ付不勤

二月十八日 快晴

布野氏帰らるゝ

二月十九日 快晴

気分追々全快、一中庵へ年始状^并

年玉として吟茶半斤小田屋迄差出ス

世を早うして

上野氏桃千子 はたとせあまり七とせといふ

~~春の頃いまだかなやあきて早も~~黄泉の

客となるけるを悼む

紅梅や 咲とちるとに いそかしき

桃千子の野辺送りを宮れけるに

ワレハ心ちあしく茅屋の椽端^ニ■^通 拝
して捻香す

鉦の音も いと霞みて 野辺送り

手向

折て来て 椿もけふの 手むけかな

二月廿日 快晴

上野氏法事、今夕方明日へ幸太郎差遣ス

二月廿一日 快晴、夕前方風、夜雨

去暮諸向帳合イタス、夕方布野氏入来

二月廿二日 朝雨後止

布野氏帰らるゝ

夜半頃坂根御番所納屋焼失いたし候

二月廿三日 快晴

栄泉寺方丈六十一御年賀・御祝餅・御守被下ル

去冬野沢様へ相頼候酒升*クコシや到来

壺升入 〈口広四寸九分 底深二寸七分〉

五合入 〈口三寸九分六リ 深二寸六リ七毛〉

式号五勺入 〈口三寸壺分六リ 深壺寸六分二リ三毛〉

壺合入 〈口式寸壺分 深壺寸四分七リ〉

ベ四ツ

二月廿四日 晴陰不定、風有

高橋氏見舞^ニ見える、酒飯出ス

二月廿五日 晴

栄泉寺方丈御年賀悦として青谷木綿壺反

・中啓扇為持ル、羅漢寺戒伝坊入来、普

賢院方伝言等アル、布野氏入来

二月廿六日 快晴

布野氏帰去

三月廿七日 快晴

山神社去年大祭御神幸可有之所

公儀御穩密中^ニ付延引^ニ相成候^ニ付

来ル三月三日祭礼神幸相勤度段

今日届書差出ス、年寄連印

二月廿八日 快晴

雛カサリイタス、鹿野氏婚礼悦ひ樽^并肴

式匆為持ス

二月廿九日 快晴、夜雨

布野氏夕方入来

三月朔日 雨ミそれ風

布野氏歸去

三月二日 風ミそれ快晴

三月三日 快晴

山神宮祭礼神幸客少々有之

葛舎主人入来、茶入金輪寺土産ニ囉

三月四日 快晴

祭り跡仕舞惣掃除、夕方コシキ祝イタス、病氣

ニ付今日迄延引、宗四郎・折平・作平・弥三郎・鶴次

三月五日 曇風

夜正専寺若住持見舞ニ入来有之、茶式

湖月抄十冊用立

三月六日 風雨後止

石代上納丈一郎差出ス、布野若主人入来、即日

歸去

三月七日 曇風、朝あられふる

春木や啓兵衛来、洞春富士画持参、大雅式幅対

・銅小釜相添交易破断

三月八日 曇、天社日

夜ニ入、山崎氏迄出初イタス

三月九日 快晴

三月十日 晴

下総国の人千ヶ寺参、市原へ立寄菓子

伝授致候由、脇方勧メ有之ニ付左之通伝授ス

キウヒ 寒さらし粉壺升・砂糖四百目

飴三百目 但、粉水ヲ入トキ、スイノウ

ニテコシ、火ニカケ、シハラク

焚詰、モチくイタシ候

節砂ヲ入、又シハラク焚

手ニツカザル時飴ヲ入トキ

ト焚、器へ入ル也

色付ハクチナシ遣

葛マンチウ

上葛壺合・砂壺合・水式合五勺入

右ナベニ入ヨクくねり上ケ、アツキウチ

アンヲ入、水ニヒタス也

そはマンチウ

山芋ヲワサヒヲロシニテスリ、そは粉

ヲコねル、少シユルキ方ヨロシ、アンヲ

ツ、ミコシキニテムス也

シヨヤウマンチウ

山イモヲムシ、皮ヲ去カナトウシニテ

コシヲロシ、上砂見合入コねテアンヲ

ツ、ミ、サイシキ口伝

水センモチ

上葛壺合・砂見合入、水式合入

トキ、スイセンナヘニテニル上シホニ

但此菓子ハ

湯ヲク、ラセ上ケ切アンヲツ、ム

祝義ニハ不用

色付サマく

□ウレン松葉

小麦粉百め・砂百目合セカタクコね延テ切

ナベニ油ヲ引ヤキ、砂マブル也

干飯ノ粉壺升・砂式百五十匁入ヨクく

シホカマ

モミ合セ、カタニ入切ル也

右謝義金式朱遣ス

今晚夜ニ入上野氏迄悔旁行

三月十一日 快晴

菓子製イタス、夜出店迄行

三月十二日 曇風

夜ニ入布野氏入来

三月十三日 曇、夜大風、午刻頃雨

城上明神祭礼御神幸相済、布野氏歸去

三月十四日 晴雨不定、夜雨

大雅堂人物山水半切律師様方御譲り、価正五両

三月十五日 晴

月並準提尊法病中ニ付二座勤ル

三月十六日 快晴

昼後西善老僧・山崎兄上入来、茶酒出ス

三月十七日 曇、夜風雨

夜上野兄上入来

三月十八日 雨風

本城氏年祭有之、幸太郎呼る

作物御運上町組頭へ為持ル

三月十九日 曇後快晴

宗助書画持参

三月廿日 朝雨あられ後晴

昼かめやへ招ル遊参野立箱持行楽ム

三月廿一日 快晴

納屋普請材木出し人足八人雇入

三月廿二日 曇、申刻雨

布野氏舍弟入来、昼後歸去

夕方出店へ招レ茶話酒飯出ル

■暮合方川北主人来訪、四ツ時前雑話

三月廿三日 晴陰不定、風アリ

三月廿四日 晴、風アリ、夜雨

三月廿五日 晴

石楼律師様方大雅先生諧書御譲有之

料金壹両上ル

三月廿六日 曇夜ニ入雨

律師様昼後來杖有之茶菓子等出ス、御自作

書扇面式本頂戴

過日蔦舎方恵ル金林寺茶入梅吉ニ塗せる賃

壹匁八分

三月廿七日 雨後止

明日榮泉方丈請待約束ニ付、観音尊檀飾イタス

三月廿八日 曇

最勝王經真読并準提尊法御祈祷榮泉寺

方丈請待終日御修行有之、相伴上野・山崎両兄

三月廿九日 曇

炉ふさぎ致、夜ニ入上野兄上・天野氏入来茶話

三月晦日 快晴、夜風

如意宝珠法修行

四月朔日 曇風

四月二日 快晴

夕方布野氏入来

四月三日 快晴

布野氏歸去

四月四日 快晴

柳屋方米代受取

四月五日 雨後止

博多屋仏事名代幸太郎遣ス

四月六日 快晴

四月七日 快晴

気分快ク中伝点前致ス、石州公表具代

式貫文泉屋へ持ル

四月八日 快晴

四月九日 曇後雨

四月十日 曇、未刻方雨

納屋普請棟上規式御神酒職人ともへハ

明日出ス、手伝弥三郎・次平・平市・嘉助

・源太郎、出雲屋方人足・小割方人足雇入

宗四郎・弥三郎・鶴次・作平

布野氏入来

四月十一日 雨

布野氏歸去

四月十二日 雨

四月十三日 雨後止

午時西善寺老僧請待

四月十四日 快晴

清水屋勇次郎来ル、古浄味真成形釜

と万代屋釜宗兵衛作并丸釜作不分ヲイ

金*部都合*両*部位ニ当ル

夜宗十郎君大坂方帰来

四月十五日 快晴

宗十郎君土産ヒタ細工菓子器外御守

類数々貰ふ、先年大森住居医師後藤

俊泰老美濃岐阜ニ被居候由、此度

宗十郎君便リニ書状并ヒタ小角盆

とこなへ焼盆キヒシヨ送り呉ル

当時田内領之輔

夜準提法二座修行

四月十六日 快晴

四月十七日 快晴

四月十八日 快晴

今日方火当致ス

御代官様御登山ニ付新切山・龍源寺山へ上野、吹方

山崎、新横相并御機嫌伺高橋、永久へ橋本

拙ハ病中ニ付出勤断ル

四月十九日 雨後止

火当

四月廿日 快晴、夜雨

火当、御仲間衆長屋之納屋出火之由
触来一同出張

朝曇

四月廿一日 快晴

時鳥 おとつるゝかと 待わひて 明やすき夜も 眠りさりけり

四月廿二日 快晴

布野若主人入来、増田氏見舞_ニ入来、両主へ

酒飯出ス

四月廿三日 快晴

四月廿四日 快晴、夜布野氏入来

地藏尊御顔二万休流水灌頂仁万浦へ

多人数差向ル

山陽先生画讃大田圓藏持参、古画布袋

蕪村山水と交易、海屋山水持参、富士形

釜銅金と交易

間歩改有之、病中_ニ付不勤

四月廿五日 曇

四月廿六日 曇

四月廿七日 曇

酒藏ひさし建ル

四月廿八日 曇後雨

四月廿九日 快晴

五月朔日 曇、午刻過_ル雨

五月二日 雨

五月三日 雨

五月四日 雨後快晴

五月五日 快晴

病中_ニ付礼不勤、昼後定例之通幟仕舞

多人数来ル、神酒出ス、夜山崎へ礼_ニ行

五月六日 快晴、夜半過_ル大風

大田えひすや十三郎来、明人仇英二幅対持参

交易竹田大幅価式金半・大雅二幅対価六金

フヒ*部

下河原政之進御呼出入墨叩払入牢被仰付候

五月七日 大風、朝五ツ頃_ル大雨

昨夜上野氏へ節句礼_ニ行

五月八日 快晴

御神酒合酒式斗新横相へ差出候様、銀山方_ニ

被仰下為持出ス、布野若主人入来

五月九日 快晴

五月十日 曇

五月十一日 快晴

おりきたるミへ遣ス、おけん植痘_ニ天河内増田氏へ

遣ス、増田主人送り来ル、逗留

五月十二日 快晴

終日増田主人と雑話、夕方龍昌寺迄下らるゝ

五月十三日 曇、入梅

昼後川北主人来、清水寺一条談話、上野兄君と入来

夜四ツ過歸去

五月十四日 雨

五月十五日 雨

大住様御立寄、おけん種痘美事ニ出揃ヒ

天野氏呼厄神祭頼ム、初穂百六十文

増田氏逗留、夜準提法二座勤ル

五月十六日 雨

五月十七日 雨

清水寺勸化一条、地方両家・銀山方三軒へ

法印^并上博多屋差添内々廻ル

五月十八日 雨

右願書由^緒書地方御役所へ差出ス、差添

布川、おけん種痘順ニ水ウミ持候ニ付

おりきへ種ル^并出店小兒貞市小兒へも同断

五月十九日 雨

川北主人^并清水寺法印・上野兄入来

五月廿日 晴雨定らす

清水寺御宝物御陣羽折・御扇子・御裏書有之候書付

・御紋付御羽織、右品御代官様御拝見被遊度由、泉屋

弥右衛門殿方被申越候

去ル辰巳両年石代金歩御下ケ渡ニ相成候

五月廿一日 晴、夕暮方雨

子供手本認ル、金歩割返取立錢^{ニ而}包物致ス

尚又運上方分直渡ニ相成候ニ付勤向壱分^{ニ而}

札三匁ツ、御組頭御三軒、札式匁ツ、御懸り五人

昼後増田氏入来、即刻被歸

五月廿二日 終日小雨

清水寺御宝物、御代官様御拝見、左之通

東照宮様

御陣羽織

御陣扇

家治公

御紋付御羽織 川崎様方御寄附品

御代官由比長兵衛様御裏書有之候書付

右差出方左之通

箱荷

年寄山組頭

供

先払

下モ 町組頭

下使 松本市之丞

御宝物 法印

供

定使 上野清十郎

御宝物箱ハ山神社供物櫃借用致、御宝物箱へハしめ縄

飾いたし絵苅立役人三人共麻上下草鞋

御役所御開門御広間床へ御宝物差置候^而法印ハ

中ノ間 ニ扣被居候、御代官様始地方元々・公事方

・銀山方御組頭各御清服御拝見相済、地方不殘銀

山方御役所詰不殘御清服^{ニ而}御広間ニて御拝見相

済、御奥へ御持込御拝見相済御下ケ渡ニ相成候所

地方御役所思召を以、御門前々大森市中境迄〈大森目代〉〈并下使〉

先弘被仰付引取申候、山内一同難有奉存候

夕方布野老人入来逗留

おりき種痘美事ニ出揃候ニ付今昼

天野氏請待厄神祭相勤、初尾式百文

五月廿三日 曇、夜風雨

布野氏昼後歸去

五月廿四日 雨

川北主人来、上野・山崎両兄入来、清水寺一条相談

五月廿五日 雨

清水寺漏留見分、山崎・上博多屋出張、火当

増田氏入来、種痘被致

五月廿六日 曇

火当、増田氏歸去、〈大久保山山付・本谷町組頭〉元田徳次退役願書出ス

五月廿七日 快晴

火当、清水寺願書案文書取等泉屋方来ル

夜山崎ニ而役用集会

五月廿八日 快晴

石銀本谷町組頭元田徳次跡役当分上野清十郎へ兼帶

書付差出ス

龍源寺山山付光田千三郎跡役左之通書付出ス

乍恐以書付奉願上候

井上千蔵・山根好助・水田亀作

右ハ龍源寺山山付光田千三郎跡役書面之者共之内へ御賢慮を以

被仰付候様仕度奉願上候、以上

未五月

山組頭一同連印

御代官様明廿九日御上坂ニ為遊候ニ付御暇乞、左之通

橋本忠三郎・上野清十・布川富士・影山鹿太・松本豊太・小割市之助・横田弥太郎
町組頭

清水寺勸化再応願書并存寄書取差出ス、別紙留置

羅漢寺大忍様招待、準提尊法并金光明修行〈年賦百疋外三匁〉

五月廿九日 風雨

御代官様御見送り、上野藤蔵・高橋猶之丞・樋高峰松・松本

市之丞・原田秋三・光田丹兵衛久利村迄

種痘厄神祭天野氏呼御被相頼、昼後座敷掃除

井上仙蔵

右申渡義有之間、明朔日五ツ時山組頭差添可罷出者也

未五月廿九日 御役所

六月朔日 晴陰不定風アリ後快晴

龍源寺山付井上千蔵へ被仰付候差添橋本

夕方増田氏入来、夜上野行へ当日礼旁行

六月二日 晴風アリ

清水寺勸化世話方熊谷三左衛門・田儀屋三次郎

・嘉庭屋嘉惣右衛門・泉屋勘助右四人へ御声懸

被成下度段願上置候ニ付、今昼後法印并町

役人代として布川国次郎四軒へ差出候積談致

四ツ時前方泉屋弥右衛門殿入来、清水寺御見分として

明三日元々様御越之趣御内咄有之候由ニて諸事

相談ニ被参、昼後歸らるゝ、夜上野へ行右一条相談

六月三日 快晴

朝増田氏入来近所子供種痘、昼後上野兄君入来

六月四日 曇

朝山崎氏へ寄会、昼彼方にて馳走、間歩帳

調印同方へ送ル、元々様昨日御見分延引ニ付泉屋

迄聞合差遣勸化帳泉屋方表具師へ誂被呉候

様頼遣、律師様川合ニ御逗留之趣ニ付大雅

先生軸物箱書付頼并書状伊古便リニ差遣ス

大久保山付徳次跡役御沙汰有之ニ付、夜山崎へ集会

六月五日 風雨

六月六日 曇

夕方西向寺和尚入来酒出ス、夜上野兄君入来

六月七日 晴

快氣祝ひ赤飯上組配、夕方石溪君入来、夜上野兄君入来

六月八日 快晴

大森へ赤飯配、上組歩行初、山神社参詣

律師様川合御逗留ニ付大雅堂書画箱書付相頼

遣則出来参ル、全唐紙二幅贈被下、神宮寺額

面下書到来、本城氏養子貰受ニ此角社中へ

宗十君差向ル、西善寺にて酒茶出ル

大久保山山付元田徳次跡役評義当方へ集会

乍恐以書付奉願上候

芦谷栄太郎

大江新太郎

橋本吉泰

右ハ大久保山山付元田徳次跡役書面之者共之内へ御賢慮を以
被仰付可被下候様仕度奉願上候、以上

未六月

山組頭連印

御役所

六月九日 快晴

昼後金毘羅宮地藏尊へ参詣并墓参

致ス

六月十日 雨

囲米売立会所立会終日詰ル

六月十一日 雨

五月分石代上納ニ丈一郎差出ス、大田表具屋来ル

雪峰和尚半切一行物・梅室岱年合筆半切右二幅

と三石翁書画三枚・高泉和尚半切ヲイ老貫百文添

交易、右二ふく料凡老分式朱位ニ当ル

普賢院方献札并当方へ御守御供物到来

六月十二日 雨

靈鏡院正當ニ付、午刻西善寺老僧呼誦經

宗十君方書状到来

六月十三日 朝五ツ時方大雨満水

出水ニ付所々川岸崩落ル

昼後春宗書画持参、夜寄会

六月十四日 曇折々小雨

戸樋懸弥三郎・周吉雇、多作・繁平手伝

宗助来ル、竹田菊竹と雪舟布袋と交易

六月十五日 雨後曇

大住様御立寄長話、夜準提法三座

古銭七福神八卦十二支大銭右二枚大住様へ上ル

六月十六日 曇

腰痛ニて終日臥

六月十七日 快晴

同断

六月十八日 朝小雨風アリ後快晴

清水寺法印入来、仮修復之義嶋田庄五郎様方心付之義談有之

妙恵童女正当ニ付法印回向頼御齋出ス、布施六分

六月十九日 晴

清水寺御見分として元々様森徳三郎様并熊谷三左衛門殿

・田儀屋三次・泉屋勘助・泉屋弥右衛門御召連御登山有之

年寄皆々差支、小割市之助・横田弥太郎兩人差出ス

六月廿日 晴

昨日御見分御礼として御両家へ橋本氏被下候

菜蒔今日方はしめる

夕方汲月君上博多屋へ被来、夜ニ入野庵へ入来茶話深更

臥 懸物山陽画讃、空谷律師筆

六月廿一日 快晴、土用ニ入

夕前方石溪子・汲月君入来、上野兄君菓子茶出ス

老母病氣、今昼頃方発、見舞人有

六月廿二日 快晴、暑し

汲月君歸去、莊兵衛作阿弥陀堂小金用立

六月廿三日 快晴

竹田画桃李園図山屋方到来

六月廿四日 快晴

石樓師全唐紙十歳重句*^(天)〇度山霖雨*と

二ふく大田豊吉表具調来、料拾匁

種痘謝義金百疋并貞市・惣四郎分謝義此方方致

遣ス、百文銭五枚右小泉屋迄為持置

六月廿五日 快晴風アリ

六月廿六日 快晴風アリ

六月廿七日 快晴風アリ、夜五ツ時方雨

奈良漬粕出シ配ル

六月廿八日 快晴

六月廿九日 快晴風アリ

泉屋主人来ル、昼後帰らる

六月晦日 快晴、夜四ツ時方雨風アリ

名越祓城上社へ幸太郎参詣、山神社へ

子供連一同参詣

七月朔日 曇、午刻方雨、夜快晴

当日礼廻り

七月二日 曇、夜雨

御代官様大坂方御帰陣ニ付橋本忠三郎并定使老人

・町組頭式人・山付三人萩原迄御迎ニ出ル

七月三日 大雨、午刻方止

御帰陣恐悦山組頭^并外役之者惣代^ニて出ル

川井様御入来茶話、増田先生入来おりき頭瘡

治療頼ム

七月四日 折々雨

すゝ払いたす

夜上野氏迄行、繁花山当様シイタス

七月五日 折々雨

米売立立会、歩銀勘定

七月六日 折々雨、夕方大雨

鹿野弾藏様御組頭役被蒙仰候趣、昨日

御書付到来^ニ付御悦として樽式^又・肴三^又

差出ス、病後いまた出森不致^ニ付、使丈一郎

差遣、式十五代薄茶小半斤泉屋^方

当借、夕方七夕祭飾イタス

七月七日 大雨、巳刻^方止

昼後近所礼廻り、夫^方下組へ病後挨拶

^ニ出大住様迄行、夜五ツ時過帰ル

七月八日 快晴

藤井様・多久様入来茶点、暫御咄有之

少々御馳走等出ス、銀山中山へ普請悦ひ

蓬萊*為持、大住様へ一粒金丹五粒呈上

夜^ニ入上野兄君・石溪君入来

七月九日 快晴、暑厳

一昨日^方諸注文認初ル

大田豊吉書画持参、伊孚九横物・呉春

梅と江月半切ヲイ壱分式朱ソエ交易

二フク料凡三分式朱

七月十日 快晴

朝^方多忙、注文認等^ニて晩天迄詰ル

七月十一日 快晴、夕前小雨、夜曇

多忙、右同断

七月十二日 曇折々小雨

多忙、清水寺勸化願御下知有之御触書出候由

泉屋^方被申越、明朝御礼廻り御台所^并両元^へ

へ法印・高橋同道被出候積

七月十三日 快晴

多忙、仏前飾イタス

七月十四日 快晴

昼迄眠臥、昼後墓参

七月十五日 曇後晴、夜月そく皆既四ツ時過

晩天礼廻り、上組歩行、下組へハ幸太郎遣ス

準提法修行、夕^方夜へ懸三座

七月十六日 曇、辰刻^方折々雨後快晴

七月十七日 快晴 雨一夜 はや初秋の 瀬音哉

昼後上野兄君入来 月に灯に あかるき町や 盆らしき

草の戸の 灯もうとからず 盆の月

七月十八日 快晴

盆礼兼病後挨拶旁朝^方大森へ行、先々

ニて点茶馳走有之、夜ニ入帰宅

七月十九日 快晴

此頃世間一統コロトイフ悪病流行、近村ニも数々有之由

ニ而今宮神祈禱神幸小前一同方願出候趣町組頭被申

出、去ル十六日夜方祈念有之、初穂諸入用拾五六貫文位

懸り候趣、谷々小前出錢致候、山組頭五人之分ハ先例

之通六匁ハ中間方出シ、六匁ハ銘々手元方出シ、都合老貫

貳百文年寄・山組頭初穂として社頭へ為持遣

七月廿日 辰刻大雨後曇

昨夜増田先生入来逗留

今宮神御神幸町中無残相済

おけん出初致サス

七月廿一日 晴

夕方西善老僧入来点茶

七月廿二日 快晴

髪結、福間平蔵病死

夕方西善老僧請待先祖祭り

七月廿三日 快晴折々曇

清水寺勸化銀山方御記帳相済昨夜泉屋方被為持候ニ付

今朝礼廻り御組頭御三軒・木屋頭小頭衆へ罷出候、帰懸

川北ニて馳走、夜地藏尊祭賑々敷

乍恐以書付御届申上候

大谷下組町組頭福間平蔵儀去ル廿二日病死仕候、右場所当分

小割市之助へ兼帯被仰付被下候様仕度奉願上候、此段乍恐以書付

御届申上候、以上

未七月

年寄連印

銀山方

御役所

七月廿四日 快晴

朝山町役人一同平山師惣代会所へ呼集、清水寺記帳之

義及談候、今日繁花山初荷払、灰吹廿四匁余

出ル、夜ニ入帰ル

七月廿五日 雨

昼迄米売立会、清水寺記帳山師印形昼後方

取ル

七月廿六日 快晴

勸化帳屋後川北へ為持ル、繁花山勘定立会

中屋迄行

当町休谷好太郎兄松太郎と申者先年家出致候ニ付

去ル亥年除帳ニ相成候所、今般浜原村ニて相煩候趣同村方

申参候ニ付返書

御紙面致拝見候、各様弥御安全奉珍賀候、然ハ当町増蔵と申■

其御村へ一宿致候所相煩歩行不相叶段々御養生被遣候へ共

未タ全快不致候ニ付当町へ引取候様御申越候へ共、当町ニ而ハ

増蔵と申者近来居不申候、御使方承候へハ元名松太郎と申候由

若同人義ニ候へハ九ヶ年已然独身ニて他出致、其段御役所へ御届

申上行衛不相知候ニ付除帳相成候間、当時此方人別ニ無之候

間村方御作法之通御取計可然被存候、右用答如此御座候、以上

七月廿六日

銀山町役人

浜原村

御役人中

七月廿七日 快晴

八朔飾作花イタス、夕方啓一呼出他出過急申付

七月廿八日 快晴、暑強

朝礼廻り、廟参、今日地方御呼出ニ付小割市之助出候処

浜原村方松太郎義御願申上候由ニ付浜原村と熟談致

可申旨御沙汰有之候ニ付、早速評義之上親類組合呼出

引取方申付ル

尾波房兵衛病死致候ニ付作平悔ニ差遣、齋米三升・菓子壹匁・せん香五

七月廿九日 快晴、暑強

雛棚飾ル、新切山方呼ニ参候ニ付罷出候処、来月朔日方

灰吹銀百目ニ付御手当三拾目ツ、被仰付候段被仰聞候

八月朔日 快晴、暑強

未明方起、御役所へ御礼ニ出ル、昼後上山礼、夕方米助方質見

八月二日 快晴、暑つよし、午刻方風

芦雪三幅対宗助方見せる、竹田絹本山水・竹田半切

・菊竹絵瀬戸茶碗と交易

八月三日 快晴

本城祝言一条相談ニ大住様へ行、清水寺一条ニ付川北へ行

八月四日 快晴

差上申御届書之事

銀山町龍昌寺逸庵義近来病身ニ而寺役難相勤

候ニ付今般隱居仕、後住之義ハ粕淵村圓光寺

泰観長老江相定候積、配末寺院并旦那一同

熟談仕間此段以書付御届申上候、以上

未八月

銀山町

龍昌寺

逸庵

粕淵村

圓光寺

泰観

旦那惣代大森町

清太郎

両

御役所

奥書取次印形年寄肝煎当役

夕方上野氏へ行

八月五日 晴折々曇、夜強雨

二百十日当日至而穩也、昨夜市原老母病死屋内

夜同方へ勤ル

八月六日 曇折々小雨

朝看経仕舞、市原葬式ニ行

近来様シ人人別ニ候間取調可申付旨、吹方御懸方

被仰聞候ニ付利平・貞六兩人江申付ル

清水寺寄進懸札場積大工吉助へ相談

八月七日 快晴

三河屋新七書画持参、夕方勸化帳七冊泉屋より

到来、夜上野行へ行

八月八日 曇、夜風出る

勸化帳序文写、利右衛門願筋利解

八月九日 曇

本城養子入家之義天野・橋本へ談_ニ行

勸化帳序文認_ニ長福寺和尚相頼早朝_ヲ入来

抱一公御筆蓬萊山_ニ老軸新七持参、交易品

唐画寿老人ヲイ金式分添右料凡式両_ニ老分位

八月十日 快晴

本城養子入家通達久利行恒石崎氏へ書状為持ル

勸化帳認長福寺和尚早朝_ヲ入来、昨今兩日三冊調フ

銀山方_ヲ御書付到来昼後藤井様御宅迄出候所、昨九日八ツ時

御奥御舍弟周助様御死去被遊候、此度ハ都_而御質素

ニ付御悔山町役人惣代明十一日朝六ツ半時御葬式之節

年寄_者老_者人・定使_者老_者人・町組頭_者式_者人・山付_者老_者人可罷出、寺院

老宗_者老_者ヶ寺ツ、罷出候様可取計旨被仰渡候、左之通

今夕御悔山崎・樋高・松本市之丞・原田秋三・布川国次郎

明十一日高橋猶之丞・上野清十・小割市之助・横田弥太郎・長谷廣三郎

銀山町禅宗龍昌寺役僧・天河内村善興寺・浄土宗惣代極樂寺

・真言宗惣代清水寺・法花宗惣代本經寺・真宗惣代順勝寺右

之通藤井様迄届ル

八月十一日 曇、申刻_方雨

清水寺本堂こじ引積_ニ孫右衛門・吉助

・忠平呼、立会高橋・門脇・川北・拙者と四人

夜_ニ入帰ル

八月十二日 雨、夜風

八月十三日 雨風あり

新七来、唐津人形手前山右茶碗式と交

易呉春梅唐金水入廣せ五匁都合式

ニて料式分式朱位

八月十四日 晴

朝大住様迄本城祝言相談_ニ行、昼後包物

八月十五日 快晴

朝本城へ行、昼後_方月並修行、仏前飾日の内

老座夜二座勤休足

八月十六日 快晴

本城養子波子千代延氏_ヲ今日入家有之候_ニ付

朝_方同家へ詰早晚入来、祝義相整暁天帰宅

八月十七日 快晴

昼迄臥、昼後_方本城へ行

八月十八日 快晴、未刻_方雨

朝本城へ行、祝言立会仲人江津神代屋高橋常陸

之助様_并人足今朝被帰ル、見送昼前帰宅

八月十九日 雨

夜亀山えひす講へ行

八月廿日 快晴

昼後_方石溪君・橘園君入来茶話

八月廿一日 曇、夜雨

夕方多作へ招ル

八月廿二日 雨

八月廿三日 雨

八月廿四日 朝曇、後晴

昼後大住様迄行

八月廿五日 快晴

今宮様御祈禱御幸先日有之候^{ニ付}而ハ

近村ハ悪病流行^{ニ候}得共当所ハ無難^{ニ付}尚又

御礼御祈禱昨廿四日夜方今晚迄修行神主

中へ申談年寄方御初穂^{壹貫五百文上ル}、当方方

御神酒^{壹樽・初尾百文錢三枚上ル}

安太改名宗吉を以頼候^{ニ付}、今晚兩人呼盃

致啓藏と改名いたし候

八月廿六日 快晴曇

山神社頭昨夜御祈禱之後小盗人這入候や

さいせん盜取幣其外籌等へ火を付拝殿柱

壹本少々火移り候へ共自然と消候趣^{ニ候}由

神主中内々被申出、上野兩所・樋高見分之上直シ方

出来申候

清水寺財木^{ニ御}林松少々破シ之分御下ケ願度川見分^ニ

布川小割差向ル、木引米助召連

八月廿七日 曇 夕上野氏へ御非時相伴^{ニ行}

本城氏養子出初有之、橋本氏同道也

壓後新七人來永真之虎横物を光東福祿春^ニ

サ^ニ壹分式朱添來易、料式兩^ニ半^ニ破談

八月廿八日 快晴

朝龍昌寺へ普山悦^{ニ行}御齋出ル札式夕、夜上野
氏天野氏入來

八月廿九日 曇

夫食養育渡方立会、昼後本城氏盃^{ニ招}ク

清水寺筆工料払引当金^{壹兩}泉屋へ為持ル、子市太郎

九月朔日 晴曇不定

山神社參礼廻り西善寺へ見舞、夕方方宮橋本へ呼ル

相客土州真幸先生親子・本城・天野氏

覚

一、錢四拾五貫六百九拾五文

此丁錢四十^{壹貫百廿六文}

右ハ当春稼人一同^江被下候味噌代錢書面之通御

渡被為遊慥奉請取候、以上

未九月 山組頭連印

年寄

覚

一、錢五拾六貫八百九十文 圓米売立欠米代

一、同式貫八百四十三文 巳年買請米代御上納銀懸入

〆五拾九貫七百三十三文

此丁錢

右ハ去ル巳年買請米百石山内一同^江売渡候欠米代

并御上納銀懸入共御勘弁被成下、難有書面之通

慥奉受取候、以上

未九月 年寄連印

九月二日 曇後快晴

間歩請差添囲米已年百石分勘定付差出し

相済、去午年分当春^方売立代之内丁錢

七百貫文御兩替申上ル、長次郎土蔵御勘弁願

清水寺再建^ニ付垣松之内立枯等内見致

拾三本程御下^ケ相願置、同寺諸払引当

拝借金左之通願上、即刻御下^ニ相成

拝借仕御金証文之事

一、御金拾五兩 来ル十二月廿日限之積

年寄一同・定使兩人・布川・清水寺連印

銀山方宛

拝借仕御金証文之事

一、御金拾五兩

右願上証文差上ル

右証文差上ル、歸り懸川北へ寄、夜四ツ前迄清

水寺一条相談

九月三日 快晴、身成金期月

昼後上野氏へ行、昨日被仰聞候義并清水寺一条

詰廣吉呼寄清水寺境内松木湯里村新平へ

先年売渡有之候一条取締申談、夜国吉呼出

右同断申聞置

天野氏へ先日^方土佐ノ国神主野村真幸と申

国学歌人滞留^ニ付幸太郎実名并^二

銀山長歌相頼置候所出来為持来候^ニ付、昼後

礼旁天野へ行、幸太郎^方祝義金式朱・長歌礼

金式朱・無名異五匁先生へ持参致ス

九月四日 快晴

昼後繁花山敷入致ス、夜泉屋^方書状到来

返書別^ニ留置^ヘ清水寺丸柱木当櫓見積米助昼迄歩行^ヘ

九月五日 快晴

福神山下^リ根戸留山損シ好助二番^ニ行

候所出不申^ニ付、夕暮^方銀堀小供取明致

夜五ツ時分上ル、新切御木屋へ見舞^ニ出ル、尚又

同役中一同無難^ニ上候悦^ニ行

狩野永真虎横物・新七質入之品^ニ候処

光貞福祿寿^ニヲイ壱分式朱添交易凡式兩位

九月六日 快晴、夜四ツ時^方雨

昨日^方今日^江栄泉寺^ニおゐて最勝会修行有之^ニ付

昨日御札御初穂為持置差支^ニ付参詣不致

帳合致ス川北^方書状到来、清水寺松木買戻シ御定

法為知有之、昨夜千代延^方書状到来^ニ付今晚

天野へ内談^ニ行、諸職人積書古助^方出預り置

九月七日 雨

夕方上野氏入来有之

九月八日 曇

最勝会御守御供物栄泉寺^方到来

買戻松一条取扱方廣吉へ内々申談、明後十日集会

之趣法印へ談、同役中へも申触、川北へ書状差遣候

備中へ便り有之趣川北方申参候ニ付、普賢院へ

御札箱相返、書状并天尊前へ供物料老朱添川北

迄出し置

九月九日 曇、四ツ時大地震、申刻方雨

朝神仏拝済神供備、夫方大住様迄節句

礼見舞旁行午刻過歸ル、今日ハ御代官様

備中倉敷御毛見御留主ニ付御礼無之、一昨

七日御発駕ニ候得共御沙汰無之ニ付御暇乞御見送なし

九月十日 曇、午刻過方雨、夜地震度々有ル

美のや新助書画持参、清水寺積り書川北へ

取ニ遣シ雛形川北方被差越候ニ付巨細ニ積書

致候様吉助へ申聞ル、勸化帳序文執筆

長福寺和尚へ相頼候ニ付礼金貳朱今日直渡

不入作香箱ミのや持参交易百拙和尚立物

ヲ貳朱添

九月十一日 雨後曇、午刻前大地震、前後少々ツ、度々有之

九月十二日 曇後晴、夜五ツ時方雨、夜地震度々有之

囲米売渡当番吉浦道具屋来、夜石溪子入来

九月十三日 小雨、朝地震少シ有

西善寺老僧請待誦經、昼後方清水寺一条立会

会所門脇氏夜九ツ時帰宅

九月十四日 晴

繁花山荷弘立会并注文認ル

九月十五日 曇、未刻地震、申刻方雨

朝垣松之内清水寺へ御下之義追願ニ行

長福寺普山ニ招ル、悦式夕、栄泉寺方丈

来ル廿一日九州へ御越之由ニ付餞別金老朱

夜準提法三座修

九月十六日 曇、夜晴、戌刻大地震

祭礼幟花調手伝、出店平市・啓一・周吉

注文認ル、囲米直段御勘弁受書小前惣代

会所へ呼出受印取

九月十七日 曇

注文通ひ引合、夜天野・上野入来

九月十八日 雨

祭前受引多用

九月十九日 朝雨後止、午刻方快晴

城上神社御祭礼御神幸無滞相済

九月廿日 快晴

えひす講当番相勤

宝築替宗四郎外人足来ル

九月廿一日 快晴

小松地村毛見、当年ハ病後ニ付代人多作

・宗四郎差遣、拾壹俵半近平、七俵折平

九月廿二日 快晴、夜雨

床直シ、吉助親子来ル

九月廿三日 曇後晴、夜雨

羅漢寺大忍様請待準提尊修法并最勝王經

真読朝方終日、夕方川北主人来、森澄様方内々御尋向有之由承ル、夜ニ入被帰候

今日新切山ニおゐて貫高調有之、本銀廿八貫目山方三割増、十一月晦日立之積御義定今日ハ御祈祷ニ付不勤

九月廿四日 曇

昼後昆布山橋本氏へ行、森澄様方御尋之義尋合ス、夫方天野・橋本へ行、本城書類一条談合、夜ニ入上野兄入来

九月廿五日 快晴

朝本城主人入来、右書類一条相談向本城方呼ニ参行、夜ニ入帰ル、刺賀圓光寺和尚入来、長安寺兼帶書付持参有之

九月廿六日 快晴

長安寺兼帶刺賀村圓光寺方書面奥書致ス
昼後端山勘定立会上野氏へ行

新横相敷内存寄場所森澄様方御尋合有之

ニ付布川富士呼寄聞合候所、四丁目東順ハ新切山拾九番鉉納前ニて存寄至而厚場所之由福神山亥ノ三東之かこり之由ニ有之候

九月廿七日 快晴、夕方曇、夜半頃方大雨朝方多用、夜ニ入家内一同宮参致ス

清水寺勸化一条ニ付御用達鉄山師船持惣代大吉屋へ集会之由ニ付銀山方挨拶致し候様ニ

泉屋方申参、長谷廣三郎・三宅藤十兩人差出ス
九月廿八日 雨昼後方止曇、夜半過ぎあられふる

朝上野迄礼ニ行、昼後方売場多用、社頭ニて暮前方神能有之、夜ニ入浅利屋へ招ル
九月廿九日 快晴

午刻上野・山崎両兄出店祭後残物ニて招ク
昼後上博多屋へ招ル

九月晦日 朝雨後快晴
御番所方へ暇乞ニ行、夕方増田氏入来酒出ス
戸藏村毛見多作・宗四郎差向ル

十月朔日 快晴、午刻過方初時々度々雷鳴も度々有之

清水寺へ郡中惣代参詣ニ付役人代三宅藤十差出す、御陣羽織御扇子ハ伺済ニ無之候而ハ開帳不致段申談、軸類其外之宝物開帳致候様藤十へ申含遣、其通為取計申候

一時雨 過て明るき 夕日かな
十月二日 快晴

昼後大住様へ御全快出勤悦ニ行御馳走頂長次郎土藏直シ方積書出置、垣松一条御含願置、森澄様方山方之義御尋之返答内々申上置、夜五ツ半時帰ル、玉置氏へ尋ル

十月三日 晴、夜大風雨
山組頭御呼出ニ付高橋被出ル、無名異世話方当分山組頭へ

被仰付

十月四日 大風後快晴

御取越相勤朝方仏前飾

十月五日 快晴

朝裏目所立会、大田道具屋来、檀山斐老人画

老幅交易品春水書二枚廿匁、景文秋草金老分

・守貫富士拾匁ヲイ拾匁都合五十八匁位ニ当ル

昼後番所廻勤、夕方玉置様入来点茶夜五ツ過

歸去、今日大田組之衆清水寺勸化一条ニ付大田

工屋へ集会之由ニ付当所役人代三宅藤十・大森町

年寄世話方代原屋梁二郎兩人差向ル

十月六日 曇、夕方方雨

昼後川北氏へ行、勸化一条談合致ス

十月七日 雨

囲米売立当番立会、夜上野氏へ行

十月八日 雨

御役所方御呼出ニ付罷出候所、福岡平蔵不納之義

被仰渡候、垣松立枯尺廻り取調可申上旨被仰聞

長二郎古土蔵御買上修復被仰付候

天社山小川兵市方借受候約定

十月九日 雨

天社山借受候而稼方致度段此方代人丈一郎と

持主兵市と双方方山組頭へ願出置候

普賢院方献札并当方へ御守御供川北方

到来

十月十日 快晴

昼後極楽寺金毘羅宮へ参詣

十月十一日 快晴

囲米直下ケ御勘弁願ニ御組頭方へ罷出ル、川北氏へ立寄ル

出店いわ病死、久ほ喜下代来

十月十二日 快晴、夜時雨

朝、いわ葬式

十月十三日 朝曇後快晴、夜半時雨

万田地蔵尊流水灌頂ニ仁万へ行、梅二郎・安次連ル、御番

所長野氏へ訪点茶、夜ニ入帰宅、今日山組頭・定使・町組頭

・五ヶ山山付老役老人ツ、御呼出、灰吹手当御増方八拾匁之

積囲米老升ニ付稼人吹屋行へハ九拾文ツ、明り方之者

老升ニ付百文ツ、御直下被仰付候間、出灰吹進方有之候様

被仰渡、吹屋人足へ是迄之通御手当被下候段被仰渡

同夜稼人吹屋行明り方惣代之者会所へ呼出被仰渡之

趣申渡ス、桜間歩出鏈ヤキミ物ニ候得共近来払

底之品ニ付銀吹買入、正ミ老貫めニ付四百文荷払鏈老九

之買前式分吹ニ定買入候所、是迄買入多分積立有之候

ニ付御買上可被下段銀吹并稼人上野清十郎方願出有之候

此間中方段々取調行形申上置候所、今日之御下知にて

正ミ百貫目ニ付御手当五拾匁被下候段、買上直段ハ其

分取扱方先年鉛鏈御買上之振合ニ被仰付候

今日本城養子願書橋本次部殿出森有之

十月十四日 朝雨後曇

垣松立枯有之趣先日申上置候所、今日御見分として

中西松三郎様・高木 様御出役有之、本谷より清水寺へ御下り

本法寺上・安立寺上御見分、高橋富三郎・松本市之丞出役木引

米助・案内人足彦四郎差出ス、清水寺にて御弁当出ス

十月十五日 時雨風あられ

本城恰様御役所^并大森披露、夜川北^方書状来

梁二郎^方金式分式朱清水寺用ニ付日別之内

申参、月並修法三座

十月十六日 あられ

囲米切手改立会、染付水屋小瓶川井様世話

にて求、代金^壹分^為持ル

十月十七日 曇

昼後灰吹せり立御書付到来ニ付吹屋見廻り致ス

川北^方清水寺一条書状来ル、夜丹兵衛呼寄新横相

敷内尋方イタス

十月十八日 快晴、午刻^方曇小雨

川北へ昨日之返書藤十^ニ持せ差遣、夕方山方

一条書取茶同方へ為持ル

十月十九日 快晴

奥谷端山縄引手伝

十月廿日 大風雨

えひす講客丈市・多作・宗四郎・次平、跡弥三郎・周吉

仲間えひす講当番山崎へ幸太郎同道にて呼ル

十月廿一日 雨

ミのや新助・俊平来、丈山翁五字一行兎白書と

交易、相あミ小横物・日野大納言懷紙・妙喜庵半切

ヲイ式朱三両^壹分位

十月廿二日 曇

灰吹判打取調不進^ニ付、早朝^方出森申上ル、御買上之

土蔵代金五兩受取帰ル

十月廿三日 晴

銀吹御取調として大住様・中山様御登山於神宮寺御

糺有之御帰り御立寄酒飯出ス、夕方御帰り

十月廿四日 快晴

清水寺一条^ニ付早朝^方出森、夜五ツ時帰ル

十月廿五日 快晴

右同断

十月廿六日 快晴

右同断

十月廿七日 快晴、夜時雨

昼前^方布野氏来訪逗留

十月廿八日 快晴、夕方^方雨

口達

此度新規鉄銭吹方被 仰付、右鉄銭^并百文銭兩様を以

銅小銭と引替候積、銅小銭拾貫文^ニ付五貫文ツ、増歩

御手当として被下、外^ニ兩替屋世話料として引替

高之五分被下候積、尤表立御触^者不被 仰^出■候旨

被仰渡有之候間、村々心得迄申達置候、引替方等之
義者追_而可申渡間、其段郡中惣代共方組合限
申通置候様可致事

未十月

一、鉄銭之義_者是迄之通九拾文を以百文_ニ請引之事
一、銅銭六拾文、是_者当節_方百文_ニ受引之事
右ハ郡中惣代_方地方御役所_江申立御聞濟_ニ
相成候間其旨相心得、小前之もの_江も右之段
可申達、追_而此書付可返上もの也

銀山方

未十月廿八日 御役所

銀山町

役人

右之通写いたし、早速上組・下組・本谷・柑子谷へ為触候
十月廿九日 朝雨、後晴

釈妙好童女墓所先年所替有之候由_ニ付、尚又
今般元之所へ移戻度施餓鬼勤度旨

龍昌寺泰観方丈へ先日頼置、今日彼方_ニて

修行有之、拙と幸太郎同道_ニ而参詣

御布施百疋・齋米三升・寺参老匁・血脈札老朱・備物料式匁
ろうそく・せん香上ル、夕方西善寺老僧非時

十一月朔日 曇

有銭調、昼後山神社参詣、夜寄会

十一月二日 曇

朝大住様迄裏目師伺_ニ行

今日墓所移戻致候_ニ付龍昌寺_方長老様入来、墓

参有之仏前勤有之、布施雲札老匁

十一月三日 曇

囲米売立当番終日出役

十一月四日 曇、夜時雨

庄助吉浦大向懸物持参、義董人物之

二幅対交易、竹洞紅梅笠山山水ヲイ老部

式朱渡、都合式両老分位、夜灰吹調

十一月五日 快晴

大根引、川北氏入来

十一月六日 時雨

清水寺一条_ニ付代人国二郎・藤十出森

十一月七日 快晴

置さし好次郎来、小座敷表かへ、本城氏継目諸

向金子渡、清水寺積仕様諸職人一同登山

昨夜上野養子内祝言有之、今夕招レ悦旁行

夜西善寺内仏報恩講、寺参老匁・ろうそく二丁

夜_ニ入西善寺へ行

十一月八日 大風あられ雨

昼後西善寺へ行、菓子ノ茶湯有之

当未御直段素直段銀九拾匁六分式り外懸り物

清水寺一条_ニ付代人藤十出森

十一月九日

文市

買請米願書差出 村方願取次川北へ頼遣ス

村書拔_并有代金百疋ツ、式対同方へ差遣置

清水寺一条新助・梁二郎渡金沓両泉屋取かへ之分

今日返済為持ル、銀吹三人之者^江酒四斗五升

銀山方^方被下神宮寺^ニて吹方御見廻り中山庸藏様

高野大助様御立会御渡^ニ相成、上野氏・拙立会

十一月十日 大風折々あられ

清水寺先年普請取締方之義相分り候ハ、早速

取調可申出旨昨夕御書付到来^ニ付上野氏当方へ

入来取調、文化年中之分書出ス

西善寺老僧入来萩笏茶碗と先方^方唐津

三嶋写茶碗交易致ス

十一月十一日 大風、夕方^方雪

巻紙拵、上野養子悦小倉袴地・樽肴二匁ツ、

酒造祈祷例年之通、橋本へ頼遣、初尾百足

右京柄脇差京吉持参、交易価沓兩位

十一月十二日 雪

判打吹屋見廻り、夜^ニ入上野へ行、御登灰吹不足

之分内密相談承ル

十一月十三日 雪

上宗白大茶碗式持参、代八百文之内四百文ハ

茂吉酒代之内へ入札四匁相渡

川北主人ゆのつ戻立寄れ、清水寺古書類諸堂間数

書上之扣沓通用立相渡

十一月十四日 折々雪

小泉鉛三拾七貫七百日御渡^ニ相成、市之助

吹所^ニ而鉸灰吹有之立会

十一月十五日 曇

夜月並修行

例年酒造祈祷橋本へ頼、代参幸太郎

十一月十六日 曇

朝上野氏へ行、雲州へ細工銀買^ニ清市又蔵

両人差向ル、米代預り当方分之内四拾兩

相渡、夜順勝寺悔^ニ行

十一月十七日 快晴

囲米前上五拾石願上御切手受取^并吹屋人足共

御手当受取^ニ行、夜上野氏入来

十一月十八日 快晴

端山荷払上野氏へ行、煎茶道具入とていらん

籠おの百足^ニて春宗^ニて交易、ていらん渡

同夜上宗来、守貫富士横物代拾匁渡

折平今朝来、桶屋二人来ル

十一月十九日 晴

新酒造込初添

石州公御像奉懸献茶

十一月廿日 曇

朝献茶、夜出店えひす講^ニ行

十一月廿一日 雪後曇

屋後吹屋見廻り、鹿野様病中見舞菓子為持

昨日泉屋^方茶籠返ル、夕刻^方大住御氏へ被招行

茶事深更帰ル

十一月廿二日 あられ曇

風邪氣にて引籠

西林寺老母死去ニ付悔安次遣、香料老父外
老僧へゆへし・大根送ル

十一月廿三日 曇折々あられ

昼前方山屋来、本居翁半切・清暉雪中懸物
相談致ス、諸扣ニクワシ

十一月廿四日 あられ

鉛流し沢吉吹所にて為致立会、終日詰ル

夕方新七書画持参

十一月廿五日 快晴

米請取当番ニ行

十一月廿六日 快晴

夜泉屋へ行清水寺一条内話深更帰ル

十一月廿七日 快晴

米売立当番終日出勤、夜上野氏入来

十一月廿八日 雨

灰吹御宰領坂本様へ式匆・河嶋様へ三匆・岡元四郎様
へ三匆持参、詔物頼ム

昼後裏目所にて灰吹寄致夜ニ入帰ル

十一月廿九日 曇、冬至

灰吹銀御差立前にて多用、吹屋へ見廻る、詰ル、夜ニ入
本銀貫高都合四ツ時分判打差出シ帰宅致ス

十一月晦日 曇

おけん誕生祝餅搗方々へ配ル

繁花山当り様シ吉左右

十二月朔日 晴、夜雨風

礼廻り

十二月二日 曇

おけん誕生日祝客来致ス

十二月三日 曇、夜雨雪

十二月四日 曇折々雨

新酒売場出、例年之通得意先へ配ル、夕方方

繁花山荷払ニ行

十二月五日 曇

十二月六日 雪

夜上野氏へ行、稼方勘定

十二月七日 雪

上野氏親子・山崎氏招盃

十二月八日 雪

昼後西善寺へ行、夜同断

十二月九日 快晴

多用

十二月十日 曇

追為登判打午刻出来、夜藤十志義会

十二月十一日 快晴

多用、新屋志義取除会多作差向取銀

老貫九十九匁八分也

十二月十二日 快晴、寒造初添初ル

律師様河嶋様へ御逗留ニ付行、神宮寺額

謝義百足手前方菓子料式朱持参、書法

之書拝借、智永千字文律師へ用立

歩銀勘定高橋氏へ夕方方行、夜半帰ル

十二月十三日 雨

午刻西善寺老僧誦経、屋後端山当様シ

小割へ立会

十二月十四日 曇

銀吹御呼出差添、定例之通御手当被下候

繁花山荷払、夕方方立会、灰三十一匁余出ル

十二月十五日 晴

月並準提尊法三座

十二月十六日 雨

田畑帳調、清水寺懸札場庵絵図泉屋へ遣ス

十二月十七日 曇

囲米代勘定上野氏へ行、深更帰宅

十二月十八日 雪

在方懸寄勘定、夕方本城氏へ招ル

十二月十九日 雪

帳面調

十二月廿日 雪

同断

十二月廿一日 雪

同断、夜上野氏にて米勘定立会

十二月廿二日 雪

銀山方方上野氏・拙・上野清十郎・町組頭老人御呼出ニ付罷出候

清水寺普請方取締夫々掛り被仰付候、夜同役中

町組頭会所へ集会諸事相談

十二月廿三日 曇

夜ニ入上野氏同道にて大吉屋迄行、田儀屋・泉屋

呼寄諸事払方等評義深更帰ル

十二月廿四日 快晴

今夕も出森伺等致候積之处、風氣ニ付名代

弥太郎差出弥右衛門同道にて森澄様へ罷出、暮

払方伺之处一々訳書致入用帳御役所へ可差出

金子ハ銀山方にて拝借可致旨被仰聞候

財木仮小屋且又本尊住持仮住之義伺致ス

十二月廿五日 快晴

昨夜夜半過方餅搗折平・弥三郎・鶴次・為吉雇

夜ニ入右払方相談、泉屋へ藤十召連行、鶏鳴帰ル

十二月廿六日 快晴

通引合致ス

十二月廿七日 曇、夜雨

多用

十二月廿八日 快晴

多用、通・注文書出、夕方迄ニ済

御歳末御礼高橋氏出森定例之通御手当
被仰付候

十二月廿九日 雨

朝方多用、夜ニ入宝珠法、晦日讓念取越修
夫方上野へ歳末ニ行歸ル

十二月晦日 小雨

多用通夜、家内一同相揃ひ賑々敷
新年を迎る

はじめに

島根県教育委員会では、平成八年度から石見銀山遺跡の総合調査の一環として文献調査を実施し、平成一六年度（二〇〇四）からはその成果を報告書にまとめて発表している。高橋家文書については、後述するとおり平成一九年度（二〇〇七）に調査した後、平成三〇年（二〇一八）三月に「銀山覚書」の全文を翻刻し、『石見銀山歴史文献調査報告書¹³ 銀山師高橋家蔵銀山覚書』（以下『銀山覚書』と略記）として刊行した。従って、高橋家文書の史料を取り上げるのは本報告書で二度目だが、高橋家や高橋家文書については、『銀山覚書』所収の藤原雄高氏の解説¹に詳しく、また、平成二五年（二〇一三）には、今回翻刻した「年中日記」を使って、銀山町での祭礼や住民による文芸活動など、幕末の生活文化を仲野義文氏が論じている²。本稿ではこれらの先行研究を参照しつつ、「年中日記」の概要を述べたい。

1 高橋家の来歴

本史料を伝えた高橋家の来歴は、藤原雄高氏の研究によると次のとおりである。

宝暦年間（一七五一―一六三）に安濃郡川合村から銀山町に初代川村屋嘉兵衛が出職し、酒の小売業を営んだとされているが、この時点では鉾山経営には関わっていない。

鉾山経営に乗り出すのは四代目武右衛門からで、文化一二年（一八一五）に彼は柝畑谷に新間歩（久宝山）を開発し、山師として

「高橋」姓を名乗り始める。同人の代に酒の醸造を開始したほか、居宅新築・土蔵増築、田畑集積を進め、家の規模を拡大した。

これ以降、高橋家は銀山への関与を強め、文政一二年（一八二九）に柑子谷の町役人に四代目武右衛門が就任し、以後五代・六代目も一貫して同役を務めた。本史料の筆者でもある六代目富三郎は、弘化三年（一八四六）に下河原年寄見習、安政二年（一八五五）からは年寄本役を務めた。一方で、弘化三年に新切山引請山組頭見習、同六年（一八五九）からは山組頭本役を務めており、町方・山方両面で重要な役目を負った。

2 これまでの高橋家文書の調査状況

高橋家文書調査の先鞭を付けたのは村上直・田中圭一・江面龍雄編『江戸幕府石見銀山史料』（雄山閣、一九七八年）で、主に慶長年間の古文書一〇点が翻刻された。高橋家文書の内容が明らかになったのは、同書が初めてという³。

その後、昭和五九年度国庫補助事業として島根県教育委員会が実施した石見銀山に係る古文書調査の対象となり、四一四点が目録化され、昭和六〇年（一九八五）三月に刊行された（以下「昭和六〇年目録」という）⁴。その後、平成二〇年（二〇〇八）一月に、石見銀山歴史文献調査団が再び原本を調査しており、この時、昭和六〇目録のほぼ全点の現存が確認された⁵。今回の翻刻文は、この平成二〇年の調査時に撮影した画像に基づいている。

3 本史料の形態

高橋家文書は現在、石見銀山資料館に寄託されている。今回翻刻した「年中日記」もこれに含まれており、昭和六〇年目録の二〇七号「御用留」に当たる。形態は縦帳形式で、法量は縦二五・〇センチメートル、横一八・七センチメートルである。一部に虫損があるが、全体として保存状態は良好である。

ここで本史料のタイトルと執筆開始年について断っておきたい。まずタイトルについて。先述したとおり昭和六〇年目録では「御用留」となっているが、内容は高橋家六代目富三郎が付けた日記であり、目録のタイトルと内容に齟齬が生じている。今回紹介するに当たっては、実態に即したタイトルを付すことにしたが、本史料には表紙がなく（安政三年正月八日のものと思われる記事から始まっており、前欠であろう）、表紙から引用できなかった。ただ、安政四年正月元日条の直前に「安政四年丁巳年中日記」の表記があるので、これに基づき「年中日記」とした。

また執筆開始年だが、先述のとおり前欠であるため確定できない。しかし、一丁表の右肩に「安政三辰」の注記があるほか、現存部分開始直後の正月一三日条に「去卯年十月二日夜四ツ時江戸大地震」と、安政二年（一八五五）一〇月二日に発生した安政江戸地震が昨年に発生したとの記述があるので、本史料の冒頭部分は安政三年に当たることが明らかである。前欠部分がいつから始まっていたか不明だが、執筆開始年月日は現存部分に基づき、安政三年正月八日としておく。

4 本史料の性格・内容

本史料には安政三年正月八日から同六年一二月晦日までのほぼ毎日

（天気のみの日もある⁷⁾）の銀山町での出来事が簡潔かつ要領よく記述されている。その内容は自然災害・事件事故・病氣、出産・結婚などの通過儀礼、佐毘売山神社での祭礼などの年中行事、俳諧・茶の湯といった文芸活動など、多岐にわたる⁸⁾。このため、昭和六〇年目録の解題でも「前者（年中日記。引用者註。）は江戸時代後期の大森近辺の日常の様子を知る上で貴重な史料である」と評価されており⁹⁾、早くからその価値が認識されていたが、本史料を活用した研究は乏しく、平成二五年の仲野義文氏の論文に留まるようである。

具体的な内容のうち佐毘売山神社での祭礼や文芸活動については仲野義文氏の論文に譲り、本稿では筆者の関心に基づき、災害・天変記事について解説したい。

（1）地震

高橋富三郎が有感して記録した地震は二三回に及び、その発生日時は後掲のとおりである。特に安政五年一二月二日夜の二度の地震は「大地震」であって、家族を酒蔵に避難させ、火の元を確かめ、諸帳面・証文・現金を用意して一晚を明かしたとあるので、相当の揺れであったようだが、被害が生じた旨の記述はない。この地震について邑智郡築瀬村（現美郷町）の医師の日記「尾氏春秋」には、津和野藩が益田の高津に設置した蠟打場が倒壊して死者が出るなど、石見国西部での被害が大きいとある¹⁰⁾。

また、安政六年九月九日から同月一六日にかけて連続して地震が発生しており、特に九日・一日・一六日は「大地震」とある。ただし、前年一二月の地震のように避難した旨の記述はなく、普段通りの生活記事が地震記事に続くので、この地震でも被害は出なかったようである。九

日の地震は、石見国を震源とし、その規模はマグニチュード六・〇（六・五と推定されており、「尾氏春秋」などによると、浜田・周布・波佐・築瀬などで土砂崩れや家屋への被害が生じている¹¹⁾。

【地震発生日時】

安政三年六月十三日夕方七ツ時

安政四年八月一四日四ツ時

安政四年八月二五日朝五ツ半時

安政四年十一月一五日夜七ツ時

安政五年十二月二日夕六ツ時（三回）と夜五ツ半時（二回）

安政五年十二月三日夜（複数回）

安政六年九月九日四ツ時

安政六年九月一〇日夜（複数回）

安政六年九月一日午刻前

安政六年九月二日夜（複数回）

安政六年九月二三日朝

安政六年九月一五日未刻

安政六年九月一六日戌刻

（2）コレラ

安政五年は日本での二度目のコレラ流行年であり¹²⁾、石見国でも例外ではなかった。安政五年八月晦日条には、江戸の蘭学者杉田成卿が考案したというコレラ（痧病）の予防法と治療法を記した御触書が転写されている（ただし、治療法を試しても生存するのは一〇人に三、四人という）。直後の同年九月四日条には、世間に悪病流行し山内でも疫病が

少々流行中とあり、銀山にも感染が広がり始めていたようだ。翌六年夏になっても沈静化せず、同年七月一九日条には、世間に「コロリ」という悪病が流行し、近村でも数々発生していること、同年八月二五日条でも近村では悪病が流行しているところある。ただし当所は無難ともあり、銀山は比較的穏やかであったのかもしれない。

（3）彗星（帚星）

災害ではないが、災害の前兆として人々を不安に陥れた彗星の出現記事も確認できた。安政五年八月二六日条の「ほうきほし出ル、夕六ツ時頃戌亥之方へも出ル、尾ヲ引事凡八間位之よし、いまた見す」である。安政五年七月から八月にかけて出雲・石見両国を含む日本各地で彗星出現が報告されたが、ちょうどコレラの流行と重なったために二つを関連付けて考える者も多かった¹³⁾。ただし、高橋富三郎は「尾」が約八間に及ぶ彗星はまだ見えないと記しており、彗星の噂に接していたに留まる。

おわりに

このように、仲野義文氏が注目した幕末の銀山町で育まれた庶民文化だけでなく、地震が連続し、致死率の高い伝染病が広まる不安な世相も「年中日記」は伝えている。もともと「年中日記」の内容は多彩であり、これらはあくまでも一面に過ぎない。本史料が活用されて幕末の石見銀山の実態説明が進むことを期待して擲筆する。

1 『銀山覚書』所収の「解題「銀山師高橋家蔵銀山覚書」について

て」（藤原雄高執筆）。以下、本稿で引用する藤原雄高氏の見解は全て同論文による。

2 仲野義文「石見銀山の文化とその基層」（竹田和夫編『アジア遊学 一六六 歴史のなかの金・銀・銅』勉強出版、二〇一三年）。なお、本史料を活用した仲野義文氏の成果としては「石見銀山と梅」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』三、二〇一三年）もある。この論文では鉱山病に効果があると当時認識されていた梅が、代官所の指示で銀山町に植林されていた事実を明らかにしている。

3 前掲『江戸幕府石見銀山史料』の「序」（小葉田淳執筆）。

4 『石見銀山関係資料調査報告書』（島根県教育委員会、一九八五年）。

5 『石見銀山遺跡調査ノート』七（島根県教育委員会・大田市教育委員会、二〇〇八年）七頁。

6 「銀山方御役人辰年御掛場写」（辰年の銀山方役人（地役人）の職員名簿）から始まるが、安政四年一月九日条にも「巳年御掛り場」という安政四年の地役人職員名簿が記されている。

7 安政五年一月中旬から翌六年二月初旬までは病気のため特に記述が簡略になっている。

8 前掲仲野義文「石見銀山の文化とその基層」。

9 前掲『石見銀山関係資料調査報告書』三頁（松尾寿執筆）。

10 拙稿「前近代出雲・石見・隠岐災害記事目録」（島根県古代文化センター編『前近代島根県域における環境と人間』島根県教育委員会、二〇二〇年）。

11 前掲「前近代出雲・石見・隠岐災害記事目録」。

12 『国史大辞典』「コレラ」項（大塚恭男執筆）。

13 杉岳志「近世山陰の人々と天変」（前掲『前近代島根県域における環境と人間』所収）四六―四八頁。

令和5年（2023）3月発行
石見銀山歴史文献調査報告書18
銀山師高橋家藏年中日記

編集・発行 島根県教育委員会（文化財課）
〒690-8502 島根県松江市殿町1番地
Phone 0852-22-5642
印刷 島根印刷株式会社
〒699-0555 島根県出雲市斐川町坂田1664-7
Phone 0853-63-3500

